

この感(かん)を起(た)さしめん爲(ため)にせりエドワード六世(だいろくせい)時代の費目(ひいもく)は莫大(もくだい)なりき而(しか)して議會(ぎかい)は充分(じゅうぶん)之(これ)を供給(きゅうきやう)せざりしを以(もつ)て内閣(ないかく)は常(つね)に其(その)不足(じふそく)額(がく)を補(おぎな)はん爲(ため)會(かい)て顯理(けんり)八世(はつせい)の成功(せいこう)せる故(ゆゑ)智(ち)を襲(おそ)ふの已(や)むを得(え)ざるを(み)見たり即(すなは)ち寺院(じやういん)教會(かいわい)より御用金(ごようきん)を徵發(ちやうはつ)するもの是(こゝろ)なり徵發(ちやうはつ)は寧(な)ろ掠奪(りやくだつ)するに在(あ)り第一(だいいち)の徵發(ちやうはつ)は先(まづ)反抗(はんかう)の最(もと)も少(すく)なかるべき某人(かみん)追福(おひふく)の爲(ため)に建(た)られたる寺院(じやういん)より始(は)まれり此種(こゝろ)寺院(じやういん)は大(おほ)なる私立(りつりつ)教會(かいわい)の附邊(つらひ)に在(あ)る禮拜堂(らいはいだう)にして其(その)祭壇(まつりだん)は實(じつ)に其(その)建(た)立(た)立(た)者(しや)若(わか)しくは同胞(どうぱう)の供養(くうやう)の爲(ため)に設(た)けられたるものと稱(せう)す顯理(けんり)八世(はつせい)は殆(ほとん)ど議案(ぎあん)案(あん)として如上(じやうじやう)の寺院(じやういん)の寄附金(きよづきん)を使用(し)せんとせしが已(ま)にして王(わう)逝(し)き僅(わずか)に此事(こゝろ)なかりき是(こゝろ)れ實(じつ)にエドワード王(わう)の政(せい)府(ふ)が由(よし)て以(もつ)て乘(のり)すべ(べき)好寶庫(こうぼうこ)に非(あら)ずや是(こゝろ)に於(お)て内閣(ないかく)は顯理(けんり)八世(はつせい)の遂(ついで)げざりし此(こゝろ)寺院(じやういん)によりて活路(くわつろ)を求(もと)めんと計(はか)りたり即(すなは)ち公然(こつぜん)と此(こゝろ)目的(もくひく)を達(たつ)せんとするに在(あ)りて來(こ)此(こゝろ)寺院(じやういん)に關(かん)して傳(た)はれる迷信(めいしん)を打(た)破(は)するの要(よう)あり名(な)は迷信(めいしん)を破(や)ぶるに在(あ)りといふと雖(いへ)も其(その)實(じつ)は此(こゝろ)放肆(ほうし)なる政府(せいふ)の歳入(さいに)を補(おぎな)填(てん)するが爲(ため)に過(す)ぎず此(こゝろ)計(けい)畫(わ)に就(つ)てはクランマーも異論(いろん)なかりき然(しか)れども同大僧正(どうだいそうぢやう)は若(わか)し以上(いじやう)の寺院(じやういん)にして廢滅(はいめつ)に歸(かへ)せられなば其(その)收(しゆ)入(に)は政府(せいふ)に來(こ)らずして教會(かいわい)に往(ゆ)くべしと主張(しやうちやう)せりされば政府(せいふ)

は今(いま)や一時(いつじ)も躊躇(ちゆうちゆ)する事(こと)能(あた)はず育進(いくしん)してなりとも之(これ)を斷行(だんかう)せんと力(ちから)めたり吾人(われん)は之(これ)に關連(くわんれん)して更(さら)に甚(こゝろ)しき事實(じじふ)を發見(はつけん)すべし以上(いじやう)の寺院(じやういん)に於(お)ける寄附金(きよづきん)なるものは多(おほ)くは單(ただ)に諸學校(しよがく)の補助金(ほつじゆきん)に當(あ)てられたるものなるを以(もつ)て一旦(いつたん)政府(せいふ)に引上(ひきあ)げられたるが爲(ため)其(その)保助金(ほすけきん)杜絶(とつぜつ)に由(よし)り廢校(はいがく)の悲運(ひいん)に陥(お)りしも頗(おほ)る多(おほ)かりし事(こと)是(こゝろ)なり政府(せいふ)が此(こゝろ)寺院(じやういん)に對(たい)する財産(ざいぜん)押收(おししゆ)より得(え)たる一年(いちねん)の收(しゆ)入(に)は知るに由(よし)なきも聖(せい)保羅(ぱう)寺院(じやういん)に屬(ぞく)する小坊(せうぼう)四十七(しじゆ)にして其(その)歳入(さいに)のみにても十二萬圓(じふにまんえん)以上(いじやう)なりしといふを以(もつ)てすれば其(その)總額(そうがく)數(すう)百萬圓(ひやくまんえん)に上(あ)りたるは疑(うたが)なきなり次に來(こ)れる政府(せいふ)の手段(しゆんたん)は教會(かいわい)に對(たい)する劫掠(けつりやく)ともいふべきものなり是(こゝろ)れ俄鬼(がくき)の如(ごと)き顯理(けんり)八世(はつせい)にして尙(なほ)ほ敢(あへ)て爲(な)ざる所(ところ)たりしなり即(すなは)ち政府(せいふ)の委員(ゐんいん)は教會(かいわい)の聖壇(せいだん)を漁(う)りて其(その)金板(きんぱん)其他(か)を押收(おししゆ)する事(こと)となりカンタベリー寺院(じやういん)の如(ごと)きは一千五百五十年(いちせんごひゃうごじゆねん)一月(いちげつ)十六日(じふろくにち)先(まづ)劈(へ)頭(だう)に於(お)て其(その)襲來(しやくらい)を蒙(か)りたり次にリツチ、ダー公寺院(たうこうじやういん)亦然(しか)然(しか)るにチヌスター寺院(ぢんすたあじやういん)の牧師(ぼくし)等は其(その)寺院(じやういん)の財産(ざいぜん)に手(て)を觸(ふ)る、を禁(きん)せしかば違命(ちゐめい)の罪(つみ)を以(もつ)て一千五百五(いちせんごひゃうご)十三年(じゆしさん)二月(にがつ)十四日(じゆじふにち)を以(もつ)て獄(ごく)に投(な)せられたりかく政府(せいふ)は憚(おそ)る所(ところ)なく之(これ)を遂行(すいかう)し當時(たうじ)の教會(かいわい)は殆(ほとん)ど其(その)建(た)物(ぶつ)のみを除(のぞ)き至(いた)らざれば止(と)まざりき甚(こゝろ)だしきは屋上(おくじやう)より

は鉛板を猛烈せられ床上よりは黄銅板を扭取せられ書冊は其外皮を剝がれて賣却せられたり而して金銀板は鉛銅板と共に鑄て以て貨幣と爲したるか如き英國史上前にも後にも未だ曾て見ざる所とす聖壇及牧師用の飾物は其品物の餘りに佳ならざるものは蓋布懸布若しくは敷布と爲し稍々高價なるものは之を外人に販賣し荷も金鏡に代るべきものは片布斷布と雖も之を收拾するを忘れず彼等は堂々たる英國の執政者を以て最も醜むべき惡むべき政壇劫掠政策なるものを斷行して毫も耻つる所なし此の如き醜惡政策を行へる間に於てエドワードは天死せしが吾人はかゝる狼籍なる時代の中に於て尙ほ宗教改革上に於ける効果の見るべき事業ありしを忘るべからず

エドワード六世治下に於ける宗教上の最も重要なる事業とは何ぞ他なし英國教會の祈禱書の改訂是なり祈禱書の改訂は顯理八世の當時にも之ありき唯同王の晩年には牧師會議が此改訂に對して沈黙したるが爲に其進行一時停止したるのみ然るに新王即位後九箇月即ち千五百四十七年十一月十日を以て再び牧師會議を開き教會に於ける改革の斷行を大僧正に請願したり該請願書は直にクランマ

一の容る、所となりしを以て牧師會議は更に祈禱書の改訂につき其遂行に急ぎたり蓋し顯理八世の時代に於ては宗教上の儀禮は總て古代よりの慣例に準據され而してエドワード六世の時に至りても其改訓全く成る迄は是れ亦古式に倣ひ、拉典語を以て其通語と爲したりき、
 牧師會議は第一着として新古の兩式に依りて聖餐式を擧げん事を議會に請願して聽許せられたり次には總て英國式を以て行はんとするに在りしが、クランマー其他の重なる改革論者も從來の慣例として新式の中に拉典語を用ゐたり是事は改革に在りと雖も最も鄭重に處理すべき教典なるを以て急激に全然舊式を打破するの不利なるを知らばなり王は先づ改革委員として十三人の名智識大學匠を撰任したり其中には僧正七人監督牧師四人聖外執事一人と外にケムブリッジのトリニチー大學長あり同委員は千五百四十八年十一月二十四日の牧師會議に於て其意見を報告し次いで直に之を議會に提出せしが速に兩院を通過し又王の裁可を得たり而して此改正祈禱書は千五百四十九年七月九日より一般社會公衆に施行するものなるを布告せしが若し何れかの教會に於て之を復寫するを得る

に於ては同期日前に於て適用するも差支なき旨を追記せり、エドワード六世の第一祈禱書は後年爾查斯二世の當時に於て始めて完成せらる、迄其間に出でたる各種の改正祈禱書は皆模範を茲に取たり、案するに中世の祈禱書は其源を羅馬書及以弗書に多く發し殊にゴールの祈禱書は後者と直系の關係を有する者たり、當時の英國教會に用ゐたる祈禱書は詩篇讚美歌及雜歌より成り、一部は夜間に他の一部は早朝と夕刻とに用ひられたり、オーガスタチンが紀元五百九十八年を以て英國に來着するや、彼は當時羅馬に行はれたる祈禱書を齎したるに相違なし、然れども彼は途次ゴールに在りし際ゴールの祈禱書に接して英國教會將た古代既にゴール式を採用せるを察し、事を以てグレゴリー大王時の羅馬法玉に申告し、法玉は凡そ加特力教國中に於ては何れの法式なりとも其最も可なるものを採用すべき旨を達したれば其結果としてオーガスタチンは羅馬及びゴールの祈禱書を編纂したり、此祈禱書の根據は羅馬式にして之に日用上ゴールの慣例を加へたるものなり、斯くして英國教會は當初より特有の祈禱書を有し、決して他國より盲目的に輸入したるものには非ず、且つや其國民的獨立の精神は今や種々の形式に於て英倫

及び愛蘭の寺院に行はれつゝ、あり而して其用書中著るしきものをヨーク、サラム、ヘレフォード、エックスター、リンコルン、バンゴア、及アベルデイン等とし、殊に有名なるをサラムの祈禱書とし、千〇八十五年頃英國の法官たるオスマント僧正の起草に係るものなり、此書は樂譜讚歌其他に於て大に從來の教會音樂に改良を加へ、同僧正の寺院は當時他の模範として稱せられたり、されば此祈禱書は英國一般に行はれしのみならず、延いて大陸にも行はれたり、之を要するに中世紀に於ける祈禱書は之を四種に類別する事を得、今其大略を左に叙述すべし、

(一) 袖、袖、日課書、此書中には全一年間に於ける宗教上の儀禮一切を網羅し、順序正しく之を記して、其日其時の參考に供し、且つ之に要すべき祈禱文、讚美歌、詩篇等を指示し、其索引に便ならしむ、其宗教上の儀禮とは數に於て八箇條あり、紀元五百年代以來の慣例なり、所謂日課八箇條とは如何といふに

(1) 日出前の祈禱、即ち毎朝の禮拜にして、之には通例詩篇十二と日課數箇條あり

(2) 讚美歌、歌の祈禱に次ぎて唱ふる讚美歌にして、之にも定まれる詩篇、雅歌等あり、

(3) 朝禮日出後六時と七時との間に行ふ之にも定まれる詩篇あり

(4) 第三次禮拜、九時頃に行ふ

禮拜 (5) 午禮正午に行ふ禮拜 (6) 午後の禮拜下午三時に行ふ禮拜 (7) 暮拜日没前に行ふ禮拜 (8) 晚禱就寢時に行ふ禮拜何れも定まれる詩篇讚美歌あり、

(二) 袖衫祈禱書 此書中には主として教會内の典禮を記録せり即ち洗禮式結婚式患者の訪問其他會堂内に於て嚴守すべきもの禁制すべきもの等是なり、

(三) 教會定例書 此書には僧正牧師教會執事等の職務を記録せるものなり、

(四) 供養書 此書には讀んで字の如く供養に關する條規を示したり書中には主に供養の事項を記され外に基督降誕日より同慶日に至るこの福音教書將た一年中安息日に關する慣例臨時の宗規即ち結婚死亡其他の場合に就ての法式を擧げたり、

従前の祈禱書なるものは右の如く繁文縟禮と稱すべきものなりしが當時の改削に依りて一冊と爲し一週間の禮拜を僅に朝夕の二回と爲す事と爲れり從て之に引用する詩篇日課等も極めて單簡と爲り其細條は全く削除せられたり然るにエドワード六世の第二改訂祈禱書には此の如き變化ありしに關せず其十分の九迄は古代英國教會の拉典式祈禱書を踏襲せるものなり、

然れども千五百四十九年度の此改訂祈禱書は久しからずして急激なる改革派の攻撃を受けたり當時改革派の教徒漸く多く其勢力も侮るべからざるものありて當時改革派は謂へらく若し能ふべくんば根本的に此祈禱書を改訂すべしと攻撃者の首領はジョン・フーバーにして彼は曾て嚴格なるシスターシアン派の僧侶なりしが後にヅキングリ及バルリンドン等の急激なる改革論を奉ずるに至りしものなり彼は一千五百四十五年より四十九年迄大陸に在り親しく瑞士派の改革論に動かされ歸國するやソーマーセット伯付の牧師となり次いでエドワード王家に轉任せしものなり歸來彼は一朝にして牧師社會に大名を博し其改革論の英國教壇を動かす事固より少からず其教會に於ける諸慣例聖餐に關する諸條規の如き總て瑞士派の筆法を以て之に當りたり聖餐論に就てはルーテルの改革意見を以てして尙ほ其麵麩と葡萄酒とが精神的に直に基督の血肉と關係あるものなるを信せんとしたるに彼は單に基督を紀念するが爲なりといへるヅキングルの所設を以て之に對す舊慣例を見る事此の如く軽く從て其改革意見急激なれば輿論の反抗を受くる事の大なるは勿論其所なり是に於て彼は大に忌諱に觸れたるの

故を以て千五百五十一年入獄を申付けられたり然れども彼は衆生濟度の念禁せんと欲して禁ずる能はず姑く非基督教的と信せる儀禮をも曲げて之を容れ又之に違ふなきを誓ひしより彼は再び出で、更に其名高き改革派の驍將となり自ら英國の教壇を一掃するを以て任とせり形勢此の如くなれば風雲を望んで起つ之士亦少なしとせず牛津堡及ケムブリッヂの教授たるピーター、マーティン及マルチン、ブーサー等も各改革意見を提唱し殊にブーサーは十八章に亘る大論文彈劾論を草して改革派に寄與したるが此論文は彼の死去前僅に教箇月に於て脱稿せるものなり英國に於ける改革運動も既に大陸に於て起りたる運動と同じく極めて急激的にして此論文の如きも古代英國教會の祈禱書に反對して全然其舊例古格を打破し改革せんと欲せるものなり時にフーパーは牧師會議に於て改革意見の貫徹を期し只管エドワード王の歡心を買ひつゝ、あり既にして諸僧正等一般に清教徒派の改革意見を容れんとするに至り彼は從來提唱せる改革條項に關し暫く熟考の時日を與へられん事を同會議に要求したり、エドワード(時)に年甫めて十二歳はフーパーの猶豫申込を聞き大に憤激して曰く牧師會議にして改革を爲す

を快しとせざればフーパー自ら必要なる丈けの改革を爲すべしと王能くチエードル家を辱しめすといふべし勢ひ此の如しとすれば何をか猶豫すべしとせん、エドワード六世の第二祈禱書は立るに完成せられ千五百五十二年四月五日を以て議會を通過し同年十一月一日を以て第一祈禱書を廢する事と布告せり然るにエドワード王は千五百五十三年七月六日を以て没し舊教信者たる王妹メリー其後を繼きたるを以て此新祈禱書が前年の第一祈禱書を驅逐するに於て非常なる成功ありしとは信すべからざるに似たり抑も第二祈禱書に於ける重なる改削は從來廣く行はれたる聖餐式の廢棄に在り然るに一旦俄かにエドワード王の兇變に會す是れ改革派の一頓挫を見るべきなり、

エドワード王の治世即ち千五百五十二年より三年迄の間に於て宗教改革上の運動は此の如く急進的なりき而して同王の御世に於て更に注意すべきものは英國教會に關する法規編纂の舉に在り其委員は千五百五十一年の議會に於て同編纂を附托せられ爾後二年にして終了したり其之を報告するや時人評して曰く「たゞ英國々民の上に宿りたる殘忍なる精神の影なり」と此事業は主に宮中の侍臣等

に依りて成されたるものなるが若し牧師會議に附托したらんには更に好結果を見たりしなるべし千五百七十一年エリサベス朝に至り更に此編纂事業を起したるが其失敗に終りたる事は人間の凡手を以て上帝の大法に立ち入るさいふの外に吾人は何物をも其間に認むる事能はざるなり。

第十五章

メリー女王治下の舊教的反動

(自一千五百五十三年至一千五百五十八年)

吾人は前章に於てエドワード六世の政府が寺院に對して專制的政略を斷行したる結果大に國民の保守的反動を喚起したる狀況一斑を述べたりさて當時の保守派の論者は謂へらく顯理八世の改革以上に教會制度を變更せん事はエドワード王が須らく社會人心の趨向を察し之に對して王一家の所見の一致和合を自覺せられたる上ならでは其進行覺束なかるべしと然れどもエドワード王の政府は無頓着にも其當初の設計を遂行し此政策に不平なる老僧侶等を狩りて倫敦に引致し以て之を訊問に附したり此時ダー公の僧正タンスタルはタワーに幽閉せられ、ラルセスターのヒースとチャイユスターのデイとは共に新祈禱書を拒み寺院の聖壇を毀損せらるゝに反抗したるを以てフリートに押送せられたり倫敦の僧正ボンナーも極めて虐待せられたるもの、一人なり彼は新祈禱には同意せしも樞

密院に召喚せられ遂にフリートに押送せらる然れども千五百四十七年一般特赦ありしを以て彼は僅に數週間にして出獄するを得たり然るに千五百四十九年彼は再び禁錮を命せられ千五百五十三年メリー女王の即位するに及んで始めて自由の身と爲るを得たり、キンチエスターの僧正ガーディーナーもエドワード王の政府の爲に苦められたるもの、一人なり彼はワルセイ及顯理八世に歴任したる老人なるが彼は徹頭徹尾改革に反對したるのみか、ソーマーセット伯の蘇格蘭侵入を非難したるを以て大に同伯の惡む所となり又フリートに押送されたり、後ち一般大赦の際釋放されたるも其自由は自家閉門といふに在りき、然れども彼の元氣は老いて益々壯んなり、即ち又ソーマーセット伯及び其一味の徒黨に對して反抗する事強硬なりしかば、ガーディーナーの第二審問は開かれ極めて重きを以て刑せられタワに幽閉せられたり、此に至り彼の入獄はエドワード王の全治世を通じ前後五年九箇月に亘りたり、

他方面の反動は清教徒派の非禮的沒宗教的傾向の助長に在り、此等過激なる改革論者は蓋し當時の輕佻なる信徒をして之に雷同附和せしめ、彼等は社會上に於て、

殊に教會内の行動に於て、先進長老に對して毫も憚る所なく敬意を表するの念地を拂はんとするに至りたり、加之不眞實なる傾向を生じ詐欺は絶えず、歳入の上に行はれ、農夫は其華客を騙し、商賈は粗品を濫賣し、織布者は不正なる材料を用ゐて且つ恬として耻ぢざるに至る、所謂新教徒の運動は此の如く社會の風紀を紊亂するに足るものあるが、前章に於て述べたる如くフリーパーは彼がグラウセスターの僧正として改革運動に従事するや、英國古來の聖餐式に反對して破れたり、即ち其領袖者たるの人々が舊來の信條教規を守らざる事此の如しとすれば一般信徒が非宗教的行動を爲して意とせざるに至りしは怪しむに足らざるなり、從て倫敦の諸教會中には爭論紛議甚しきは格闘に訴へ時には騾馬奔り馬嘶き、教會は婉然たる焦熱地獄たりしの觀あり、聖波羅の寺院すら其尖塔は千五百六十一年に於て剝かれ而して僧正ビルキントンは其説教中に於て災禍は神の降し玉へるものならんを信すと公言せり、是れ寺院構内に於て如上の狼藉ありしをいふなり、時の教會修繕保護論中にいへる事あり、教會は屋蓋破れて雨露を蔽ふに由なく、鳩鳥其他不潔物を以て充たされたり、是を以て教會は祈禱の家たる代りに談話散策爭闘の家

將た樂人鷹犬の家たるに至れりと過激なる改革運動が如何に當時の風紀を破りたるかは今より追想するに足る是に於てか人平和を願ふ事切なり故に曰く古法は新法よりも可なりと、

改革運動に對する反抗の機運は他方面に於て更に有力なり即ちカーティナー及其一派の保守的愛國者は克蘭マー及其徒黨か英人の特性を棄て、大陸の改革運動に盲従したるを以て心大に穩かならず再び英人に復らん事を唱へたるに在り、英國特有の儀禮を打破してなりとも大陸の下風を仰かんとすといふ此事最も保守派を動かすに足れり即ち斯教徒の運動か當時社會の反抗を喚起し辭を保守派に與へたる所以なり、

吾人は清教徒に對する英國當時の排斥運動を記するには當然其排斥運動の中心たる、メリー女王の事蹟を叙べざるべからず抑も同女王は如何にして清教徒の排斥者舊教徒の擁護者を以て任ずるに至りしか同女王は夙に其生母たるカサリン女王の屈辱を目撃せる事十年而してカサリンの死後十年は痛く悲嘆の裡に呻吟せられたり彼女の父は其生母を離別してメリーは庶女なりと辱しめ彼女をば單

にメリー嬢と呼ばんといへり而して英國當代の最高教務者たる克蘭マーもメリーの生母の結婚は決して正式のものに非ざる事を宣言せり且つメリーは生母の教化に依りて勢ひ中古教會の舊教的信仰を有したるに祈禱書の改訂以來從來の舊式禮拜を禁せらるゝに及んで心大に之を恨む斯くしてメリーは新祈禱書を嚴守せん事を要求されて更に安からず彼女は禮拜堂に於て斷じて此新法に従ふを拒みしより政府の當局は直にメリーに向て新法に歸依せん事を命せしがメリーは此命に注意せざるのみか全然之を却け且つ曰く先王の御代には當局より國人に信仰を強ゆるが如き事なかりき即ち國人に信仰の自由ありしとメリーは勿論王命を奉じ國法に遵はんとするものなれども政府の官吏が名を王命に托して國人の信仰を強ゆるを惡めるなり千五百四十九年八月に至りエドワード王書をメリーに送てメリー及其一家が舊法を遵守するを許可し而かも教會に出で、は新法に従ふべしと爲すに及んで爾來一年間は信仰問題に關しては事なかりしか茲に又メリーと政府との間に交渉を開始し數月間繼續したり开は時の政府はメリー家付の法教師を獄に投じ事宜に由りては違命の故を以てメリーを王前に召

喚せんと力めたりしかばエドワードは再び書をメリーに致して新法に遵ふべきを説き國教の統一上悪例を此に留むるの不都合を鳴したり然れどもメリーは精靈は神のものなりと答へ且つ己れの信仰は他を喜ばしめんが爲に打破し若くは變更するものに非ざるを主張せり此の如きもの應答再三メリーの法教師は竟に幽せられ而して政府は若しメリーにして永く新法に従ふを肯んせずんば延いてメリーにも及ぼすべしと強迫するに至りたり更に嚴格なる命令書出て、メリーは其家内に於てなりとも舊法に據る事なかるへしと禁せらるメリーは是に於てか大に憤激せざるを得ず時に政府の特別委員はメリーの邸に臨み必ずや政府の命に従ふべきを説けりメリーは之に應ふるに事理の明白なる限りは總てに於てエドワード王の忠順なる一民臣たれども父なる先王の靈に事へるの定禮を廢して他の法式を用ふるよとあらば寧ろ斷頭臺の露と消えんを希ふを以てし委員に向て更に強硬に今の政府の當局者は父の御代には極めて信任されざる人々のみに非るかど述べ政府は此上如何に嚴酷に迫ることも我家の信條を替ふる事能はずと事茲に至りては政府は唯メリーの一味のものを幽閉しメリーと西班牙のヒリツ

ブ二世との間に何等の連絡なからしむるの外一も術の施すべきなし然るに千五百五十二年ソーマーセット伯没するに及びメリーとエドワードとの關係は舊狀に復しメリーは千五百五十二年と翌五十三年とに於て二回エドワード王を訪問されたり而して此第二回(七月か)の訪問に於ては不幸にも急使ありてエドワード王は前夜頓に崩じ玉へる事を報じ來れり、メリーと同時に聞きたる事件は獨り之れのみにはあらざりきメリーはジエーン、グレーが王位繼承者たるの件既に決定し且つ政府はメリーをタワーに禁錮せんとの計亦成れるを聞けり是に於てメリーは幸にスタッフフォードのフラムリンガム城に遁れ此處より書を載して政府に致し何故に公然エドワード王の死を告げざるかを詰り同時に自今メリーは英國の女王たる事を宣言したり政府は直に此書狀を返付して凡そ庶女は王位を繼承するの權利なきものにして正統は當然ジエーングレーに存する事を告げ之と共にジエーン女王の臣民は決してメリーに依りて驅使せらるべきものに非ずとて大僧正クランマーを筆頭として時の内閣員たるもの二十三名の署名調印あり七月十日にはジエーン、グレーは愈々女王と布告

喚せんとかめたりしかばエドワードは再び書をメリーに致して新法に遵ふべきを説き、國教の統一上惡例を此に留むるの不都合を鳴したり然れどもメリーは精靈は神のものなりと答へ且つ己れの信仰は他を喜ばしめんが爲に打破し若くは變更するものに非ざるを主張せり此の如きもの應答再三メリーの法教師は竟に幽せられ而して政府は若しメリーにして永く新法に従ふを肯んせすんば延いてメリーにも及ぼすべしと強迫するに至りたり更に嚴格なる命令書出て、メリーは其家内に於てなりとも舊法に據る事なかるへしと禁せらるメリーは是に於てか大に憤激せざるを得ず時に政府の特別委員はメリーの邸に臨み必ずや政府の命に従ふべきを説けりメリーは之に應ふるに事理の明白なる限りは總てに於てエドワード王の忠順なる一民臣たれども父なる先王の靈に事へるの定禮を廢して他の法式を用ゐよとあらば寧ろ斷頭臺の露と消えんを希ふを以てし委員に向て更に強硬に今の政府の當局者は父の御代には極めて信任されざる人々のみに非るかど述べ政府は此上如何に嚴酷に迫ることも我家の信條を替ふる事能はずと事茲に至りては政府は唯メリーの一味のものを幽閉しメリーと西班牙のヒリツ

ブ二世との間に何等の連絡なからしむるの外一も術の施すべきなし然るに千五百五十二年ソーマーセット伯没するに及びメリーとエドワードとの關係は舊狀に復しメリーは千五百五十二年と翌五十三年とに於て二回エドワード王を訪問されたり而して此第二回目(七月か)の訪問に於ては不幸にも急使ありてエドワード王は前夜頓に崩じ玉へる事を報じ來れり、メリーと同時に聞きたる事件は獨り之れのみにはあらざりきメリーはジェーン・グレーが王位繼承者たるの件既に決定し且つ政府はメリーをタワーに禁錮せんとの計亦成れるを聞けり是に於てメリーは幸にスタッフフォードのフラムリンガム城に通れ此處より書を載して政府に致し何故に公然エドワード王の死を告げざるかを詰り同時に自今メリーは英國の女王たる事を宣言したり政府は直に此書狀を返付して凡そ庶女は王位を繼承するの權利なきものにして正統は當然ジェーン・グレーに存する事を告げ之と共にジェーン女王の臣民は決してメリーに依りて驅使せらるべきものに非ずとて大僧正克蘭マーを筆頭として時の内閣員たるもの二十三名の署名調印あり七月十日にはジェーン・グレーは愈々女王と布告

せられたれど國人の多數は陛下萬歳を呼ばざりき是を以てジエーンは其即位後忽ちにして其勢威衰へたりしかば同月廿日には克蘭マー及び内閣員一同は書をメリーに送り英國々民はメリーの忠順なる臣民なりとて切に其認許を懇請したりされば不幸なるジエーン女王即位後十日にしてメリーは公然英國の眞正なる女王なりとして宣言せられ、全國民を以て嗚然言ふ所を知らざらしめたり、即ち言ふ所を知らずと雖も此宣言に對しては國民は十二分に敬意を表し且つ之を歓迎したり、千五百五十三年八月三日メリーの倫敦に達するや三萬の軍兵は其周圍を繞りメリーは王妹エリザベスと共に感慨極まつて哀情多き大都の中に入御ありたり、先にメリーのタワーに投せらるゝや、彼處には幾多の囚徒あり中には十三ヶ年の長き幽閉せらるゝものあるを視たりしが時にメリーは一々之に其玉手に接吻せしめ加之女王は前日其即位を碍げんと計りたる一味のものに對しては更に優渥に之を遇したり、又叛徒なりとして上告せしもの二十七人の中女王は直に其十六名を免じ而して殘十六名の中僅に三名のみを死刑に處したり、四民の渴仰する所となりしは實に其れ宜なり、

是れ迄メリー女王に對して極めて少からざる反抗の態度を取り來りたるもの、一人は大僧正克蘭マー其人なり彼は數週間ラムベスの宮廷中に禁錮する、のみを以て許されしが千五百五十三年九月内閣に召喚せられ彼が前に起草したる冊子中、供養に關する條項に付て詰問されたり時に彼は愚慙に答へざりしのみか頗る傲慢に反抗的精神を以て之に當りたり彼は且つ此問題に對して面たり女王と論議せん事を求めたり然れども女王は先王に對して殘忍なりし且つ又女王に對しても不遜なる克蘭マーを見る事を斷然拒絕されたり是に於て克蘭マーはタワーに押送せられ遂に有罪の宣告ある迄殆ど二年半の間此處に檻禁せられたり夫れ此くの如く彼が未決囚として其宣告を猶豫されたるの理由如何と見るに明かに彼が新教主義を改めて前日の舊教徒たらん事を望みたるに在り、今左に當時の事情を略述せんか、
メリー女王即位以來當初の教會政策は顯理八世時代の狀況を回復せんとするに在り、女王は初めには毫も羅馬的傾向を有せざりき女王唯一の顧問たるガーチナは英國教會を通じて羅馬法王の權威を回復せんとするに在りしも女王は、げに

教會の首長たる事を宣告したり女王は其即位後直に詔勅を下して時の輿論の精神の狹隘にして擾亂せるを非難せられ女王も其確信を動かさざる限り、勿論反對派の信徒の言にも寛大に傾聴せんとて専ら當時の民人信仰上の紛争を平調に歸せられん事を力めたり然り女王は自ら英國教會の首長となり女王一身に於ては羅馬に近接せん事を避けられたるも時の舊教徒等は女王をば如何んかして羅馬に導かんと計り而して羅馬法王ジェリアス第三世はエドワード六世の計報に接するや直に君牧師等を召し且つ告ぐるにメリーの又從兄弟たる君牧師レヂナルド、ポールを法王の大使として英國朝廷に派遣せん事を以てせり是れ法王は女王が從兄弟としてポールに對して總て便宜を與へなん事を想像したるが故なり而して若し眞に之を豫想する事を得ば西班牙のヒリップ二世とメリー女王の同盟の如きは更に緊切なる問題たりしなり然れども其結婚は痛くガーチナーの反對する所なりき何となれば此の如きは時の形勢に於て許さざるのみか、ヒリップは獨夫にし年齢時に二十七之をメリーの三十八に比しては極めて不相應なればなり此結婚にはヒリップと雖も不承知なりしが國家及び教會の利益なりとして強めて之

を肯んせしが此結婚は甚だ不評判たるを免れざりきさはれ、多少の抗議ありしに關せず、西班牙の大使は大典準備の爲め英國に出張する等着々其歩を進め、千五百五十四年七月二十五日ウィンチエスター寺院に於てヒリップとメリーとは遂に其結婚式を擧げられたり、

此事ありしより舊教徒は迅速に其勢力を全英國に伸張したり、先是同年三月メリー女王は國中に敕諭十箇條を下されたるが要するに法王の權威回復の方針に外ならず、されば舊教の典禮は次第に復古して、エドワード王朝に結婚せし牧師等は皆其寺領より放逐せられ又總ての子女は羅馬加特力教徒として教育されたり茲に君牧師ポールは法王大使として千五百五十四年十一月に渡來し明に法王と英國教會及び國民との舊干繋を回復するが爲に派遣されたるものなりと告白し時の奉承的議會の歡迎する所となれり、即ち議會は同年同月三十日ポールの脚下に侍して英國の議會と國民とが法王に對して從來犯したる不忠の大罪を宥恕せられたるが是れ議會が此前日(二十九日)ヒリップ及メリーを介して法王に謝罪狀を捧げたる結果法王の大使たるポールに依りて翌日直に以上の罪の宥恕を受けたる

ものなり、之に由りても舊教的勢力の回復一斑を窺ひ知らん。
 チュードル朝は抑も此の如く至殘至酷なる事實を以て其宗教史を綴らざるべからざるか、顯理八世の如き其當時に於ける信仰上の軋轢は如何に後世をして悚然として悞れしむるか、今や吾人はメリー王の舞臺に入れり、即ち是より其悲劇の更に至殘至酷なるものを見んとするなり、
 既に前段に述べたる如く、メリー即位後の一年半は殆ど處刑せられたるものあらざりき、然るに後の三年半には二百七十七人、即ち平均一年七十四人の多數者は異端者として火刑に處せられたり、此等の囚人は多くは勞働社會に屬し而して其多くは三十歳以下の青年なり、中等社會のものは極めて少數にて、全數中牧師は十六名、僧正は五名に過ぎず、且つ其處刑されたるものは殆ど倫敦及び英倫東南海岸の諸市府のものなるは此等の諸市府が大陸よりの新教徒の來住せるもの勢ひ多數なりしが故ならん、思ふにヒリツプ及メリーの御代を以て殺伐の御代なりしといふ何人も異論なき所にして、教政の斯く迄に峻烈なる方針に出でたりし由縁を釋ぬる時は人は彼れカーヂナーを以て其重なる教唆者煽動者と爲せどもその言動に

察するに彼は寧ろ之に屬々然たりしもの、如し、即ち此發忍なる教政の張本人は當時鬼ボンナーの紳名ありしボンナー僧正其人ならんとするも記録に就て仔細に之を閲し來ればボンナーと雖も吾人は之を其張本人と爲すに躊躇す、然らば其眞實なる張本人は何れに存せしか、曰く西班牙人は是なり、由來西班牙は異端者焦殺の母國にして七十年前より法教裁判所なるもの設立せられ、新教徒の多數が宗教上の大典あるに際し血祭の犠牲に供せらるゝも人は視て以て之を異とせざるなり、是れ新來の西班牙人が茲に同様の筆法を以て新教徒に對せし結果たりしなり、第一に吾人、人面にして獸心なる異端左道にして飽く迄法王の勢力を傘に被て英國々民を苦しめたるヒリツプ二世の人と爲りを見ざるべからず、彼の父なる查爾斯五世は異端者を搜索して之を火刑に處したりとて自ら誇りし人なり、查爾斯會て書をメリー女王に送りて曰く、方めて英國の異端者を驅逐し玉へ法教裁判所の神聖を保つが爲に一人も遁れしめ玉はざれと、彼が其子ヒリツプに教ゆる事亦此の如し、ヒリツプは其父よりは寧ろ甚しきものあり、彼がセヴィン及ヴアドロッドの兩市に於て舊教徒の大道殺を試み、深く救世主の再臨を以て居りたる痛ましきは吾

人前に之を述べたり蓋し天資酷刑を好む事基督教信奉の王者中絶えて其比を見ず然れども此の如き逆殺を遂行せしはメリー女王の傍より之を奨励したる事固より疑を容れざる所なり然れども新王即位に際し西班牙より來れるもの獨りヒリップのみには非ず即ち西班牙の恐ろしき法裁判所に關係ありし僧徒中最も著名なるはカーランザ、デイ、ミランダにして彼は初めヒリップ後にメリーの神父たり、カーランザはポールに先ち英國々民をして羅馬法王を仰かしめんと力めたり、マルチン、ブーセル及ポール、フアジアスの暴を發き法裁判所の權能によりて其屍體を火に投じたるは實にカーランザなり彼は英譯聖書の從來教會に備付けありたるものを沒收して之を裂き且つ之を火中に投じたり彼は克蘭マーを有罪と宣言し且つ火刑に處するに最も盡力したるもの、一人なり而して彼が千五百五十七年に於て英國を去るやメリー女王は彼をトンドーの大僧正に推撰したり然るに彼は其後二年を経て教典を曲解せるの故を以て西班牙法裁判所より十六年の禁獄を宣告せられ千五百七十六年彼は終に羅馬に沒すメリーの糾問官として西班牙より渡來せしものカーランザの外にジェアン、デイ、ヴィルラガーシア

あり、ヴィルラガーシアの事業は重に教育の方面に在り彼は千五百五十六年を以て牛津堡大學の神學教授に任せられしが彼の精神界に於ける事業は極めて顯著なるものにして彼は大學よりエドワード時代の新教派神學を根絶し別に舊教主義を扶植し次の王朝迄は英國青年の羅馬に巡禮するもの陸續絶えずといふを以ても之を推知すべし彼は克蘭マーの處刑を至當として喜んで其刑場に臨みたるもの、一人なり、

然れどもメリー女王の逆殺に關はりし西班牙僧徒の首領はフランシス派のアルフォンサス、エー、キヤストローなり、キヤストローは蓋し科學的迫害者とも稱すべきものにして異端者刑戮は正當なりとの意に基ける冊子を著はしてヒリップ二世に獻じたり此冊子が當朝の暴虐なる政策をして益々暴虐を助長せしむる口實を與へたるものなり此論文は新教徒に對して誹議讒謗を極めたるものにして諸外國に行はれたる新教徒虐待の方法の殊に彼の見聞したるもの等を列擧して陰に英國に於ける虐待を教唆したるものなり彼の虐待の第一手段は火刑なり其理由は如何にも經典の遺法たるが故なりといふに在り是れ豈に當代王者の背後に恐る

べき悪魔の影を宿したるものに非るか抑も彼が根柢を經典に取りて異端者を英
 國々中より一掃するの方針を案し、頻りにヒリッブを煽動しつゝあるの間に於て
 彼は又英國の僧正等が異端者なるが故に之を極刑に處するは上天の大法に逆ふ
 事最も大なりと攻撃罵詈の言を逞しうせるを見たり故に彼は陰には英國人の火
 刑を教唆し陽には之に對して其不法を責めたるものなり此復仇に敏なる迫害僧
 は千五百五十七年を以て英國を去りコムポステラの大僧正となり翌千五百五十
 八年二月二日ブラッセルに於て歿す、
 次に法王の大使として渡英せし彼れポールは當代の新教徒迫害史に於て何等の
 功業を負ふか史を案するに彼れ亦西班牙僧徒と同じく清教徒に對して頗る過激
 なる態度を取りたるもの、如しクランマーを處刑するに就て熱心に之を賛成し
 たるが如き如何に彼が當代の暴虐なる政策に同情を表したるかを察すべし、彼は
 千五百五十六年六月二十一日を以てクランマーの後を繼ぎたり然れども彼か此
 教職にある事は僅に三ヶ年千五百五十八年十一月十七日を以て歿す、
 吾人は右の如く時の舊教徒の迫害者を叙へ來るに際し決してメリー女王の此迫

害に於ける事蹟を看過すべからずメリーの資性はチードル家の他の諸帝王に比
 して溫雅の名高く、ヒリッブとの結婚前迄は頗る人望ある主權者たりしなり然る
 に一朝凡夫の膝下に屈し滿廷西班牙の俗僧の跋扈する所となるや女王の性格は
 全く一變したり女王は番に晩婚なるのみならず醫師よりは決して何人とも結婚
 する事勿るべしとの勸告を受けたる程の痼疾あり即ち晩年に於ける女王は精神
 上に身體上に其性質全く酸化したるものから即位の當時の如く虐政の記録中よ
 り其名を脱せん事殆ど容易の業に非るなり女王の性格上に於ける混亂此の如き
 ものありとすれば吾人は時の清教徒に依りて録されたる女王の罵詈狀を讀むに
 際して寧ろ多少の同情を女王に遇するものなくんば非るなりジョン・ノックスは
 當時の清教徒を率ゐたる領袖なりしが其著作に徴するに往々女王に對する謗瀆
 の辭あり或は呪詛されたる英國の惡婦といひ此不靈なる娘のメリーといふに至
 る試に其説謗者の論議を聴けメリーとは一箇の婦人にて神の呪詛を受けたるも
 のなり、顯理八世の庶女にして實は王位に即くの權利なきものなり「メリーは暴君
 なり死刑に處せらるゝを値す」此等はメリーに嫌焉たるもの、常套の言語たりし

なり斯、る反抗の聲は愈々女王を驅て新教徒の逆殺を斷行するに至らしめしなり、此時に當りて女王の心中に空湧し來りしものは復仇なり、直接に新教徒を刑せしものは時の當局官吏なるも女王は少なくとも其責任を負ふものなり、當時の在英佛國大使本國に報じて曰く英國の女王は失望の結果引續き狂亂の狀態に在り、失望とは一は其結婚は名のみにしてヒリツプは西班牙に在らせられし故に他は國民の愛を繋ぐ事能はざるが故にメリーは更に戦々競々として其命を殞さん事を恐れつ、あり、前日法教師の一人が女王を刺さん事を企てたりし事ありしが爲なり、其陰謀と其怖恐とは女王をして新教徒を惡む事蛇蝎の如くならしめ之に加ふるにヒリツプより、ポールより、其領内の舊教徒よりの教唆煽動は女王をして此の如き刻薄なる主義の遂行に勇往せしめたりと此不幸なる御代の歴史は實に此の如き痛ましき動機によりて此の如き悲酸を極むるに至りたるを知らずや、女王の迫害史中に於て火刑に處せられたるもの俗人にして二百五十一名牧師にして二十六名あり而して歴史上其の名を留むるものは少數者に過ぎざるも蓋し殘酷の大に酷なるものにあらずや女王の逆鱗に觸れて苦酸を嘗めたる最初の人

は倫敦聖彼得寺院の僧ジョン、ローチャヤースなり、ローチャヤースはケムブリツヂにて教育を受け、其の後大陸に在りしが資性峭直論争を好み、エドワード六世の治下に於てフリーパーと共に非英國教會派の首唱者たるの地位を占めたる人なり、メリー女王の即位あるや彼は保羅の苦惱と稱する強硬なる説教を演じ、聽衆を警醒するに眞の神を拜め、法王を拜するは偶像禮拜なりとて其他舊教の迷信的教條を摘發して言急激に涉りしかば此説教の廉を以て召喚せられ、其結果として閉門を命ぜられしか、ガーヂナー約して曰く、足下にして再び羅馬教會に歸依しなば女王の恩命に浴するを得んと然れども此大膽なる新教徒は斷乎として之を卻けたりしかば千五百五十五年二月四日其教職を剝がれ、次いでスシスフィールドに於て山の如き民衆環視の裡に焼かれたり、グローススター及ラルセスターの僧正たるジョン、フリーパーは直に友人ロージャヤースの後を追へり、彼の排舊教主義は極端なりしかば千五百五十三年九月内閣に召喚せられたる上、フリートに押送せられたり、千五百五十五年一月彼は再び舊教政府に引出され、論争に前非を悔いて舊信仰に歸依すべきを以てせられたり、然れども彼の確信は猶ほ友人ロージャヤースの確信の

如し、怫然之を遮りて曰く、我の生命は或は之を奪ふべし、我の良心は奪ふべからず。と同年二月九日彼も亦勇んでカレイドレグリンの刑場に赴けり、其處刑の如何許殘忍なる事よ、硝薬を罩めたる三個の膀胱囊の其の二個は兩腋の下に、其一個は兩股の間に据ゑられ、之に火を導いて爆發の一刹那に、ブーパーの全身は粉塵せられんとするなり、腋下の一囊は先づ爆發せり、他の腋下而して終りの兩股間の一囊も相繼いで爆發したりと。

吾人は最後にハツドレーの監督、牧師ローランド、テローア、聖ダヴッドのフーラー、僧正、聖彼羅の牧師ジョン、フラット、フオード、及キンチエスターの執事長、フイルボットに就て語る所あるべし、此等の人々は其信念の確かりしが爲に、克蘭マー大僧正、ラチメル、僧正及リツドレー等と同様の極刑に處せられたるものなり、ラチメルは千四百九十年に生れ、ケムブリッジにて教育を受け、ルーテル主義鼓吹者の率先者を以て居りしものなり、是を以て一時其教職を剝がれしも、其説教は依然之を繼續し、顯理とカザリンとの間に離縁の事あるに際し、アンボレーン付法教師となり、然るに彼は教條に於てボレーンと合はず爲に、タワーに送られたり、エドワード

六世の即位せらるゝや、ラチメルは再び釋されて、教壇に登り、新教主義を鼓吹せしが、メリーの登極あるに及んで重ねてタワーの囚人となれり、牛津堡に於て審問に逢ふや、嚴然として新教主義を主張して、屈せず、是に於て時の當局は彼を刑するの外、他に手段なるものあらざり、然るを尙ほ爾來一年五ヶ月の間は、牛津堡の私宅に幽閉せられしが、千五百五十五年九月に至り、彼はクッドレーと共に審問の爲に官牧師ポールの前に召されたり、ラチメルは翌十月一日に破門を命せられ、同月十六日にはリツドレーと共に刑場に導かれたり、老高僧既に火柱に繋がれ、脚下猛焰立ち上ぼるや、リツドレーを顧みて曰く、心安かれ、リツドレー、君我等は今日英國に於て神の御恵みに依りて燈火を點す我れ之を信するが故に決して消ゆる事勿らんと、其精靈を受納られん事を天上の父に祈りつゝ、ラチメルは見るゝ火焰の中に浴じ、同時に頸間に懸けたる硝薬囊は爆發し、痛ましき最後を遂げたり、倫敦の僧正リツドレーは、ジエーン、グレーの即位せられし時、顯理八世の庶女なりとして、メリー女王を攻撃したるものなり、數日にしてノーサム、パーランド伯の陰謀露見するや、彼は之を謝せんとて、メリーの許に走れり、然れども事既に晩かりき、

彼は千五百五十三年七月二十六日を以てタワーに送られ、千五百五十四年の春迄此處に在りしが、更に克蘭マー、ラチメルと共に牛津堡に引致せらる、リツドレーは大學に於て諸學者間甚だ不人望なりしかご懇切なる無名の友は彼に肉と金銭と衣服とを贈れり彼はラチメルと同じく牛津堡の神學校を攻撃したるが、審問の結果は是れ亦破門と長期の幽閉なりき千五百五十五年九月三十日彼は再び教廳に召喚せられ彼とグローセスターの僧正ブルクスとの間に長き且つ諷刺的の會談あり、リツドレーたるもの素より固く執て下らざりしかば判官は遂に彼を破門したり、次いで彼はラチメルと共に刑場に引かれぬ硝薬は彼の兩腋に装置せられ其初め火は脚邊に燃ゆるのみなりしが、忽ちにして焔は全身を蔽ひ、應かて腋下に及び爆發を見んとする頃には、リツドレーは既に萬事休し其死體は傍らなるラチメルの脚下に倒れたり、

トーマス、克蘭マーはメリー女王の爲に苦しめられたる著名なる英國高僧の最後の者なり、ジエーン、グレイの即位に際し彼が如何に王女メリーを苦しめ且つノースラムバランドの成功覺束なきを見るや直に豹變してメリーの許に馳せたる事

は前段に於て之を述べたり、然れども彼の名はメリー女王が叛逆者の列より除かん事を拒みたる十一人中の一なりき、カーチナーは克蘭マーかエドワード六世の大僧正なれば特に之を釋し且つ其餘生を終らしめんが爲に恩金を給せん事を勸告せしがメリー女王は不幸にして此勸告を容れず前大僧正をば異教徒として之を責問せり、加之女王は克蘭マーの處刑は成るべき丈け嚴酷ならしめんとし、事由を法王に以聞せしが、其結果は克蘭マーは結婚したるが故に悪人なりとて極刑に處すべしといふに在り、當時牛津堡に於て公會論戰を爲すの議あり、此場合には克蘭マー、リツドレー及ラチメルはボンナー其他に對して改革意見を吐露せしめんとするに在り、舊教論者は會議の判官たりしを以て其形勢は當初より新教者の爲に不利なりき、當日議論は主として聖餐論にあり、當時克蘭マーは聖餐式に於ける舊教徒の迷信に對して單に消極的にのみ之と對論したり、彼が舊教の信條に従ふ能はざるは勿論にて最後に曰く、總て偽りなり、神の旨に違へりと、同年四月二十日には克蘭マーはラチメル及リウドレーと共に彼に對する宣告ありしを聞けり、彼は死刑の直に加へらるべきを察し、書を内閣に致し、彼と女王との間を

仲裁せられん事を請へり而して何等の理由かありけん、克蘭マーの宣告は十七ヶ月間は發表せられずして、單に穩便に閉居といふに過ぎざりき然るに其十七箇月の終りに於て、法王は前判決即ち閉居を取消し、新に審問に附せられたり、千五百五十五年九月十三日法王の大使の前に召出さるゝに及んで克蘭マーは之に服せざりしかど法王は同年十二月四日羅馬に會議を開き、克蘭マーは翌年二月十日法王の名に依りて貶黜せられたり、克蘭マーは下院に向ひ控訴したるも勢ひ既に拯ふべからず、其廿四日には彼を處刑すべき逮捕狀はヒリップ及メリーの名に於て發せられ、尙ほ一ヶ月間は處刑の宣告はあらざりしも、此間彼は如何にかして恐ろしき處刑を免れんと欲し、百方言を巧みにし、前言を取消す等見苦しき迄に女王の感情を融和せんとしたるも、放免の望みは翌三月二十一日に於て全く消えたり、同日聖メリー寺院に於て臨終説教を聽くのが已むなきに至り、其門彼は暗涙の潜然たるものありしといへり、コール博士其説教を了るや、彼は面目なき大僧正を呼びて、所謂最後の取消なるものあらば之を讀み上げん事を求めたり、是に於て老僧正は毅然として發立し、先きに申出でたる取消を更に取消し、恰も新教主義を

提唱したる事を痛恨するもの、如く終りに其聲を闐まして曰く、吾手は最初に吾心に送へる信仰を書き顯はしたるものなるが故に、余の焔の中に葬られんとするや、須らく先づ此手を焼くべしと、彼も亦極めて無殘なる最後を遂げたり、メリー朝の斷獄は克蘭マーの死後二箇年間は退まざりき、然れども克蘭マーは史上に傳へられたるもの、中には火刑に逢ひたるもの、最終の一人なり、千五百五十八年十一月十七日にはメリー女王崩じ、其翌日には官牧師ポール亦逝けり、是れ英國より西班牙及伊太利の勢力を驅除するの徵候ともいふべく、舉國民人始めて其堵に安んせり、舊教徒は實に其惡の惡なるものを爲したり而して之れ亦舊教徒が政教に於て英國に其活劇を演じたる最後の幕なりといふ事を得べし、

第十六章

エリザベス女王時代に於ける英國の宗教改革

(自一千五百五十八年至一千六百〇三年)

メリー女王の崩せしは千五百五十八年十一月十七日の黎明五時乃至六時の間に在りしが同日亭午に及ばずして異母妹たるエリザベスはメリーの王位繼承者なりと布告されたり此布告はメリー女王即位の當時と同じく全國民の歡迎する所となれりエリザベスは其後一週間を経て居をタワーに定められ爾來四十五年間英國々民を統治させ玉へるは英國史中其年代の長きと四民悅服せると現代のヴィクトリア女王に於て僅に其匹儔を見ると謂つべしエリザベスが宗教上の薰陶は大にメリーと其趣を異にせりメリーは千五百十六年に生れ中世紀の教會制度の下に養育せられたりメリーに感化を與へたる最も大なる生母は舊教徒たる西班牙人なりエドワード六世の第一祈禱書成るの前早く既に人と爲れり且つやメリーは近侍の爲に改革主唱者を誤解せしめられたるなり是れ其極めて偏頗なるを

免れざりし所以なり之に反しエリザベスは千五百三十三年に生れ其生母たるアン・ボレーンは新教の信仰を以て之を教化したりさればエリザベスの訓育は全く舊教の見解に反對し苟も羅馬法王が問題の何たるに關せず英國々民に干與するが如き背理の甚しきものと信じたり加之吾人はメリーは天性宗教的にしてエリザベスは天性政治家なりし事を言はんとすエリザベスの材幹は直に顯理八世より傳ふる所にして從て其治蹟を察するに宗教的よりは特に政治的の色を帯ぶるを發見するなり

政教上に於いて國政上に於て女王に無二の賢明なる顧問はロバート・セーシルなり彼は信任ある閣臣としてエリザベスに仕ふる事四十年エリザベス朝に於ける教政宜しきを得たるものは一に彼の助言に出でたるは疑を容れず然れども當時中世の教規を全く打破したるには非ずエリザベスは千五百五十九年一月二十日を以てげにや莊麗比なき古典を修めて其即位式を挙げらたり當初エリザベスは國內に於ける教規に就ては決して其變動を急激にする等の事なからん事を警めたるが何人もエリザベス朝に於て舊教主義が前日の勢力を繼續すべしとは思は

ざりき而して女王自らも固より信仰界に於ける前途の變動を看破したりしなり、
 開は千五百五十八年耶蘇降誕祭の當日其禮拜堂に於てエリザベスの望みにより
 聖禮執行者が靈水式を廢したる、明に其傾向を示すものなり此事ありしより二個
 月を経て布告あり、已に法律にて制定され居るもの、外は從來の祈禱其教式を廢
 されたり、後數个月にして聖餐は新舊式兩様共に之を許すの條例議會を通過し、
 更に他の方面に於ける進歩は深く前代の歴史を汚がしたる僧徒の極刑を停止し、
 且つ審問に召喚せられんとしつゝ、ありし獄中の新教徒を解散したり、此形勢を見
 るや先にメリー女王に依りて雍塞せられたる新教徒の面々は皆此時に乗じて回
 復を爲さんと計れり、前年火刑を逃れて大陸に在りしもの陸續歸國し、カルザイン
 の如きも書をセーシルに送りて清教徒の保護を申込みしが其來旨や寧ろセーシ
 ルを驚かしめ憤らしむるに止まり、之に充分の注意を拂はしむるに足らざりき、
 然れども新教主義の回復は着々其歩武を進めたり、エリザベス朝の第一回議會は
 千五百五十九年一月二十三日を以て開かれたるが其通過せる劈頭の條例は英國
 教會は法王の主權より獨立すべきを確定せる條例にして、此條例に依り英國は長

へに法王の主權を廢除する事を得たり、然れども何等が主權の存在を必要とする
 が故に、同條例には、法制的に施行せらるべき限り、君主は宗教上國家と吾人の上に
 其主權を有するものなりと規定せり、此規定は再び法王の主權をして英國に侵入
 するの地なからしめ、議會は更に保守的改革者の信仰制度を回復したり而かも其
 進歩や遅々として、毫も唐突の行動なく、一に斬新確實を力めたり、次に起るべきは
 祈禱書問題なり、其改正は一般に期せられたるが如く、特別委員の手に附托せられ
 たるが、此等委員中にはエドワード六世の二種の祈禱書を把て、其可なるものを撰
 擇するか、或は更に新に編纂すべきかに就いて議論あり、此時にエリザベス、セーシ
 ル共に其第一祈禱書を参照せしは事實ならん、然れども幾多の便宜上遂に第二祈
 禱書を採用する事となり、之を基礎として、從來の加特力の教條教典に比して更に
 完美なる迄に之を増補訂正したり、其訂正の重なる點は聖餐式にして、其訂正書
 中には聖餐式には其供奉崇拜の間に於て本來基督の神秘的實在を感ずる特典な
 りといへり、エリザベス祈禱書の他の増補は裝飾に關する教規にして、牧師の服制
 會堂備付器具等エドワード王の時に用ゐしものを回復したり、此改正書は千五百

五十九年六月二十四日より施行する事となれり、此書は英國一般に採用すべしとありしが、數月ならずして之が服膺を拒みたるものは全國牧師九千四百人中僅に百八十九人なりき時にエリザベスは先きの顯理八世及エドワード六世の内閣に劣らず教會政策を厲行せんと始めたり幸にして時の牧師會議は女王に屈せざるのみか、女王の政府に對して反撃を試むるに至りたるが、今姑らく女王の教政の成行を一瞥せん。

顯理及エドワードの如くエリザベス亦一般教會の巡察より其歩武を進めたり、是に於て女王は先づ其委員の心得に關する訓令を發布せられたり、此訓令は千五百五十九年の中葉に於て公にせられ、全部五十三項にして其中尤も重要なる二十七項はエドワード六世の訓令より引用したるものに係れり、其主旨は五箇條より成り、辭章に於て差別こそあれ大體はエドワード朝の訓令と大同小異なり、即ち(第二)法王の特權(第三)迷信的慣例(第三)聖職及教會に關する諸件(第四)牧師の義務及懲戒(第五)一般信徒の義務及懲戒に關するものは是れなり、以上の箇條に依り委員等は訓令を奉じて巡察の途に上りたり、此委員は員數に於ては幾干ありしや詳細に知るを

得ざるもエドワード王當時の委員よりは多數なるは明かなるに似たり、委員等は更に各地の牧師及信徒に試むべき質問件數五十六項を準備したり、其結果は概して何の反抗もなし、各地牧師は台命を奉戴すべきを誓ひ、之を拒みしものは一萬人の牧師中僅に二百人に過ぎざりしといへり、エリザベス朝には宗教上の訓令の發布甚だ多かりき、此他僧正等の發せし教訓書と稱するもの亦少からず、其發布の最も早きものは千五百七十一年にして全部六十項、僧正執事牧師等の一般教條なり、此教條の起草者はヨークの大僧正とカンタヘリーの大僧正及諸僧正なるが、此教條は下院又は牧師會議の承認を得たるにもあらず、將た宗教法規たるの效力始めて生ずべき君主の正當なる裁可をも經ざるもの、如し千五百七十五年に出でたるものは十五ヶ條にしてカンタヘリー及ヨークの牧師會議を通過し、君主の批准を得て茲に其效力確實なる法規として全國に施行せらる、事となれり、此規定は主に寺領の管理に關するものたり、千五百八十八年には新に六箇條の訓令發布せらる、此訓令は破戒僧及無學僧の増加するを憂へての制裁にして、破門、難行等を以て之を戒め、此他結婚俸祿等にも及ばれた

り、エリサベス朝の晩年千五百九十七年には十二冊の教規は公布せられたるが是亦時の教會制に關して時弊を拯はんが爲めに出でたる即ち前年に發布したる諸訓令と并に新に發せらるべき諸件とを合して系統的に編綴したるものなりとす、此の如くエリサベス朝の教規は一時完成せられたるが如きも凡そ人定法令なるものは時代の進歩と共に之を改正し増補するの要決して止む時なかるべし、故を以て惹斯一世の時に至りて更に改訂するに至りたり、是れ千六百三年の事にて此新編法典は百四十箇條より成り爾後二百六十二年間繼續したるが千八百六十五年には更に又新教規を發布するを見たり、

エリサベス朝に於ける改革上の他の問題は信仰の統一に關する準備なり、即ち如何にせば最も容易に此準備を遂ぐるを得べきか曰く他なし、エドワード朝に出でたる教條を基礎として充分に之を増補訂正せんには如かざるべし、エリサベスの第一回議會には其多數者は牧師會議とは同じからざるも改革意見に同情を表するもの勢力を占め得たり、牧師會議第一次の集合は千五百五十九年に初めたりしが同會議の輿論はメリー時代に於けるものと同じく舊教的傾向を有したり、カン

タペリーの大僧正レチナルド、ポールはメリー女王崩御の翌日を以て寂し其席は爾來空虚なりしを以て倫敦の僧正ボンナーは先輩として、カンターペリーの集會に於ては陰然會長たるの勢に居れり、當時、カンターペリーの執事長ニコラス、ハーブス、フィールド及びポールの輩下のものに依りて舊教の爲に大膽なる而して最後の抗論を試みられたるあり、其案は總て五箇條より成り、允許を得んとて上院に提出せられしもの此五箇條は言ふ迄もなく、重に聖餐式其他に關する迷信的教條なり、此案は二大學にも送付せられ且つ裁可を得んとて君主にも奉呈せられたり、然るに女王も議會も之に對して毫も注意する所なかりしが如し、然れども右提案には、歴史的に舊教派の二大問題を包含したるものなるを見ん、即ち聖餐に於ける麵包と葡萄酒とは耶蘇の肉と血とに變化するものなりとの説及羅馬法王の大權の主張これなり、且つ此時を三百三十年を経過したる羅馬教の勢力も以後は毫も官廳の助力を受くる能はざるものなるをも記憶すべし、然れども女王は尙ほメリー黨と教會とを融和せんと欲し、メリー黨の代表者と教會の同數の代表者との間に協議會を開き、此協議會に於て各充分に神學上の見解を叙述せしめんと計られた

り女王は此協議をば内閣及上下兩院に下問する程に重大の問題なりと思せられたり、即ち此會議は千五百五十九年の三月三十一日と四月三日と二回に開かれ、キーパー卿及フランシス、ペーコンと之が議長たり、然れども此種の會議は實際上には何等の效果を見るべきものには非ざるを以て直に解散する事となりたり、ペーコンが其解散に就いていへる事あり、我が主よ、爾は我等か爾に聞かん事を好み玉はざる故に爾は恐らく即刻に我等に就て聞かんと夜に及はすして、キンチエスタ一及リンコルンの僧正等はタワーに送られ而して會議に列せる殘餘のメリー黨の六名は毎日内閣に召喚せられて審問を受けたり、此の如きは調和策の突然なる而して最後の結果なり、是に於てか舊教徒の形勢日々に非なり、之より殆ど四年を経てエリザベス朝の信條十一則なるもの發布せられたり、如何にして此信條の發布ありしやは史上明かならざるも、エドワード六世の信條四十二則が牧師會議に於て改正せらるゝ迄一時の補則たらしめんとするに過ぎざりしもの、如し、エリザベス朝の第二回牧師會議は千五百六十三年一月十二日に召集せられたり、此時に當りてやメリー朝の時に英國教壇を占めたりし、二十三名の

僧正中其十五名は既に死去し、殘る八名は自宅に退居し若しくは難を大陸に避けられたり、されば此新會議には一人の舊教徒も之に加はらざりき然るに英國教政上の危機は他の方面に於て表はれたり、是れゼチザア即ちカルヴィン及びポールの輩下のものに依りて舊教の爲に大膽なる而して最後の抗論を試みたるものなり、其案は五箇條より成り、允許を得んとして上院に提出せり、即ち

- 一 聖餐式に臨み、僧侶に依りて嚴正に禮拜の辭を捧ぐる時は、麵包片と葡萄酒の下に聖母マリアの生めりし基督の肉體と並に其血との實在を認むべきものなり、
- 二 式の終るや、麵包と葡萄酒若しくは神と人との存在なし、
- 三 式中には活けるもの死せるもの、爲に罪の贖ひを爲されし基督の眞體と眞血とに感應す、云々

エドワード朝の四十二箇條の教則は十日間に同會議に報告すべき旨を以て委員の手に附托せられたるが、今日英國の祈禱書に於て見る所の三十九箇條の教則なるものは、即ち此時の會議の結果なり、

抑もエリサベス朝の初舞臺に於ける大なる危険は英國教會が監牧師を失はんとするに在り、當時の英國教會は法王の手を離れたるが故に即ちメリー黨の僧正は一切當代の宗教事務に係る事を禁じたるが故に監牧師は勢ひ茲に失はざるを得ざるなり、英國の教會は既に前代の教會に非ず其關係ヒユীগノート宗の佛國に於けるよりも甚しきものあり、是れ確に吾人の研究を要すべき問題なり、エリサベスは千五百五十八年を以て即位せし以來二十七の僧正職中七の空席あり、君牧師たる大僧正ポールはメリー女王を追うて逝き、同年の末更にプリストル及ローチエスターの僧正相繼いで逝けり、殘す所は唯七人の監牧師たる僧正と他に五六の副教長あるのみ、今新女王位に即かるゝに當りては其教職に在らんとするものは皆な忠順他なきを以て女王に誓はざるべからず、然らざれば直に各自の地位を失却せんなり、以上の諸僧正中此誓約を肯諾せしものは唯一人のみなり、されば千五百五十九年五月より九月の間に於て十六名の高僧は其教職を剝がれしなり、殘れる一人は誰ぞランダップの僧正キツチン是なり、次の問題は空席なる二十六の僧正職を充さるべからざるに在り而して新任せる一僧正就職式を擧ぐるに當りては

少なくとも三名の僧正を要す、此時幸ふじて一人の僧正のあるなり、千五百五十八年十二月九日を以て女王はリンコルンの副監牧師パーカーを採用してカンターペリーの大僧正となしたり、先是パーカーは滿六箇月の間遠巡し居り、此時初めて其任に就きたるものなり、次で女王は更に倫敦ノークイツチ、チャイチエスター、及ヘレフォードに監牧師を撰任したり、當時の慣例として、僧正の撰任は所轄本山の大監督の認定を得べきものなりしを以て、先づ新大監督パーカーの爲に就任式を擧ぐるの要ありとせられ、先に千五百五十八年九月九日公文書をダーハムの監督ターンズタル、バス及エルスの監督ブラウン、ビーダーポローの監督ポール、ランダップの監督キツチン、バス及エルスの前監督パーローとチャイチエスターのスコーリー等に送り、此式に集會せん事を通報したるに、タンズタル、ブラウン及びポールは之を拒絶したるを以て、直に其職を奪はれ、第二の教令は同年十二月六日を以てキツチン、パーロー、スエーリー、エックセターの前監督カヴァーデール、ベッドフォートの副教長たる監督ホツジキンス、セツトフォードの副教長ソールスベリー、オツサリ、の監督ペールに向て發せられ、此等の中四名丈の集會を命じたり、是に於てバ

パーカーは千五百五十九年十二月十七日を以てパーロー、スコリー、カヴァー、デー、ル及ホッジキンスの手に依り、ラムベス宮の禮拜堂に於て其就任式を擧げられたり爾後三箇月中にパーカー及右四人によりて就任式を擧げられたる僧正監牧師十一名あり然る時はパーカーは此等の就任式に依りて直に中世の諸監督と直系即ち英國教會本來の諸監督と直系の關係を結ぶに至りたるものなり之が爲に教會監督上に於ける教務は毫も破綻あるを見ざりしも其實果は單に當時の教政に於ける、教役者其人を缺けるが爲めの一連鎖たるに過ぎず後世パーカーの就任式を以て滑稽の至りなりとするものなれど此の如きは過渡の時代に於ける常狀として蓋し已むを得ざる所ならん

此時に方りて新教徒の運動如何と見るに吾人は前段述べたる所よりも更に詳細に其經過を點見せざるべからず先にメリー朝に於ける舊教徒の全盛時代と雖も彼等は絶えず其勢力挽回に努めたり彼等は迫害を受ければ受くる程之に對抗したり即ち其起るや寺院の鎮壓、圖書館の破壊、學校の廢止ありて始めて其氣焰を高めたりともいふ事を得願ふに舊教會は大に國民に教化を與へ而して新興の勢力は

加特方の觀念に反抗するを以て其運動の主腦となせり、エドワード朝の時に於て一時其勢力を伸べたるは前章に述べたるが、さて時の清教徒が如何に社會より批判せられたるかといふに、ラチメルは曰く天主教徒よりは更に悪しからんクランマーは曰く彼等の聲價は唯其口尖に在らん論戰に熱注し會談に忙はしく自ら省みるをせずして、先づ他の過失を責むるの徒なりと、彼等が一般神學上の主題は非聖發主義に在り、此派教徒は凡そ教務は人民の主宰すべきものと爲し、總ての信徒は何人も神に直隸すべきものとし、洗禮を受くるには決して如何なる不可思議力をも要するものに非ずとし、即ち單に教會に加入すべき正當なる表式たるに止まるとせり、されば聖餐式の如きも單に基督を紀念すといふに解釋し、此間に何等迷信的感應を狭さむを許さず、受洗證明書は俗人の今や眞に神を畏れて基督の使徒たるべき確信の公然たる發表にして結婚は兩性間の契約に外ならずとし、羅馬式の難行の如きは清教徒の顧みざる所なりしなり、時に清教徒は舊教徒の迷信より來れる社會上の流弊を一掃せんとしたるものにて、殊にエドワード六世時代の道徳の壞亂を匡救せんが爲に猛然として起ちたるものなり、

然れども清教徒が差當り目前の障害は舊教徒なり吾人も前段に屢々述べたるが如く改革者は其改革運動を始めし以後久しく其教務に於ては中世來の典禮を用ゐたり然れどもジョンカルビン一度之を惡魔の式なりと喝破して以來フーパー、ブラッドフォード、ベーコン、ローランド、テローア、ブランド、ラチメル及び克蘭マールの徒皆頗る非禮の辭を以て之に加へたり時の清教徒は牛津堡のマグダレン大學禮拜堂、エストミンスター寺院、トウアチー寺院及リスボン寺院等に於て公然聖餐式を瀆して憚らざりきされば之を見て激したる時の舊教徒が此等不敬の所謂異教を嚴罰に處したるは事情實に然るものありしなるべし而して此結果は宗教の爲に身を殺すをも避けざるもの多々輩出するに至りたりリツドレーは倫敦の監牧師寺領内に於ては全然舊典を破壊せん事を宣言しフーパーの如きは之を倍亞耳(フニシア)人の尊宗せし日神の教壇と呼ぶ程に狂瀾的なりき教壇の問題は更に教會に於ける他の問題に波及し牧師の服装は極めて質朴なるべしと命せられ若し何等宗教上の彫刻物或は印刷物にして存せらるべきものありとすれば是れ信仰を厚うするが爲に非ずして單に裝飾たるに過ぎずとの解釋を與ふるに至り

たり而して清教徒がエリザベス朝の晩年に於ける勢力如何と見るに教會上の勢力既に鞏固になりたるのみならず又政治上は勢力と結托し茲に政教上に於ける大勢力をば占め得たり此の如く清教徒は漸く其勢力を伸べたるもエリザベス朝に於ける顧問は獨り清教徒のみにはあらずりき即ち英國に於ける羅馬加特力一派の由來及發達に就て吾人亦一瞥する所なかるべからず舊教徒がエリザベス女王の爲に壓迫せらるゝや英國の舊教は殆ど終焉に臨めるが如きの觀あり此時には既に社會上政治上の勢力は勿論之れなく唯一箇の宗派といふに過ぎざりき此に至りて清教徒と舊教徒とは全く其位地を顛倒したり而して往年の反動として勢ひ之に對するの處置峻刻なりきエリザベス即位の當初には英國と羅馬との間に調停政策を取りたる事は前に述べたるが如しバイアス四世は女王即位後直に其間に協議を開き法王は聖セーヴアリス寺の住職ウインセンシアス、パーバリアを大使とし之に其親書を持せしめて英國に派遣せしめたり此書中法王は女王にして法王の權威を信する事先に顯理八世と女王の生母との結婚の允許の時の如くならしめば聖餐式は新舊兩式を認可し新祈禱書を裁可せられん事を望む旨を記

したるが、バーバリアは英國海峽を渡航する事なからしめたり、女王はバーバリアが佛國のカテイニスに駐在するなるべしと爲し、即ち此に使節を遣はしたり、此使節とバーバリアとの會見に就ては何等の効果もあらざりき、而してバーバリアは近時の土地法が加ふる使節の來を禁制するが如く、ブラッセルスよりは一步も英國に近く事能はざりき、法王が第三次の計畫は之より數週の後、巴里に於ける英國の公使を通じ、當時開會中なるトレント會議に英國の代表委員を派遣せん事を要求したり、エリザベスは此要求をも亦拒絕したり、蓋し右の如き要求は若し之を容れんか、英國を以て第二等國と看做さんとする法王が久しく企圖せる所なりき、且つ又此一般會議に列席すといふは法王の權威を承認する事にて、即ち英國をして法王の大權を承認するの已むなからしめんと欲するものに外なければなり。此拒絕は全然法王の英國に對する好意を破り、以後再び之を回復する事能はざるに似たり、セーシルは法王に新計畫ありと聞くや、更に英國の主權を強大鞏固なるものと奉戴するの議を議會に提供したるが、此議は法王がエリザベス及英國に對し、官牧師僧正其他羅馬の教職に在るものを命じて謀議しつゝ、ありこの報あるや、

一層刺激せられたり、法王の計畫は之を征服するに足るものには何れの王侯にて、も英國の領域を贈與せんといふに在り、且つ何人にて、も公に又密にエリザベスを殺害し、或は何等の方法にか依りて世界外に放棄したるものは、直に法王より罪の赦免を得、其の家族は永久年金を受くべしと公告し、此他誘ふに利を以てして、舊教徒を煽動せんと試みたり、此時に方りバイアス五世の下に、ロバート、リドルフ、なるものあり、フロレントの紳士にして、商賈と伴りて英國に住し、エリザベスを覆さんとて、英國人民を教唆しつゝ、あり、リドルフの計畫は極めて巧みに進行し、其結果千五百六十九年十一月に至りて、突然暴露したる、其次第は英國北部に一揆の兵を擧げて、英國君主に對し、反旗を翻したるものあり、其首領はエストモアランド及ノーサムバーランドの兩伯にして、其總兵員一萬二千人と注せられたり、然るに軍費の不足、其他の故障に依りて、勢ひ頓に挫け、千五百七十年一月を以て、境外蘇格蘭に追はれたり、是に於てエリザベスは賊徒の首魁を嚴罰せんとて、蘇格蘭のメリー女王と結婚せんと誓約されたる、ノーフォーク公もリドルフ一味の嫌疑者として、投獄せられしが、證據不充分を以て、後に放釋せられたり、此時法王は對英策

益々其歩を進めフランダールより英國に侵入せしむる爲めアルヴァ將軍を送らんとてヒリツプ二世を煽動し且つ英國を羅馬の下に屈服せしめたる曉に於て許與すべき特權數箇條を以て之を約したり然るに此等の密計は全くエリサベスの間者の探知する所となりノーフオーク公の手簡も女王の手に落ちたるを以て女王は痛く公が西班牙兵の侵入を朝して蘇人と事を擧げんとしたるを怒り同謀者數名と共に直に死刑に處せられたり上述の如くエリサベスを害し英國を羅馬の權下に屈從せしめんとせし計略は不名譽なる失敗を遂げたるが更に他方面に於て活潑なる運動は開始せられ前の目的を遂行せんとするものあるに遇へり此事件は英國に對する有名なる西班牙のアルマダの遠征是なり數箇月の間西班牙の全力は此大遠征の爲に傾注せられたり然れども此事件は千五百八十八年迄は爆發せざりき即ち同年五月二十九日を以て百二十九艘の大艦より成り一萬九千二百九十五の兵士八千四百六十の水兵を乗せ及び二千四百三十一門の大砲を裝置せる大艦隊は船艦相啣んでリスボン港を解纜したりフランダースの海岸は彼等の屯集所にして此處には短艇の小艦隊を以てアレキサンダー、フーニースの應援あ

らんと豫期したり此小艦隊はアルマダ艦隊の保護の下にテームス河口のサチツト島に上陸し之に由て敵の意を此に奪ひ其間に全軍を更に北方の海岸より上陸せしめんとすの軍略なりき然るに偶々颶風の起るに逢ひて軍艦の大半は破碎せられコラナに於て修繕するの已むを得ざるに至りたり然れども英國々民は以前より全く西軍の計謀を豫知し舉國一致之が防衛の策に於て長らく劣らざりき義勇兵及私有船の如きも同時に捧供せられたるありライセスター伯一萬六千人を率ゐて邊海を守り四萬五千人は近衛兵として女王に直隸し海軍にては軍艦總て百八十艘水兵一萬八千人而して大砲に於ては西軍の有せしもの、一半に過ぎざりき水師提督はホーワード卿にして其部下にはドレーク、フロビシャー及其他世界に於て好個の航海者としても耻づるに足らざるの人なり七月三十一日に於て兩國艦隊は始めて對陣するに至りたり西國艦隊は先づ英國艦隊を包圍し總て之に拿捕せんと計りしが然れども英國方の運動は極めて機敏にして容易に其難を遁れ同時に却て西國方に大打撃を加へたり凡そ一週間西國艦隊は英國艦隊を誘ひ包圍して之を陥れんと力めたるが此策は全然無効に了り英國艦隊は巧に之を

避け其間にアルマダの周邊に彷徨し、西國の船艦に損傷を與へたる事甚だ大なり英國は遂に西國艦隊に最後の大打撃を加へ火船に依りて之を邊海外に驅逐せんとの議一決したり、即ち八艘の船舶に可燃物を積載し八月七日潮勢に乗じてアルマダを下る西國軍は之を見て警戒し大纜を斷ち遠く沿岸を離れたり、ドレークは翌朝之を追跡しアルマダを窺するに砲撃の巧妙、操法の機敏を以てし西國人をして纜にフランダース海岸に遁れしむる迄に成功したり此海戦に於て西人凡そ四千人を斬り船艘の破傷して復た用うべからざるに至りしもの甚だ多し是に於て西軍は再び英國海峡に於て英軍と對抗せんとはせず北海を経て本國に歸航せんと艦装せり然れども英軍の彈丸は彼等を惱ましむるに於て最も猛烈を極めたり加之西軍の北海を廻航するに際して此方位に於て毎年來り襲ふを常とする大暴風に遇ひあはれ英國を一揉みに揉まんと聲言せし傲慢なる西國艦隊も茲に至りては敗殘の船艦僅に五十四艘と創兵一萬人程を乗せて本國を指して遁れ去れり、アルマダ大敗北の報宮中に達するやエリサベス絶呼して曰く神は彼等の上に呼

吸し玉へり而して彼等は吹き散らされ了へぬと英國北部一揆の敗るゝを聞くやバイアス五世の喫驚狼狽せしは察するに餘りあり而して次の法王シックスマス五世亦アルマダ大敗の報に接し均しく愕然として爲す所を知らざりき更に英國々民を征服せんとして全國力をアルマダに傾注したるヒリツプ二世の心事や洵に之より甚しきものあらん、ヒリツプは其最後の計畫となりたり是よりして英國に於ける舊教徒は著るしく勢力を失ひ單に靜穩なる一宗派として存するに至りたり、先にアルマダの事未だ起らざるや舊教徒は羅馬法王の勢力を後援に恃み法王がエリザベス女王破門の違旨あるに及び女王はメリー女王が定め玉へし眞正なる宗教を阻害するものとし其朝廷には不正の人々及異教徒を任用したりとて舊教徒は一般に之に平ならざりき且つ其異教徒等の爲に舊教上の儀例は改正せられ僧正牧師等が其教職を失ひたるのみならず往々投獄の身となるもの少なからざりしより此事即ち女王が神聖なる教會より破門せられ爲に忠順徇國の臣之より永く女王を去る所以ならんと信せりバイアス五世が此違旨は千五百七十年四月二十七日の日附にして千五百七十年三月二日密に人を以て聖彼羅寺院の戸隙

に置かれたり之と同様の笑ふべき文書は其後羅馬法王グゴリー十三世及シツク
 スタス五世等に於ても反覆せられたり而してエリザベスの所謂破門は蓋し英國
 に於る舊教勢力の消滅期ともいふべく千五百七十年迄は羅馬教徒も教會唯外面
 上の一致に過ぎずとして教務にも干繋し舊來の羅馬式は機會の許す限り私宅に
 於て執行し居りしが法王の達旨の如き苟も之を破門すといふが如き法王より不
 穩なる處置に出でらるゝに及んで英國に於ける舊教徒は單に國教以外に一個の
 宗旨として存在を認めらるゝ事となれり、
 然れどもエリザベスの即位に反對せるが爲に其教職を剝がれたる羅馬加特力派
 の殘存せる僧正等は後の繼者の爲に斡旋する所あるにも非ず手を拱して新教徒
 の運動を傍觀するものに似たりされば舊教派は繼承者なきが爲に勢ひ自滅に赴
 かん事は明かなるを以て前には新教徒なりしキリアム、アルレンと稱する牛津堡
 の脱會者メチリンに於て舊教僧侶となり千五百六十八年フランダースのドーウ
 エーといへる地に神學校を建設し此にて舊教の教役者を養成せんと企てたり此
 神學校は千五百九十三年迄繼續し同年に英國ハートフォードシャイアに移され今

は聖エドマンドの大學として知らるゝもの是なり爾後四十年の間に同様の學校
 は各地に建設せられたるが其目的は何れも新進の牧師を養成して英國に派遣し
 以て再び英國を舊教の天下に回復せんとするが故なり當時此等の人々は英國人
 を目するに憐むべき異端者無神論者となし固より英國人の宗教改革の何物たる
 やを知るなく一に英國は福音の道長へに絶えたるものと見做し羅馬法王の力に
 依りて羅馬教の智識を輸入せんと風を變じ裝を伴りて渡來する熱心なる殉教者
 少なからず此等殉教者の渡來するや當初より時人の目に映せざりしに非ず之に
 關する多少の記録は今尙ほ殘存するか當時英人は之を見て毫も意に介する所あ
 らず探偵者の一人は記して曰へり彼の前頭には毛髮僅か生へり或は班點多く或
 は褐顔にして綠裝なりとエリザベス女王彼は一時の運動にして敢て意とするに
 は足らずと爲せり蓋し女王の寛仁大度を以て衆生に臨まれたるや以上の如き外
 來の舊教徒等の刑せらるゝ迄即位以來殆ど十七年間は何等刑獄の事件の記すべ
 きものあらざりき然るに以上の外來舊教徒がジュスイツト派の教徒と相應じ事
 を圖りて稍々不穩ならんとするに至りて始めて之を處刑したり最初に處刑され

たるものは千五百七十七年にして之よりエリザベス朝の晩年迄に外來教徒とジ
 エスイット教徒の刑に觸れたるもの百二十人と稱せらる彼等の英國に來るや元
 來公に私に法王の大權を扶植せんが爲にて此目的を達せんには何等の困難をも
 之を冒して進まんとの決心なりしなり然して其終りに就ては吾人が言はんご欲
 する所は即ち此の如し唯吾人の記憶せんとする所は此等外來教徒者と共に事を
 企てたるジエスイット宗が當時英國に於ける状態に在り即ち是れ英國に於ける
 當時舊教徒の代表者と見るべきものなればなり
 彼等は羅馬法王の允許に依りて今日の「イングリシ、ミッシヨン」なるものを建設し
 たり彼等の運動は英國に於て羅馬教の新派を起さんとするに在り其初年ジエス
 イット派の指導者はロバートパーソンズ其他牛津堡の教役者なりきパーソンズ
 は久しく羅馬に留まり其間著書及ジエスイット派の教役者を通じて極めて英國
 の輿論を沸騰せしめたり然れども羅馬教徒已に斯る補助的應援を以て足れりと
 せず千五百九十七年法王に請願するに監督は牧師の妥協同意に依りて選舉さる
 べしとの教主管轄の舊制を改復せられん事を以てせり然るに法王は此請願を允

許する代りにジョージブラックエル其他牛津堡の脱會教役者を初め英國に於け
 る羅馬教の牧師約四百人をば長老として選任したり之を聞て牧師等は憤然とし
 て怒りたり舊教徒は再び僧正たらん事を要求したり是に於て法王は千六百二十
 三年六月四日キリアム僧正を監牧師の職に任じて英國に派遣し之を英國に於け
 る舊教派の宣教者代理と爲せり此時より英國の羅馬派は再び發達して僧正は大
 僧正となり大僧正は君牧師たるを得ることになり及びたり然るに彼等は時勢の趨く
 所何れにあるかを覺悟する能はず往年舊教の黄金時代を夢想し大叛逆に訴へて
 も之を回復せんと熱望せり此計畫は外來教役者に依りて助力せられ前段述ぶる
 が如き悲劇を演ずるに至りたり
 エリザベス朝は女王が千六百三年三月二十四日を以て崩御ありたるに終る吾人
 が上來述べ來れるが如く何れの方面より見るも允文允武後世として仰視せしむ
 るに足るものあり商業上に學問上に將た政治上に殊に宗教上の統一を遂げたる
 の點に於て其功績最も大なるを思ふなり此等の諸點より見る時は女王は最も成
 功したる政治家なりといふ事を得べきなり

第十七章

スチユアード朝に於ける英國の宗教改革

(自一千六百〇三年至一千六百六十二年)

(其一) ジェームス第一世の時代

(自一千六百〇三年至一千六百二十五年)

エリザベス女王崩するに及んでチュードル家は此に斷絶し英國は新王統の下に立つ事となれり此新王統か蘇格蘭女王メリーの後より來らんとは此間に多少の消息なくんばあらざるなり此舊教君主は先にエリザベスの王位に對して之に代らんと志ありしものと信せられ遂にエリザベスの爲に斷頭臺上に送られたるものなるがメリーの子たる蘇格蘭のジェームス第四世は此にエリザベスの後を繼いでジェームス第一世として英國に君臨するに至りたりジェームス王の即位あるや清教徒は大に王に望を屬したり是れ王が會て長くプレスビテリアンの教

化を受けたるを以てなり然るに同王は此與に對して以爲らくノックス及其徒黨か之に對して不穩の行動に出づるなるべしとされば政治上に於ても宗教上に於てもプレスビテリアン主義はジェームス王には毫も注意を惹くには足らざりき王の英京に入るや時の内閣員に語て曰く朕の母后も又朕も搖籃の裡既に清教的惡魔の魅る所となれり朕は恐る此惡魔が死に至る迄朕を去らざる事をと清教徒はジェームスを越え更に其嗣たるチャールズをも追ひて遂には之を首刎ねるに至りたり清教徒は王の即位以後直に勢力を得たるには非ずして之には少くも五十年の星霜を経過したり

ジェームスは千六百三年五月七日エデンバラより英京に到着したるが北國より南方に出づるの途上清教徒一萬人實際其調印者は七百五十人なる團體よりミレナリーベチジョンと稱する請願書を捧呈せられたり此請願書の大要にいへらく此等七百五十人の牧師等はエリザベスの改革の調停的なるに満足せず調印外の牧師等即ち十六名に對する一名なる少數者の所見に拘はらず急激なる宗教改革を斷行せられん事を望むと王は入京以後直に監督會議を開き右の上書の細目

を出し倫敦に於て最後の刪訂を爲せり、千六百七十七年始て之に従事せしより此に至
 て三年即ち千六百十年の事なりとす、右翻譯委員中アンドリュウ大監督は十五箇
 國の國語に通じベツドエルは當時歐洲一流の亞刺比亞語學者にして、サー、ヘンリ
 ー、サウイレは教役者以外の大學者なりき、此委員中清教派の人々の多かりしは顯著
 なる事實にてレーノルツ及テチツダートンの如きハムプトン會議に於ける清教
 徒の代表者にして今又翻譯者の列に加はれるものなり、ジエームス一世は最も此
 の翻譯事業の完了に心を勞せられ、千六百四年七月二十二日カンターベリーの大
 僧正に送られし宸翰中にもいへる事あり、幾多の教役者中希臘希伯來の語學に精
 通し、平素聖書中の疑點の研究に潜心し從來の英國聖書の難澁若しくは誤謬の點
 に就て意見を抱藏せらるゝものあらば經國の大業たる聖書の翻譯事業を全から
 しめんが爲に、右等の學者高僧は悉く此委員中に網羅せられん事を卿に望むと以
 て如何に國民的事業として之に着手したるかを想見すべし、
 此事業を始むるに方りては自ら翻譯と改刪との二途に出でたり、從來英國に行は
 れたる諸舊聖書は皆新聖書の基礎として參考せられ而して新聖書の各用語は一

々希伯來及希臘の原語と嚴密に對照し、神學上に且つ語辭上に少しも誤謬なから
 ん事を期したり、蓋し聖書上の用語は一種特別にして之を通俗に用ゐらるゝ、語氣
 に解する時は不都合を生ずべき點甚だ多きが故なり、
 此新版聖書の印刷を了りたるは今より五百餘年前即ち千三百八十年ウイクリフ
 に依りて始められたる以來自國語聖書の最も完成されたるものにて今日現存す
 るものは是なり、
 殆ど此新版聖書發行の日に前後して、大監督バンクcroft逝きたるが其後を繼ぐ
 者は一般に當時英國第一流の學者として、聖書刪訂にも先覺者としての功勞多き
 イリーの監督アンドリュウスならんと信たりしに、其頃蘇人の勢力滿延に蔓延しジエ
 ームス王をして倫敦の僧正ジョージアポットを採用せしむるに至りたり、ジョー
 ジアポットの撰任は英國教會の爲には恐らく不幸中の不幸ともいふべきものな
 りし、若しバンクcroftの後を襲ふべき高僧が眞に英國の教會を了解し且つ愛す
 るの人たらしめば必ずや後年に來るべきスチュアート朝の災難の如きは免るべ
 かりしなり、此時に方り、史家往々記して曰く、英國の宗教界は大陸の哲學の爲に昏

倒せられたりと、今やカルヴァイン主義は到る處英國の教條を侵蝕しつゝ、あり新大監督アボット亦實に之に酔うて改革派中の加特力的傾向を表はしたるものに對する事極めて嚴酷なりき之に反して純清牧師及其信教の方面に於ては最も其喜ぶ所となりき然れどもアボット當時の一般輿論は頗る彼の教政に反對したり史家フルラー評して曰くアボットは嘗て服従せん事を學びたる教會を統御せんが爲に昇れり彼は羊の牧者たるの前牧羊者中の牧羊者となれり云々かゝる人は英國教權の中樞として大僧正の地位に在り絶えず積極の方針を取れる清教徒と刺戟するに於て頑面なりき大僧正の邸宅は清教徒の領袖の集會所となり英國教會を破壊せんとの志ありしもの、爲に其運動本部たるの觀あり當初彼は殺害を試むるには及ばざりしが次で暫らく公務より退隱せし後再び其職に上り茲に遠慮する所なく反對派の人々を驅りて其殺害を逞しうしたり既にして彼は勢力を朝廷に失ひ千六百二十二年頃には一牧師が彼に依りて供奉の禮を行ふを拒みたる程なりしが千六百三十三年八月四日を以て歿し其英國教會を去るや彼は其後を繼ぐもの、爲に蓋し最も至難なる地位を貽したり即ちチャールズ第一世時代

に於ける大反亂はアボット實に其道を啓くものと謂はざるを得ずジェームス第一世は千六百二十五年三月二十七日を以て崩せり即位後初年は専ら教政上の統一を計られ聖書改削の如き其宗教界に於ける功業顯著なるものあるが清教徒を以て其の以來魅いられたる惡魔を恐れたる同王は即ち其之を恐るゝ事惡魔の如くなるに拘はらず晩年は急激なる此惡魔が改革派の爲に惱ませられたる事既に甚だ少なからざりき英國の教會の惱ませられたるに至ては更に甚だしき者あり聞くからに悚然たるを感ずるチャールズ第一世時代の悲劇は實に王の晩年に於て徴せしなり、

(其二)チャールズ第一世の時代

(自一千六百二十五年至一千六百四十五年)

ジェームス第一世の後を繼ぎたるものは其第三子にして生存するもの、唯一人子たるチャールズなりチャールズは夙に英國の新教々會に於て感化を受け其感化の深きや畢生其味方よりも敵よりも毫も之を動かさるゝ事なかりきジェーム

ス王の長子ヘンリーは父王に先ちて夭折したるを以てチャールスは常に謂へらく若し英國の王位に登るを得ば清教徒と英國教會との間を調停すべしとヘンリーは平生チャールスに戯れて曰く卿にして若し所信を翻して正統教會に歸依せばわれ即位の曉には卿を以てカンターベリーの大僧正に任じ寛衣を給して其鈎股を掩はん」と然れどもチャールスの性格は依然として骨鯁曲ぐべからず一個のチャールスとして生長し運命は圖らずも彼を英國の王位に招けり斯くてチャールスの王位に即かる、や國歩頗る多難の秋なりき内帑は缺乏し國民は課税を厭へり抑も如何して之を回復すべき前代の諸君主は教會を劫掠し寺領を賣却して歳計を填補せり然れども此等は既に漁り盡くして今や殘す所なし且つや議會は決して前年の如き強制に出づるを肯んせず是に於てチャールスは公債の名を附して課税せんとするの已むなきに迫りたり即ち議會を召集する事なくして政務を擧げんとし此間には人民自由の權利を破り君主たるの地位及其生命をも賭し英國憲法の根本をも動かさんとするの危機に臨みたり是れより先きジエームス王は彼の爲に妻を迎へたるが是れチャールスの爲には最も不幸なるもの、一な

りき即ち舊教徒たる佛國王の女たるヘンリエッタマリアなり之が爲に其家庭は迷信的なる佛國の僧侶にて満たされしを以てチャールスは意を決して彼等を本國に追ひ之が爲には多分の賄賂をも行ひ社會上の厭惡を招くに至りし事亦少しとせず且つ同時に女王に對する悪感をも惹起しマリアは異教國の女たるの故を以て清教徒の監督教會に對する悪感をして一層深からしめたるものに似たり斯くてチャールスの極端なる宗教心は次第に改革問題を沸騰せしめ英國教會史中振古未だ曾てあらざる大紛亂を惹起するに至りたりチャールスの晩年には從來英國教會を圍繞し來れる清教徒は員數に於て勢力に於て是れ亦未曾有の發達を爲したりしも此間に劃したる成功と勝利とは全く暫時のものにして忽ちにして失敗絶望の淵に沈淪する事となれり今逐次其大勢を叙ぶべし清教主義の活動を豫防せんが爲に設けられたる大障壁ともいふべきはアボットに次いでラウドの大僧正に昇任せし事なりラウドは千五百七十三年十月七日を以て生る即ちバトカー尚ほ大僧正として生存しブーカーが彼の不朽なる教會組織法を出版せんとしたるの頃なりラウドはカムブリッジの聖約翰の會員にして千六百一年彼れ二

十八歳にして始めて教職に就きたり然れども彼が大學に在りて神學講師たりし當時英國教會は使徒時代より連續として今日に至るものなりと教授せしより其名高く先に清教徒の大監督たるアボレットもラウドの勢力のみは歴する能はずシエームス一世に對してラウドの名を中傷するの機會を得ざりき而かもシエームスはラウドの所説を叩きて其人と爲りの安全にして確乎たるを知り却て千六百十六年にはグローセスターの副監督に千六百二十一年には聖ダビデの監督に採用したり而してチャールズ一世に至りては更に千六百二十六年に彼をパス及エルスの僧正に千六百二十七年には内閣の一員に千六百二十八年には倫敦の監督に千六百三十年には牛津堡の大法官に而して千六百三十三年には遂に大監督に昇任するに至りしものなり

ラウドは其職に就くや聖餐式及祈禱書等に關して復古主義を唱へたるが此等は英國々民の感情に反するものとして改革派の人々の爲に障害せられたり要するにラウドの方針は英國當時の教會をして法王主義と清教主義との中間に確立せんと試みたるが如し即ち之が爲に頑固なる加特力に傾けるラウドは英國一般牧

師に健全なる神學智識を與ふるを以て唯一の救済策なりと信じたりさればラウド既に早く千六百十六年シエームス一世の裁可を得勅令として牛津堡及カムブリッジ大學に向て一層神學生の爲に其研究を奨励する旨を達したり千六百二十二年には六箇條の敕諭カンターベリーの大監督に下りたり是れ牧師に對する特別なる方針を指示したるものなり此時より牧師は其説教の政治に涉るを禁せられ又清教徒に對しても羅馬教徒に對しても相互詬誶罵詈の言を放つ事勿るべしとせられ終りに講師と稱する新階級は監督の推舉大監督の許可あり而して國王の裁可の下に始めて確定するものと爲せりチャールズ一世は千六百二十六年に右様の敕令を下し是によりて清教徒の勃興し來る勢力を稍々抑ふるに足るべしと爲せしも時勢の嚮ふ所如何ともする能はず英國人は清教徒たるに依りて真正の信徒たるべしと信するの傾向を馴致したり

次でラウドは清教徒の信奉する所なるカルヴァイン主義の三十九箇條を一掃せんと欲したり是れ後日に襲ひ來るべき大反亂の動機ともいふべきものにしてラウドは右の信條は文學上文法上に於て其意義を解釋するの外他に於ては無意義の

ものなりと辯争したるが下院は之を以て直に非清教論者なりと爲し延いて王室と議會との間に確執を生じ議會は十一年の間改めて召集せらるゝ事もなく延期せられたり此時に方りラウドの一層強硬なる古式回復の舉に出でんとする事ありアンドロニー監督はラウドの大監督たる八年前に死したるが同僧正監督の禮拜堂には極めて莊嚴華美なる儀禮を用ひたりしを以てラウドは今や模型としてアンドロニー式を採用したり彼は管轄教域を巡視するに際し獨り教條の上に修正を爲したるのみならず教壇の諸禮は總て先代の型に従ふべきを説きたりされば官職に居れる牧師等は服裝其他に於てはエリサベス朝當時の制服を着用し其寺院に於ては今又此の如き訓示あり且つ地方牧師等は教務上ラウドの感動を受くる事大にして尙ほ聖殿の装置に就て更に之を莊重ならしめんと豫圖する所あり一部の機運は之が爲に動かされ教規上の修正の爲にラウドに對して法王の教權回復の聲は當然高まり來りたり爲に羅馬教復興をいふものは改革派清教徒の爲に罪を鳴らされたるか此等は監督も其一味者の信用を墜さんが爲に試みたる一部清教徒の聲なりき即ち此聲を打破し以て清教の旗上げを爲さんと欲するに過

まざりしなり、

(其三) 大叛亂、オリヴァー、クロムエル、

(自一千六百二十六年至一千六百四十五年)

已にして王室と議會との争闘は爆發し其第一衝突は先づ蘇格蘭に於て起りたり當時蘇國に於けるブレスピリアン宗徒の勢力は如何と見るに先に一千五百六十年に於て監牧師たるもの、教制を定められ監督は正當の稱號を以て監牧師としての收入を得しも實際上監牧師としての職分を盡さざりき是に於てジェームス一世は蘇國議會に照會し充分監牧師たるの勢力を回復せん事を以てし此要求は千六百十年に於て認容せられたり此と同時に蘇國の祈禱書も編纂せられたるが其大體は時に英國に於て行はれしものよりは寧ろエドワード六世の第一祈禱書と同様のものにて後年久しく米國の祈禱書の模範として襲用せられたり此書は千六百三十七年七月二十三日より施行する事となりしが之を拒否せんとの一派團體表はれたり此一派の道具としては婦人を利用し切りに新祈禱書の害を吹聴

したり、此時に當りて蘇國は庶民大會議を起し、蘇國王に對して示威運動を始め之を暫くして歩騎兵二萬六千人は南下して英國へと乗込みたり、其勢は凄まじきものにて英國の王師は中々之と對抗すべくもあらず先づタインのニューバーンにて敗れしより廟議はチャーレンス一世をして此反徒に對して媾和を申込ましめんと説くに至りたり、

千六百四十年には短期議會を開きたれど、チャーレンスは直に之に解散を命じたるにても議會が如何に王家に對して反抗したるかを察するに足らん、然るに財政上の必要よりして茲に又新議會を召集する事となりたるか是れ有名なる長期議會にして千六百四十年より千六百五十三年迄繼續したり此議會は劈頭バウムを主任として宗教問題に關する委員を選擧し而して此等委員は北邊にはプレスビテリアン宗教の大なる後援あるを待み直に極端なる方法に出でんと迄感じたり時にスタフフォード卿は彈劾に對する答辯を爲さん爲め召致されたるが千六百四十年十一月二十五日彼は有罪なりと認められてタワーに送られて茲に叛逆者なり異教者なりとして審問せられしが翌年に至り四十八歳を以て首刎られ、千六百四

十年十二月十八日には大僧正ラウドも亦議院に召喚せられ次いで彼れも亦タワーに送られて翌千六百四十一年より千六百四十四年迄留置せられしか同年に上院に召喚されて茲に審問に逢ひしかど、反對派の詭計至り盡くして辯疏するの途なく終に斬罪を宣告せられ、七十二歳の高齡を以て此大膽なる老高僧は千六百四十五年一月十日あはれタワー、ヒルの露と消えたり、ラウドは英國の宗教改革主義を防止せんとして死罪に陥られたる第二のキャンタベリー大僧正なり、即ちクランマーは千五百五十五年羅馬教徒の手に、ラウドは千六百四十五年清教徒の手に斃れたるなり、

次に來るべきは祈禱書問題なり、後にダーハムの監督たる而して千六百六十一年の祈禱書改訂の主任者たるジョン、コージンはラウドの主なる輩下たりし故を以て二ヶ月關牢獄に投せられたるが放免の後には其教職より貶黜せられ爾來幾多の迫害を加へらる、べき先驅者たるの不幸に遇へり先にラウドのタワーに送らる、や清教徒は前年ラウドの復興に係る諸教會を破壊せんと企てたり、教壇の欄干は倒され、洗身盤は割られ法衣は引裂かれ扉戸は玻璃板を汚され、中々に無残と

いふも恐かなり、社會民衆の狼籍此の如きの時に方り上院は秩序回復の爲に仲裁者たるの地位に立ちしも下院は清教徒派の一揆に組みし右等の運動を黙許したり、此時上下兩院より協議委員を選定したれど其目的は一に當時の社會の犯亂を平穩に歸せしめんとするに在り、此委員には重に眞摯誠實の人々を擧げしかどブレスピテリアン教徒は道理若しくは調和には耳を傾くるを爲さず其狼籍は前日に比して益々甚しきを加へたり、此の如く人々狂熱に胃さるゝの時此宗教的傾向社會人心を襲ふは自然の勢なり、基督降誕祭も禁止せられ十字架も壞たれ各地の教會は皆其窓戸を閉鎖し會堂は朽廢し多くの子女は受洗の禮を修めずして生長したりされば從來の祈禱書の如きも顧みらるゝ事なく無意義なる祈禱を以て之に代えたり、

革命議會の第二步は僧正の淘汰なりし、此時有名なるルート、エンド、ブスレチ、ベチシヨン、と稱する請願書は倫敦市より議會に向て提出せられたり、其意は教會政治上監牧師會の管轄は一切之を廢除し、今後教會は神の旨に依りて治めらるべしといふに在り、牧師會議は千六百四十年の集會に於て議會よりは極めて責を受くべ

き數ヶ條を通過したり、是に於て右の決議に軌掌したる而かも前にラウドと親交ありし監督十三名は千六百四十一年八月四日を以て議會の彈劾する所となり、頗る嚴罰を以て脅かされたり、然れども此彈劾は監督等に格別の影響をも及ぼさずして経過せしが、此時倫敦の一揆は右僧正等に對して個人的改革を始め、僧正等が千六百四十一年基督降誕日には上院に臨むを危険とする程に猛烈なりき、是に於て僧正等は登院の妨礙されたる事を聲言し、此缺席中に通過したる諸案は無効なるべしと反抗したり、此反抗寧ろ常理とすべき請願は議會に於る監督等に對する第二の彈劾を惹起し、其結果として監督等は四ヶ月間タワーに幽閉されたり、此斷獄に次いで監督は一切上院より驅逐すべしとの議下院を通過したるが此議は後ち一ヶ月にして柔順なる上院をも通過したり、此僧正驅逐案の通過に對する倫敦市民の狂喜は甚じきものにて、或は烟花を揚げ鐘鼓を叩いて之を祝せり、翌年には更に監牧師會の管轄を廢除するの案を通過し、其翌年には僧正等は全く其教職より追はる而して僧正等の收入に就いては、げに議會が後に國王との開戦に際して其軍資には充てられたるなり、

従前よりの監牧師會管轄の撤去せらるゝや代りて其地位を占たるものはプレス
 ピテリアン教徒なり、千六百四十三年には有名なるエストミニスター會議召集せ
 らる此議會より當時エデンバラに開會中なりし蘇國教會の大會議に對して嚴
 格なる協商に及び、長文の盟約書を締結したるが其要旨は二箇條にして監牧師會
 管轄の撤去及プレスピテリアン教義の交替是なり、此文書の傳聞するや英國にて
 は到る處大刑罰の來らん事を思うて惴々焉たりき、先に祈禱書廢止の事を述べし
 が其影響の教職に及ぶは自然の順序なり、英國にては此祈禱書廢止を勵行する爲
 め罰金徵收を布告したり、即ち如何なる人若しくは人々にても此禁を犯して教會
 禮拜堂公會所其他私人會家庭等に於て右の祈禱書を用うるものは英倫及ウェール
 ス第一犯者は英國法貨にて五磅第二犯者は十磅の科料に課せられ第三犯者は保
 釋を許す事なく全一年間禁獄の刑に處すべしといふに在り同時にプレスピ
 アン宗の禮拜規式書を拒否したる者は四十志の科料に處せられ以上の罰則に對
 して筆に辯に反抗を試みたるものは四磅以上五磅以下の科料を申付けらるべし
 となり是に於てプレスピテリアン宗は英國に於る國教たるの實あり、千六百四十

八年には更に全國の教域を清教徒の手に歸せしむるの法令發布されたり、即ち前
 の英國教會牧師等を其教職より追放せんとするもの是なり、之よりして已往百年
 間熱心に唱導して已まざりしカルツイン主義は今や茲に始めて其基礎を建設す
 る事となれり、其建設や教會及王室の式微に乗じての建設なり、カンターベリーの
 大監督は死刑に處せられ、各監督及牧師の大團體は皆其教職より追はれたり、祈禱
 書は禁制せられ英國教會を擁護せんが爲に進んで大難に赴かれし程なるチャー
 レスは當代の荒廢を招きたる議會に迫られて憐れなる最後の光景に臨ませつゝ、
 ありされば革命主義の防衛は一時全然の失敗に了りたるもの、如く而して英國
 の教會は殆ど勦滅に歸したるかの觀あり、然れども教役者が泣いて牧年の途上に
 彷徨しつゝ、ありし間に曙色は已に東天に在り、神は必ず茲土を祝福し玉ふを見
 り、吾人は之より更にチャーレス二世の時代に於ける教勢の回復を説かんとす、

(其四) チャーレス二世時代の教勢回復

(自一千六百年至一千六百六十二年)

千六百四十九年一月十七日に於て清教徒の議會は英國に對する暴君殘害者逆賊の名を以てチャールズ第一世に死刑を宣告せしが此宣告は同月三十日の午後ホワイトホールに於て執行せられたり、王の死骸はウインドソールに移され正式なる典禮を用うる事もなく聖ジョージ禮拜堂に葬られたり、是に於て英國々民は攝政官の名に由りて清教主義の統治の下に立つ事となれり、千六百五十三年十二月十六日オリヴァー、クロームエルはウエストミニスター、ホールに於いて嚴肅に英國の攝政官に就任せられたり、此大偉人の真正なる地位は英國及歐羅巴諸國に於て歴史家中紛々として決せざる所なりき、或は大逆無道の異端者なりと爲し、或は敬虔眞摯神を畏る、愛國者の最も高きものなりと爲す、此の批評は共に極端なるを免れざるも此二説を折衷すれば蓋し其眞に庶幾からん唯英國内亂の時に際してクロームエルが殘忍なる大殺戮を斷行せしは彼を崇拜するもの、最も其辯護に苦しむ所なり、何れにしてもクロームエルが攝政官として英國の大權を掌握せしは英國史上一時の事件にして英國々民も固より深く之を喜ばず、即ち千六百五十八年九月三日に於て彼の逝去するや舉國再び王室の保育の下に居らん事を喜びしに

ても知るべし、クロームエルの子リチャードは乃父の後を継ぎしも其自らを見るに賢なるや到底其權勢を長うすべからざるを知り、千六百五十九年七月其職を辭し、茲に王室を再設するの地を成したり、
 チャールズ第二世は先君チャールズ第一世の第二子にして千六百三十年を以て生る、彼は内亂に際し夙に劍を把て父君の王位を保護せんが爲に戰へり、然るに千六百五十一年、マルセスターの戦争の後、父君の勝敗は之を天命に歸して先づ佛蘭西に遁れたり、クロームエルの死せし時、チャールズ二世はブルケスに在り、民心は既に彼に歸せしかば、速に本國に還へりて先王の後を繼がん事を希へり、彼は和蘭のブレダ城より書を本國下院に送り、約して曰く、宗教上の意見に關しては王國の平和を攪亂せざる限りに於て溫和なる良心に自由を與ふべしと、是に於てブレスピテリアン宗の代表員は彼等の先輩が嘗てジェームス一世の當時、ミレナリ一請願書を捧呈したりしが如く、チャールズを訪んて、海牙に出張し、茲にチャールズ即位の曉には清教制度の現狀を攪亂せずとの誓約を確めんと欲したり、チャールズは頗る清教徒等の擅行に心安からず、斷乎として應へて曰く、先には議會

に對して良心の自由を許したり之れ以上には自我を没却するを欲せずとされば
 代表員等は所謂現狀維持の期すべからざるを思つて直に本國に歸着せり、
 チャールレス二世は千六百六十年五月二十六日英國に上陸す翌日を以てカンタベ
 リー寺院に詣で王政の復古して即位するに至りし事を皇天に謝し而して此典禮
 には王命に依りて普通祈禱書を採用したり久しく廢止せられたる祈禱書が再び
 茲に現はれたるに付けても如何に熱心に且つ一般に前代の加特力教義に復へら
 ん事を渴望せるかを知るに足らん議會は直に教會問題に就て審議する所あり牧
 師の確立及復職案を通過する事となり之が爲に前日内亂時代の初期に於て教職
 を剝がれたる牧師等は八千人より一萬人の間に在りしが是等はチャールレス二世
 の即位と共に漸々復職しプロレスピテリアン宗の者と略相知るに至れり先に清教
 徒の議會全國の監牧師を淘汰するに方り其厄に罹りし僧正は廿七名なりしが、チ
 ヤールレス二世即位の時に生存せるものは僅に九名なりき此九名は直に其職に復
 し、殘餘の十八名は適任者を撰擧するに從ひて之に補任したりされば千六百六十
 一年十一月二十日に於てチャールレス二世が議會を召集せし時には僧正職は全く

空席なく先例に從ひグローセスターの僧正ウィリアムニコルソンは復舊せる祈
 禱書に依り祈禱文を奉讀したり、
 此時に當りてチャールレスは前年和蘭海牙に在し砌プロレスピテリアン宗の代表員
 より提出されたる請願要件に就て處理する所あらんと欲せり王は反對に清教徒
 内に於て尙不穩なる争鬭の殘存せるを詰責し而してプロレスピテリアン宗及教會
 黨の二派より重なる教役者を召集して會議を起し若し成し得べくんば二派の教
 義の異論を調停せんと圖られたり此會議は「サヴォイ會議」として知られ千六百六十
 一年三月二十五日を以て開會せらる此會議に列したるものは僧正四十二名と其
 他の教會關係者にして一半は清教徒他の一半は教會派なりジェームス第一世の
 ハムプデン會議に於ける清教徒は疑もなく同教徒中の聲名録々たるものなりき
 然れども彼等は到底凡庸の人士にして其在世中若しくは死後に何等の傳へらる
 べき者もなかりき却説今回の會議に於て重大問題とすべきはプロレスピテリア
 ン宗徒の英國祈禱書に對する抗論なり彼等の要求中の箇條は蓋し左の如し從來
 の祈禱に關する制度全體を廢止する事「アーメン」は禮拜式にのみ唱ふる事四十日

間の齋戒及聖徒紀念日を廢する事、墓上に於ける葬式は感冒の虞れありとして反對したる事等、其他力めて舊例古格を改廢せんとするに在りしが、會議全體の賛成を得るに及ばざりしは明白なり、即ち此の如きは新禱式の全廢に在る也、傳へいふ、パーレー卿エリザベス女王の首相たるや、同様の反對意見は時の清教徒より提供せられたりと、同卿は之に論戰を挑み、若し從來の祈禱書に反對ならば、清教徒等の意見に適合せる祈禱書を見ん事を求めたりと、ペーコン之を評して曰く、彼等は二個の要件を缺けり、一は學識他の一は愛なりと、サヴオイ會議は如上の提議に對して如何の決議を與へたるか、抑も如何の影響を當時の社會に及ぼしたるか、徐ろに之を點檢すべし。

然れども此會議は實際上英國の祈禱書の改廢を加ふるの機會を與へたり、即ち千六百六十一年六月十日此改廢を進行せしめん爲め國王より二大僧正に向て親書を下されたり、改廢の擔任委員は上席の僧正八名より成り、同年十二月に至りて其業を了へ之を認容すべきや否やは一に牧師會議に任じ、次いで法律案として議會に提出せられしが、之を査定せんには長時日を費やしたり、チャーレス二世も充分

之に注意し方の及ぶ限りに於て誤りなき右の改正祈禱書には何等の修正をも加へざらしめんと努めたり、之が爲め翌千六百六十二年五月十九日に至りて確定せられたるが、是れ今日英國現在の祈禱書なり、斯くてエリザベス及エドワード朝の祈禱書に對しての改正は數よりすれば六百箇條にも上りたれど、其多くは文字上の變化にして教義上には格別の影響を及ぼさざりき、而かも此改正中には重要な件々のなきにはあらず、今一々之を擧ぐるは其煩に堪へずとして改正の一般の方針は今日ハイチャーチと稱するものにて英國全體の信條の統一上に大なる力あるものなりしなり、而して聖餐禮に就いてはエドワード王朝の第一祈禱書と同様のものにて有名なる、斯道の先覺ジョン・コージンの提説は採用せられざりき、此改廢の結果は英國の教會及國民の教義上の抗論争議を確然鎮定する事と爲れり、從來清教徒は其最も迫害を受け、逆境に呻吟するの時、雖も稍々國民的教會の完全なるものとして考へられしなり、先にメリー女王の時大に舊教的分子を蕃殖したりと雖も、新教的勢力は今や從來の監督教會に對して頻りに其範圍を擴張し初めたり、さればチャーレス二世の改正祈禱書の公布せらるゝや、議會は極力英

國の教壇に立つ牧師には總て僧官を授與せられん事を要求したり是に於て從來
 教職に在りしも就任の公式を経ざるプレスビテリアン宗徒及び獨立の牧師等は
 此際正當なる就任式を行ひたり是れ英國教會の常久永遠ならんが爲に最も重大
 なる關係を有せるものなるを知るべし。
 已にして新案は再び提出せられたり即ち(一)祈禱書の教示に承引同意の事(二)蘇國
 教會の同盟を棄斥する事(三)監牧師の授任の事はなり清教徒中其教職を保持せん
 爲に之に調印したるもの少なからず而して之に反對したるものは非國教徒なり
 とて斥けられたるもの八百名の多數に上り此等は國教の準則を守らざるものな
 りとして千六百六十二年八月二十四日各其職を辭するの已むなきに至りたり此
 等の失職牧師は或はプレスビテリア宗若しくは獨立教徒の一致派を作り否らざ
 るものは時の英國の他の教派に附屬する事となり此他の者は牧師たらんが爲に
 棄てたる舊職に就くに至りたり、
 斯くて國教條例通過するに及んで英國に於ける宗教改革は茲に初めて其終局を
 告ぐるに至りしものなり盡し顯理八世よりチャールズ二世迄一五一六乃至一六

六二の間に於て英國々民及教會は二期の大變潮を経過せるものなり即ち十六世
 紀に於ける舊教主義の成功にて他は十七世に於けるプレスビテリアン主義の凱
 旋とす今左に英國宗教改革史の梗概を述ぶべし。

(一)英國教會の國民的獨立及加特力教の一致 即ち英國教會は羅馬法王の教權
 より絶對的に獨立したるも自他の新教諸派とは異り舊教的基督敎國たる英國
 より分離せるものには非ずされば新教徒とは標榜するも古來英國の監督教會た
 る加特力教會との調和に於て決して其地を失たる事なく又は其他に存續せる特
 殊の教會とも精神的には分離したる事なし。

(二)英國教會の有機的存續 凡そ真正なる教會の生命を存續するには三個の要
 素あり(一)使徒より來たれる監督職(二)祭司として奉仕する事は確乎たる聖典式即
 ち是なるが此諸要素は英國教會が當初より具備したる所なり而して右の中著し
 き點は聖餐式にして英國及大陸の新教徒と大に其趣を異にせりエドワード及エ
 リザベス時代に於ては過激なる新教主義も行はれしなれど古代よりの僧職系統
 は依然として繼續し宗教改革以後も亦前の如く僧職の系統に於て異なる所なし

且又嚴格なる聖餐制は英國教會に於ては決して缺けたる事あらず、聖餐式が救世の業に重大なる關係を有せるは言ふ迄もなき事にて、此特例は改革以前中世の學者の之が存続に最も力を致せる結果なり。

(三) 英國教會の教義及祈禱の事、英國教會に於ける教義に就いては二様に制定せらる(1) 聖典中には最も神聖確實にして毫も錯誤なき神の旨を記載し如何なる反對説ありとも之を變更すべからざる事(2) 衆生濟度の爲に信するを必要とする彼の三信條中に含める所謂信仰箇條なるが此三信條と稱するもの、外に二箇條ありて、夙に改革運動に際して發表されたるもの即ち(A) 聖典に就て最も信するに足るべき註釋を爲すものはローマのクレメントよりレオ大法王に至るまでの東西教會師父等の著述及び(B) 最初第四ヶの總會の決議に則る英國宗教改革者の著述を見るに彼等が自由自在に往古師父等の著述を引用し信仰の事につきては最初總會の決議に則れるを見る又之に加へて外に必要なものは往古祈禱書なり英國宗教改革者は祈禱書を以て改革以前の賜として珍重せり中古の弊害を一掃し純粹無垢なる祈禱書を以て新しき教會の骨髓とせりき。

第十八章

宗教改革の結果

前章に於て吾人は宗教改革の結果に就て其善例並に惡例より少しく述ぶる所ありしが本章に於ては更に精密に之を觀察せんと欲す。

(其一) 國民的生活の發達上宗教改革の影響

新教徒の宗教改革運動は其取りたる各種の方面中唯其一部分に於てのみ成功したるものなり其成功とは他なし即ち國民的生活上の發達にして之と共に他國民との國際的關係を密接ならしめたるもの是なり獨り英國のみならず宗教改革の成功したる國には一般に國民的生活上の發達を見しなり之に反し宗教改革の失敗せし地方は如何と見るに其反動の勢に驅られ従前よりは層一層の束縛を蒙るに至りたり引續き法王教權の下に服従せし諸國民即ち佛蘭西伊太利及西班牙等に於ては教會と王家と二様に國民的生活の發達を防遏し之が爲に諸階級の差別

を甚しからしめ、從て此等を打つて一彈と爲すべき機會を失はしめたり、此主權の確立の點に於ては宗教改革は近世的文明に進轉するに際して多少の障礙となり、其影響今日と雖も尙ほ底止せざる革命及反動の續發の如く害毒を流し、以て世界を苦しむるに至りたり、且つや瑞士及日耳曼の如く一部分の成功確實なる地方あり、雖も尙ほ内亂從て鎮まれば從て起りたる結果健全なる國民的生活の發達を阻礙し、其下等社會をして長く奴隸の境界に苦しましめたり、然る時は宗教改革より來れる大争闘は歐洲諸國民間の文明進歩に寄與する事甚だ少なきに似たり、而して其國厄の結果として各國々民は尙ほ前代の桃花源を追想するを禁ずる事能はざりしなり、當時大陸の諸先進國と並に英國とに於て舊羅馬教の版圖を世界に擴張せんとの運動中々に盛んなりき、牛津堡の改革者モーア、コーレット、エラスマス等は政治の大本は君主の榮譽繁昌よりは寧ろ臣民の幸福を保護するにありとし、金誠に基ける國際政治を主張せしが、此の議論を布敷したるエラスマスの著書「基督教義の君主論」に對して有名なる伊太利のマキアベリーの「君主論」は表はれたり、エラスマスのいへるが如く、從來諸帝王は臣民を見る事、市場の家畜に異ならず、故に

宗教改革の直接の影響は蓋し國際上に於ける一種の制裁の確立にして、エラスマスの著書に次いで之を祖述したるヒューゴー、グロシユースの國際法論出づるに及んで各國々民が其國際關係に於て所謂金誠を遵守するに至りしもの、近世文明の最も大なる事實とすべからざるか、

(其二)國民的言語及文學發達上の影響

然れども宗教改革が果して一部分に影響したるに過ぎずとすれば、其國民的生活の範圍内に於て國民的言語及文學の發達の如きは最も著しきもの、一なり、此現象は日耳曼に於て特に之を然りとす、即ち彼のルーテル及ハッテン等は共に銳利なる筆鋒を以て平民貴族並に時の學者に向て其改革意見訴へたり、ルーテルは聖書を拉典語より翻譯し、自國民に附與したり、此翻譯に次いで、の事業は讚美歌を撰べる事にて、忽ち中等社會並に寒村僻地の戸々家々に傳唱せられたり、即ち是れ拉典語及中世の學風を一轉する唯一の動機となれり、之よりして獨國語は次第に發達して今日に迄及びたるが是れ實にルーテルの聖書と讚美歌との賜なり、其程度よ

りすれば日耳曼の如きには非るも同様の影響は佛國に於ても之を見たり、カルヴィンの佛國に於けるやルーテルが日耳曼に於けるが如く其運動充分ならざりしも、此ゼチバの改革者の筆に成りたる論議文章が佛國文學の模型として、後日の發達を助けたるは、現に今日に於ても發する所なり、同様の結果は英國に於ける將た同じ茲に宗教上の爭論は、拉典に依らず英國語を用ひたりしを以て頗る英國文學の發達を刺戟し、シエークスピア、ミルトン等の由て以て出づべき地を成したり、古文學として千六百十一年の聖書翻譯はルーテルの聖書翻譯の日耳曼に於けるが如く關係ありて、英語を用ひる民族は幾度か此直鏡にして光彩ある聖書に還へるなり、然れども近世の言語及文學の發達は普通教育の奨勵蓋し最も力あるものなり、サヴァナローラはフロレンスに學校を建設したるが英國にてはコーレット初めて、其創設者たる名譽を負ひ、之に次いでエドワード六世の文典學校設立あり、ルーテルを初めとして日耳曼の新教諸國は何れも學校を建て、カルヴィンはゼチバに而してジョン、ノックスは蘇格蘭に同様の舉に出でたり、最後に清教徒は新英倫に教育普通の爲めに是れ亦學校を設けたり、ゼスイット教徒も教育事業に就ては

大に見るべきものありて、到る所に成功したる此の如く、新舊何れの宗教に屬するとは謂はず、當代に於ける教育は進歩發達の大に見るべきものあり、是れ豈に吾人の大に注意すべきものに非ずや、

(其三) 家庭の生活に於ける影響

人道の單位は家庭あり、人の生る、や相寄りて群居するを性と爲す是を以て一國々民の文野如何を察せん、とせば先づ其家庭生活の狀態を窺ふに如くはなし、然るに此家庭生活や十七世紀以前に於ては、到る處僧尼の獨身論に感化せられて、快樂の大半は凋謝したるを見たり、而して其結果としては、僧侶が國民の品性を高潔純正ならしめんとしたる其理想に反して、無道不徳總ぶる罪惡は、湛々社會の根柢を浸したり、此結果は獨り基督教信徒の性格のみに其害を受けたるには非ず、信徒の家庭が著しく減少せるを見たり、一旦右の僧院を解散し、各寺領の牧師の結婚を許せしは、道德政治并に宗教の諸點より觀察して、文明進歩の上、大濶歩を爲せしものと謂ふ事を得べし、げにや圓滿なる家庭の幸福は、延いて種族に及ぼし、種族より

國民に及ぼし法律秩序及國際平和の上に人類の理想を實現するに至りしなり、

(其四)一般宗教上の影響

宗教改革の他の影響は聖書をば獨り牧師の職業たらしめずして一般社會の教典たらしめたるに在り、即ち國民は先きの拉典語より成れる無意義なる聖書には非ずして自國語にて書かれたる聖書をば日夕之を誦讀し牧師の説教に待たずして自ら研究するを得るに至りたり、之に由て自己の信仰を確ふし精靈と神との關係を直接に感知せしめ、決して僧侶と懺悔室とより來るものに非ざる事を悟らしめたり、思ふに人々をして真正なる基督に還らしめたるは此個人的信仰の結果と謂はざるを得ず、基督教が當代社會の大運動よりは更に大なるものありて、文明の進歩を促したる事極めて顯著なりしは言ふ迄もなし、吾人は更に一步を進めて言はん、とす、十七世紀の當時に於て近世文明の曙光を放ちたるものは基督教の眞義を發揮したる改革者の勞其多きに居るものなりと、

(其五)科學的研究の進歩に及ぼしたる影響

以上に述ぶる所の心意的作用の啓發したる事は、當り宗教上のみに止まらざり、即ち科學的研究の勃興是なり、航海者は絶えず各地の回航に從來したる結果、天空は決して平圓板に非るを知り、地理上の智識の開拓さるゝと共に、天文上の幻想も之に睡いで起りたり、されば宇宙に關する更に眞面目なる且つ深き觀察を爲すに至るは自然の勢なり、然るに、かゝる新現象の新研究をば之を當時の所謂學者甚しきは宗教界の人々に依託したりしかば、一時其進歩は遅々たりきされば、科學界のルーテルを要する事甚だ切なりしも、時代は未だ斯界の改革者を生むに至らざりき、已にして沈黙研究此に久しかりし一人の天文學者出でたり、其説に曰く、遊星と月との運動如何といふに、太陽系中、太陽は中心にして地球は其周圍を廻ぐるものなりとの假設に依りて、僅に説明する事を得べしとして、月は地球の衛星なりと説けり、此等の理論は後年アイザック・ニュートンに完成せられ、天體論に關する名譽は實にニュートンの負ふ所となれりと雖も、當代の素朴なる天文學者ニコラス・コバ

ニコラスの名を忘るべからざる也。コパーニコラスはルーテルに先づ二年にして死せり。彼の傳記を閲するに時の諸人傑を排するに足る丈の極めて大膽なる生涯を送りたる者なり。彼は其初め波蘭のクラスカウ大學にて教育を受け、後ち羅馬に入り、當代屈指の天文家に就て研究年あり、之よりして彼は久しき間科學的研究に年月を費やしたるもの、如し彼は教會に對しては忠實なりき然れども彼が年來の研究の結果として抱ける大真理を語らんと欲すれば教會の教則と衝突せざるを得ず。彼は前後三十六年間歐洲大陸は新教徒の爭亂闌なりしの時彼の觀察と發見とを悉く網羅せる畢生の大著書に従事し居れり然れども彼は此大著書をも保羅三世の治世迄は公刊せざりき。彼等三世といへば宗教上の爭亂少しく鎮定に歸したるの時なるが、此時にはコパーニコラスも既に老境に臨み、健康も痛く破りたる曉なれば、其著書の印刷者の手に渡りし時は彼は既に其死床に横はりしなり。彼が心を算めし總ての問題は彼の死に先ちて安全に印刷に附せられ而して時の數學大家は彼れ復た起つ事能はずと聞いて曰く又日其枕邊に侍し最後に印刷所の使者は其印刷成りたるを以て見本一卷を持して此に會するや、コパーニコラスは涕泣

して之を取り、且つ自ら之を組立て、已にして溢焉永眠したり。時に千五百四十三年享年七十歳なり。彼に繼いで出でたる大家又多く、ダイチヨ、ワレー、ケフラー及びガリレオの徒其尤たり。兎も角も科學的觀察に組織的模型を與へ自然界に對する研究の今日の如き發達を爲すに至りしもの彼の功績も大なりと謂ふべきなり。

(其六)經濟上の結果

曠世の人傑ルーテルに由りて其端を開きたる宗教大改革は長へに封建制度の根柢を蹴破し得たり。然れども日耳曼は其封建の勢を成せる事遠く現世紀の當初に達する迄は尙ほ之を排脱する事能はざりき。加ふるに農民戰爭に於て百姓が失敗を取りたる結果下等社會は極めて壓制の下に呻吟したり。佛國にては農奴制は已に過去の事件に屬し千七百九十八年の革命以來は往年の苛酷なる地代課税の如きは見るべくもあらざりしなり。英國にても農奴制は已に廢せられたるが前年來勞役に代ゆるに金錢を以て之を支拂ふの例なりき。且つや新世界に於て金銀鐵山の發見ありしより英國農民の負擔漸次に輕減せられたるのみか小作人は次第に

其位地を高めて地主とまで成り上りたるも多し去り乍ら佛獨の農民の境遇は未だ英國農民と日を同うして語るべきもなく尙ほ依然地代として勞役若しくは物品を拂ひたり是を以て一日長時間勞役に服するのみならず其收穫をも前年と同量丈を納付せるなり若し英國の農民にして以上の如く漸く收め得たる土地の増殖に力め之を繼續せば彼等中には屢々廣大なる土地を有し納税額の如きも全く名義上に過ぎざりしかば英國には地主農民の多數を起すべかりしに彼等は後ち漸次に其土地を去り賃銀を得んが爲に勞動者と爲れり畢竟するに是れ英國商業の發達及資本増加の結果にして工夫を使役する事の從て多きが故なり此の如きは英國に於ける封建制度の破壊に際して暗遷黙移の間に生じたる十七世紀の現象なり而して此商業の發達は今尙ほ英國の遺産として名譽として彼の振古無比の大殖民を併有する所以の道たりしなり

(其七) 宗教改革の利弊

上來述ぶる所は主として宗教改革の世運に裨益ありし諸方面なるが其側面利弊

のある所を斷する時は史家は必ずや人類の進歩を沮碍せるもの此運動の主唱者の名譽の爲に甚だ之を惜むべしと爲すものなくんば非なるなり其缺點の最も顯著なるものは公平無私寛大の目を以て反對教徒を視ざりしにあり羅馬教徒に比する時は斯教徒は當初よりして偏僻の弊は勿論少なく新教徒が由て以て反抗したる特殊なる宗教的暴君及學者的奴隸より人間良心の自由を確立したるは其功少小に非るも彼等が羅馬教徒に對するの處置たるや殆んど五十歩百歩の讒を免れざるなり見よルーテル宗徒は羅馬教徒がルーテル宗徒を迫害したるが如く羅馬教徒を迫害したり寧之より甚だしきものありルーテル宗徒は羅馬教徒に對するよりも更に痛烈に復讐的にカルヴィン宗徒及ヅキングリ宗徒を遇したり英國の新教徒は大に羅馬教徒の血を絞りし反動としてメリー女王治下の舊教徒の爲に痛く其復讐を受けたり後ち英國教會は頻りに清教徒を苦しむるや清教徒は信仰の自由を得んとて新世界に遁れたり其遁れたるは自國の信條慣例の下に生存するを屑しとせざるに在るのみ此等の事實より見るも新教徒の宗教改革は人をして寛裕ならしめたりとは謂ふべからざるなり然り此等一時の失態ありしに關せず

其全體の上より觀察する時は必ずしも彼等が反對教徒に對する態度に於て其寛裕なるものあるを認めざるには非ざるなり彼のサー、トーマス、モーア及エラスマス
 の著書は人間の心の各自親睦寛恕ならん事を期したるものにて要するに新教主
 義は當代の人心に良心よりの信仰を扶植し自由の爲に戦ひたる人をして其自由
 を抛つて降らんよりは先づ其信仰の自由を抱持して時の迫害を忍ばんと決心
 を與へたるものなりと謂ふを得べし。
 改め言へば宗教改革が歐洲の諸國民中に其主義を注入するに於て成功したるは
 何人も拒む能はざるなり其運動の時に或は狂暴狼籍害毒を社會に流したるもの
 少なからずと雖も彼等が其主義とし理想とし信仰とする所を標榜して天下に呼
 號するや眞に是れ世界進歩の大勢に則りたるものなりとの觀あるを拒む能はず
 進歩には超越なし獨り超越なきのみか恰も潮汐の且つ満ち且つ引くが如く時に
 進退消長あるを免れず而かも其進歩して止まざるや百川の東するが如く何づれ
 の時か必ず最後には海に達するなり此他に吾人の最も注意すべきは總て現實上
 の進歩は人間智識の範圍内に限らるべしといふに在り此制限や改革運動の當時

に方りては極めて狹隘にして航海者の探險に依りて地球は圓體なりといふを覺
 知したるも尙ほ地球は中心にして總ての天體は毎二十四時間中其周圍を環行す
 るものなりと信じたりしなり且つ時人以爲らく地球にして若し動かば其動くを
 目撃すべきに斯く静止するは動かざるの證なりしとし果して地動論者の云ふが
 如くせば塔閣會堂は回轉の際全く破碎し雲霧は全く空間に殘留せらるべきにあ
 らずやと去れば宇宙に關する當時の輿論は地球中心説にて諸天體は毎日之を中
 心として回轉すと信せられ殊に天體の運動は極めて神秘的にして畏懼すべきも
 のと看做されしなり或る人嘗て天體の秘密に就て問ひしにエラスマス賢かしく
 も答へけるは神獨り之を知り玉ふとルーテルは燦爛たる星群の運動は疑もなく
 天使の業なりとし而して生涯中起り來る諸件に就ては惡魔の使節なりと考定せ
 り嘗て彗星の表現せし時は是れ恐ろしき事件の前兆には非るかと思へりピコー、フ
 イシノー、コーレット、エラスマス及モーアの徒は斯かる觀念に就て嗤笑したるもル
 ーテルは却て占星學者の稱説する所を嗤笑せり、
 幻象感應に關する迷信はサヴォナローラより下りてロヨラの如き名智識と稱せら

れたる改革者の先覺等中にも普通の事として行はれたり、ルーテルは如何なる占ト幻想にも耳を傾けざりしかど又如何に彼が迷信的人なりしかを察すべし、彼はメランクソンと共に熱心に妖怪がタイパー川を發見したりとの訛説を信じ、其妖怪といふは驢頭人身にして鳥爪を有せりとせり、後ち聖書を研究し而して是れ法王の教權衰落の前兆たるべき一奇蹟なりと結論し、此事件に關して一冊子を發行したる事あり、ルーテルは又妖術なるものを信じたりといへり、而して當時、刑律に觸れたるもの、如何ばかり凄まじかりしかを想像せんか不幸なる漢子の开は其精靈を惡魔に售り、或は密に惡魔に結托したりとして火刑に處せられしもの幾千人なりといふを知らず、此火刑に處せられしものは次第に増加し、十五世紀に十六世紀よりも十七世紀に至て更に多かりしが如し、其相互に斬殺し酷待せし、宗教改革時代の話説は固より此に盡きたるには非ず、英國にては單に流離したりといふの外、何の罪もなきに絞罪に處せられしもの幾千人に達すべし、獨り火刑絞罪のみならず、總ぶる肉刑に於て、酷の酷を極めたるもの寧ろ言ふに忍びざるものあり、其意蓋し犠牲として地獄に墜落せんとするものなり、此の如き時代に所謂寛裕な

るものありや、此の如き迷信を打破せんが爲には之に先ちて天則に關する智識を啓發し以て眞なる人道に反せざるべからざるなり、かくの如く十七世紀に於ける宗教改革は近世文明に進むべき一波濤なりといふ事を得るなり、即ちヲルムスの會議を經、チザランズの騷亂を經、三十年戦争を經、クロームエルを代表者とせる英國教徒の革命を經、將た佛國大革命を經、始めて此に至りしなり、其間一起一仆一成一敗あるを免れざりしも、其運動や未だ曾て進歩に歸着せずんば已まざるなり、人類の進歩はかゝる風雲慘憺の中に刻み來れるものなりとすれば、此進歩の中、又實に彼の反動の潮勢を驅て起れる恐ろしき禍機なるもの此に存す、而かも流れ流れて其低きに就かずんば已まず、十九世紀は斯くして了るか抑も亦二十世紀は如何にして來るか。

第十九章

露西亞教會

今紀元八百六十二年より千八百六十年迄の經過を年代を追うて略記すれば、

(年次)

(摘要)

紀元八六二、ルーリック露西亞帝國を建設す、

同 八六三、メリチアス及サイリルをブルガリアに派遣す

聖書の露國譯成る

同 八七九、オスガ―及ダイアの殉難、

同 九五五、オルガの受洗

同 九八八、カ―ソンに於けるウラジミルの受洗及キエフに於ける露人の改宗

同 一〇一〇、ベチヤースキー寺院をキエフに建つ

同 一〇一五、ボリス及グリーブの殉難

同 一〇一七、ヤロスラフ第一世の即位

同 一〇五四、ノブゴロツドに聖ソフィア寺院を建つ、

希臘及拉典教會の分離、

同 一一一三、ウラジミル、モノマカスの即位、

同 一二四六、アレキサンドル、子ヴスキ、

同 一二〇五―一四七二、韃靼人の侵來及其壓制、

同 一三二五、モスコ―教會の建立、

同 一三三八、サージヤス、トロイツァ寺院を建つ、

同 一三五四、アレキシス大僧正たり、

同 一三八〇、ドンの戦役、デメトリアス、ドンスキ―韃靼人と戦つて勝つ、

同 一三九五、タメルランの退陣、

同 一四四八―一四六一、大僧正ヨナア始めて君士坦丁堡の管轄より獨立す、

同 一四八三、君士坦丁堡はオットマン人の陥る所と爲る、

紀元一四六七、 アイヴァン三世、君士坦丁堡のソフィアと婚す、
 モスコイ寺院の建立、
 同一四七二、 オカにてアイヴァン三世の勝利、
 同一四七七、 露國より韃靼人を逐ふ、
 同一五三三、一五八四、 アイヴァン第四世の御代、
 同一五六八、 聖ヒリツプの殉難、
 同一五八七、 ジョーブ始めて法教師長と爲る、
 同一五九八、 ルーリツク王統絶ゆ、
 同一五九八—一六〇五、 ボリス、ゴドノフの治世、
 同一六〇六、 奪位潜稱者の騷亂、波蘭人の侵入、
 同一六一三、 トロイツァ尼刹の包圍、
 波蘭人を逐ふ、
 ミカエル、ロマノフを立て、ザールと爲す、
 フイレット法教師長たり、
 同一六一九、

同一六二一、 サイリル、ルーカ、君士坦丁堡の法教師長たり、
 同一六三三、 法教師長ヨアサフ第一世、
 同一六四二、 同ヨセフ、
 同一六四五、 ミカエルの子アレキシス、ザールと爲る、
 同一六五二、 法教師長ニコン、
 同一六五四、 時疫流行、
 新ジエルサレムを建つ、
 同一六五八、 ニコンの退隱、
 同一六六七、 ニコンの免黜、
 ヨアサフ第二世法教師長たり、
 五月三十日、ビーター大王生る、
 同一六七三、 ビチリム、法教師長たり、
 同一六七四、 ヨアチム、法教師長たり、
 同一六七六、 セラドル第二世、ザールの位に即く、

紀元一六八一、ニコン寂す、
 同一六八二、アイヴァン五世及ビーター共にザールたり、
 同一六八三、ラスコルニクスの分離、
 同一六九〇、アドリアン、法教師長たり、
 同一六九六、ビーター大帝單獨ザールたり、
 同一六九八、ビーター、和蘭及英國に歴遊す、
 同一七〇〇、新曆の紹介、
 同一七〇二、法教師長職の廢止、スチーブン、ヤヴォルスキ、後見職たり、
 同一七〇五、聖彼得堡府を建つ、
 外教を認許す、
 同一七〇九、ロストフのデメトリアス歿す、
 同一七一七、ビーター、巴里に在り、
 太子アレキシス歿す、
 同一七一九、ゼスイット宗徒を逐ふ、

雜婚を許す、但し生子は正統信仰に依りて教育さるゝを要すとせり、

同一七二〇、神聖會議を起す、
 同一七二一、ビーター、全露西亞皇帝たり、
 同一七二二、スチーヴン、ヤヴォルスキ、寂す、
 同一七二四、諸寺院を改革す、
 同一七二五、一月二十八日、ビーター大帝逝く、
 遺命に依りカザリン一世女王の位に即く、
 同一七二七、ビーター二世即位、
 同一七三〇、アン即位、
 同一七四二、エリザベス即位、
 トロイツァ學院を開設す、
 同一七六一、ビーター三世即位、
 同一七六二、カセリン二世の即位、

紀元一七六四、モスコーの法教師長職廢せらる。
 同一七七〇、モスコーに時疫流行す。
 同一七九六、保羅即位。
 同一八〇一、アレキサンドル第一世即位。
 同一八一二、佛軍の侵入。
 神學者プラトー卒す。
 同一八二五、ニコラス即位。
 同一八六〇、希臘教日本に入る。
 露國教會の由來を案するに之を四大時期に區分するを得べし、曰く、建設の時期曰く、統一の時期、曰く過渡の時期、曰く改革の時期是なり、

(二)建設の時期

(自九百五十年至一千三百年)

露國教會の歴史を閱するに當りて最も感ずる所は此教會は傳道の本體を屬せざ

る事に在り、即ち君士坦丁堡の如き其他重要なる諸中心地は決して古來傳道に熱心なる市府には非ずして之を要するにスラヴ民族は主に其自己の爲に生存せしなり、此非難は古代露國人の免るべからざる所なれども吾人は尙ほ夙に紀元四百年代に於て希臘の僧正ウルフラスが傳道の爲に危険を冒してゴシツク民族の間に彷徨せるを發見するなり、抑も露國人が改宗に就ての事蹟を察するに記録として存するものには直偽の判すべからざるもの多きは他の古代諸民族と異なる事なし、傳へ稱す使徒聖アンドリュースはシノーブより羅馬行の途次、此に上陸し、キエフの山を指し叫びて曰く、爾は彼處の丘陵を見るか、如今彼處の丘陵には神の榮光輝くべし、彼處は大なる都府となり、神は其中に多くの教會を起し、玉はんと彼は茲に十字標を樹て、伊太利に向て發程したりと、此他信を置くに足らざる口牌少からざれども吾人は直に正史上の事件に移るべし、紀元八百六十二年、ノルマン人茲土に侵入し、英傑ルーリツクは其一族を率ゐて露西亞の王位に登りたり、其子孫相傳へてウラジミル(紀元九百八十年)に至りたるが是れ蓋し露國教會の建設者として仰がる、の人たり、彼の改宗は露國古代教會史上の大事事件なるを以て吾人は先づ彼

に就て一言する所なかるべからず彼は有名なるオルが女王紀元九百六十年の孫にして夙に驍勇の名あり其本来の信仰よりすれば彼の罪惡は極めて野蠻的なりし丈け其國人中に行はる粗笨なる偶像教の熱心なる信者なりき即ち此の如き熱心なる迷信は一度真なる信仰の光之に點するに及んで彼の心に如何の變象を來たしたるかを見よ此時に方りて最初にウラジミルに近きたるはバルカリア傳道會より來る回々教徒にして彼等はウラジミルをして神を信じマホメットを崇拜せしめたり其信仰箇條としては酒色を禁制し一身を清淨に保たば死後七十人の美姬は彼の爲に供せらるべしとウラジミルも大體に就ては承引したるも嬉々たる露國人民の生活より酒を絶つといふに及んで平かならず彼は遂に回々教徒を追放したり回々教徒に繼いで來りし者は蓋し羅馬教會の派遣僧なりウラジミルに説いて曰ひけるは彼の信せる神々は木より成れり而かも羅馬法王の教へ玉ふ神は唯だ一柱の眞神にて天地萬物を造り成し玉へり云々ウラジミル曰く歸國せよ我等の祖先は爾の宗教を信せざりし又法王よりも之を得ざりきと此後に來りしものは猶太人なり又説いて曰く基督教徒は罪人として磔せられたるイエス

を信す故に基督教徒の宗教に決して高潔なるものといふを得ずとウラジミル問ひけるは爾等の本國は何れなりや猶太人答てジェルサレムに在り然れども神は我等の罪障を怒らせ玉ひ我等を列國の間に散せられ市府は基督教の手に歸せりとウラジミル又之をも答めて爾亦退去せよ若し爾等の神が爾を愛したらんには神は必ず爾等を保護すべし我等は恐る神が爾等を散せし如く境外に我等を散せられん事をと終りに僧侶若しくは傳道師に非ざる一人の哲學者希臘より來れりウラジミルに謂て曰く其信仰を以て陛下に語りしマホメット教徒は其罪障の爲に憐にも嚴罰せらるべし羅馬の使節は決して眞の宗教を茲に齎せるものに非ず醜態せざる麵麩を以て供養を行ひたればなり又猶太人も何故に基督は猶太人の手に惱みたるかとの眞の理由を述べざりき次で哲學者は天地開闢以來總ての神に關する宗教上の事蹟をウラジミルに語り且つ之に示すに最後審判の圖を以てし右手は天堂に上り左手は地獄に落つべきを説き一步を進めて曰く若し陛下にして右手の天堂に入らん事を望まば先づ須らく受洗せらるべしとウラジミル大に動く所あり告ぐるに熟慮を加ふべきを以てし哲學者を送り還せり

翌年ウラジミルは諸貴族諸王族を招き之に告ぐるに異様の信念を抱くに至りたる事を以てせり諸王對て曰く何人も我等の信仰を非難せしには非ざるのみか爾他の諸宗教を排斥する爲め却て之を稱賛せしなり若かず國中の賢者を諸外邦に遣はし各地の信仰宗旨の如何なるものなるやを研究せしめんにはとウラジミル之に従ひ時の賢者數名を派遣したり歸朝するに及び復命して曰く回々教徒は其頭部を覆へるまゝ、祈禱せり其惡臭は堪ふべくもあらざりき西方諸國の教會は一も裝飾の見るべきものあらざりしも回々教徒の會堂には參照するに足るべきもの多かりし云々さはれ其最も重要なる報告はツプロゴットの訪問に在り此時紀元九十八年ペーセルト其兄弟たるコンスタンチン位に在り異邦國の使節來ると聞き法教師長をして莊重なる禮典を設けて之を接待せしむ且つ命じて曰く彼等をして我等の神の祭ひを見せしめよと是れ蓋し當時の大典にして聖メフイアの會堂に於て催されしが此會堂は建築の大輪奐の美天下に比なしと迄稱せられしものなり露國の使節は位置の最も宜しき所に導かれたり香料は薫り歌唱の聲は反響し法教師長は見るからに眩き大法服を裝へたるが露客は先づ神燈の燦爛たるを

讚美の凄まじきとに感動せられたり而して其最も驚嘆せしめたるものは牧師副牧師等が各々手に炬火を携え、雙肩には白麻布を懸けしが其聖殿に表はるゝや衆民は皆其膝下に伏し、カイリー、エライソンと叫びたり露客は案内者の手を把り謂て曰く我等が今日見たる總てのものは實に畏るべく奇異にして理外の事に屬せり我等は若き人の翼ありて空を翔り、ホーリー、ホーリー、ホーリーと歌ふを聞けり是れ我等が最も驚きしものなりと案内者は答て、足下等は天使が此日の大典を祝はん爲に茲に來り舞ふとは知らずやと露客は聞き了りていへけるは御最なり我等は尙ほ以上の證説を願はず我等をして再び歸國せしめよと此の如く露國の使節は驚嘆大息してウラジミルに復命して曰く我等は直に天上に在らざりしか否やを疑ふかゝる盛典大禮は地上に於ては蓋し見られ得べくもあらざるなり我等は目撃せしものを悉く言上するに堪へざれど彼の光景を一見したるものは何人か此感なからんウラジミル亦使節の如く感動され且つ昏迷したり、グリミアに於て彼のチエソンの市を圍攻したるが彼はクローヴィスの如く奮ふらく若し成功せば洗禮を受けんと成功の神は彼を守れり其志を遂ぐるを得る

に及んで彼は改宗の約を以て、ペーセルに要求するに其妹アンの結婚を以てし、同時に此要求にして聽かれざる以上は既にチエアソンに於て爲せしが如くコンスタンチノープルを窺はんと脅迫したり、アンは初めは之を肯んせざりしかど已にして此蠻酋の懇求を容れたり是れ祖國の大都を荒涼に附せざらん爲め自ら其犠牲となり且つは大なる北方の異教國民をして改宗せしめ基督教が君士坦丁堡より露西亞帝國に渡航すべき海峡を以て自任せしが故なり是に於てウラジミルは九百八十八年チエアソンに於て洗禮を受け且つ露國民一般キエフに於て受洗せらるべき旨を布告したり、露國民は當初は多く躊躇したりしも、ウラジミルは遂に強行的に肯んせしめたり、木製偶像は無残にもドニーベル河に投せられ而してキエフの全市民は同河中に其身を投入し、或は岸汀に座し或は水上に游泳し其間僧侶は讀經を爲し、式終るに及んで各自其家に歸りたり、此場處には露國に於ける最初は基督教會建立せられ爲に爾後靈場として崇められ古來口牌の傳ふる所の露西亞帝國のグラストンベリーたるキエフが爾來其カンタベリーとなりし所以なり、

以上の改宗と連接して數箇條の注意すべき要點あり、第一にウラジミルの使臣を刺戟したる君士坦丁堡市の勢力の驚くべきものあるに在り、當時露客は同市に於て確かに天國の光景を目撃したりと信じ此感慨は爾來永久に露國人を支配せしなり、モスコウの寺院中には現に露國使臣が聖ソフィア寺院に於て見たりし要點の摸型を存するにても知るべし、君士坦丁堡の法教師長の教權が露國々民を感化せしは勿論なれども、以上二寺院の外部の關係や決して破るべくも非るなり之よりして露國の大僧正は五世紀の間はビザンチン人か否すんばビザンチアムと密接の關係ある人々なりき、其他教權教職の消長移動に關して東羅馬教會は總て之に干渉し、ウラジミルとアンの結婚は今尚ほ活ける勢力たるなり、第二は彼等が其如何に教書を重んずるかになり嘗て希臘の哲學者がウラジミルに示せし最後審判の圖は露國教會の教書の先驅者たりしなり、げにや教書は露國教會に於ける信仰維持の點に於て重大なる效用を致す事と爲り、公私を問はず到る處に其家室を神聖ならしむべき要材たり、獨り家室のみならず街上に門戸に、船中に停車場に、驛舎に、皆教書を掲げ、其前には燈火の輝けるを見るべし、之を私人生活に於ては結納品

誕生祝品若しくは祖先の寫真中には必ず此教畫を加へ又同國人の警語として教畫を描ける軍旗は上將軍より下兵士迄を鼓舞獎勵すと稱せられ韃靼人波蘭人及佛國人の侵入の當時皆之を以て陣頭に翻したりといへり此の如く教畫に對する露國人の趣味感情は技術としてには非ず實に唯一の表號として教訓として仰ぐに在る事他に於て殆ど見ざる所なり露國を見舞ひたるものは必ず言はん頂上より根柢まで一側より他側まで牆壁に屋蓋に幔幕に將た圓柱に總て燦爛たる教畫を描かるゝを見るに第三には露國人の改宗せしより教會は國家統治の權力に偉大なる關係を有するに至りし事是なり多少の除外例はありとして露國は歐洲諸國中其傳道師の力には非ずして君主の命を通じ主に且つ直接に基督敎化されたる事其比なしといふも不可なきに似たり使徒としてゴールにはマルチンあり英倫にはオウガスチンあり日耳曼にはボニフエースあり然れども露國に於ける一人の使徒は唯君主たるウラジミルあるのみ斯る國民的改宗の遂行の如きは蓋しスラヴニツク人種の特性と謂はざるを得ずキエフの人民曰く洗禮が果して不可なりせば我が王侯貴族の之を行はせらるべき筈なからんと露國の教師は常に國家

の消極的器具たるの地位に居るに過ぎざるなり最後に吾人は此改宗と共に聖書の露語翻譯成りたるを注意すべし何れの國にても拉典教會に依りて改宗するや、國中拉典語の聖書及祈禱書の行はるゝを見たるも露國に於ては否らず其初めよりしてスラヴニツク語によりて聖書を授けしなりされば全國民の改宗の迅速にして容易なりしのみならず之が爲に上下の感情を疏通し殉難の士を生ずる事もなかりしなり先に八百六十三年代に於て希臘教會がダニスーブ河上にて露國人に接するやサイリル及メフチアスの劈頭の事業は當時尙ほ記號文字なきスラヴニツク民族の爲に字母を工夫せんとするに在りき而して其工夫に成し字母を以て默示録の外新約全部及び詩篇外舊約全部を翻譯したりしかば國語聖書はウラジミル改宗の百年前に於て存せしものにて、アンノキエフに迎へらるゝに際し之に伴へる希臘教師も既に之を用意し居りしなり此の希臘僧侶の聖書翻譯は聖書及び祈禱書に國民的性質を與へ同時に露國の言語及文學に宗教的性質を與へたり露國の建設的時期に就て吾人尙ほ一言を費やすべきものあり露國の立法事業といふべきは千〇十七年ヤロスラフ第一世の時を始めとし彼は教會法規に就ては

バイザンチン制度を引用し、基督教徒の教育の最初に根柢を置けり、千〇五十四年にはノブゴロットの聖リファ教會着手せられ、而して次世紀即ち千百〇八年の初に當りて有名なるキリスト者出づ其記録は後年露國上代の歴史の探究するに最良の材料たり、ウラシミル、モノマカスは千百十三年に即位せられ英國王ハロールドの女ガイサを娶り茲に英國王室と姻戚たるの關係を結ぶに至りたり、

(二)統一時代

(自一千三百年至一千六百五十年)

此時代は露國教會發達の時代にして歐洲中原の中世時代と種々なる點に於て相關連す而して特に注意すべきは此時代に於ける事件は多くモスコフ府を中心として起れる事なり、故にモスコフは露國教會歴史中の主人公といふも不可なきに似たり其れ此の如く稱せらる、所以の者を察するに使徒的の傳説あるに非ず、ビザンチン、ミツシヨンの爲にも非ず、他の奇あるに非ずして露國の中心に位すとより外には何の引力も存せずしてゼルサレム、及び羅馬を除いては基督教國中他の

何れの市府よりも人々の宗教心を打つ事之より大なるものあるなし是れ何の故ぞや、他なし、無数の教會あり破天荒の大鐘あり、大伽藍あり、珍寶奇物あり、侵入解放の歴史あり而して此等の諸件は歴史の存する限り存在せんが爲なり、中央をクレムリンと呼び茲には總て露國古代の宗教生活を見るを得べし觀じ來れば、是れ實に「ザール」及大僧正の二重の殿堂にして、其中に十四の禮拜堂あり、之に由り近世文明的の莊嚴なるを見ると共に、野蠻的露國の規模の如何に巨大なるかを察するに足るなり、吾人をして暫くか、る露國の如何にして建設されたるかを述べしめよ、

(A)「ザール」

露國教會の建立に就て吾人は先づ主として三要制度と二個の國民的事件とを考へざるべからず、劈頭に吾人の數ふる所は彼の露國のカエザルたる「ザール」なり、西歐諸國に於けるが如く、東歐諸國に於ける教政上總ての問題は神聖羅馬帝國の批准を経べかりしなり、然るにかゝる制度は西歐にては、今や廢滅して其痕を殘さず、れども東歐に於ては此觀念尙ほ依然として存するなり、蓋し露國歴史に於ては西歐諸國以外特別なる關係を此制度に有せるに至りしなり、抑もウラジミルがマス

コヴィーのザールとなり、マスコヴィーのザールが全露國の皇帝となりしは一朝一夕の業に非ずして實に一世紀の年月を經過せしなり、即ち韃靼人、波蘭人、及瑞典人に對する長時の戦争の爲に此の如き國民的一致を起すの必要に迫られし結果なり、而して「ザール」といへば實に全家長團體の父と抑かれ、上代には一層神聖なる意味をも偶せられたり、即ち神の僕として考へられ、教典上に於て如何に重く崇めらるゝかは豫想の外にて露國々民の上に殆ど神權者として今日尙ほ其勢力を保つ所以のものは歴史的事實に於て其然るを見るなり、初めて「ザール」の尊稱を負はれしはアイヴァン又はジョン第四世よりの事なり、彼の事蹟は露西亞帝國の教會歴史に大關係を有するを以て少しく茲に之を述べし、アイヴァン四世は魔王の綽名ある人にて、少年の野蠻的生活時代より其妻アナスタシア及僧侶シルヴェスターの感化を受けしが清淨の生涯を送りしのみならず露國の爲に幾多改善進歩なる輝ける徑路に上らんとせしか、已にして彼は俄然として少年時代の罪惡に復歸し、其行動往々宗教的なるものあるに關はらず其罪惡の半を信するも彼は基督敎國の君主中、惡王暴君の第一流に位するものといふを拒む能はざるなり、一二彼の平生

を記すれば彼は己れの爲にモスコフ附邊に建てられたる禮拜堂に退去する事時に數週間、毎朝三時起床、前後七時間程勤めを爲し、經を讀み讚美を歌ひ、且つ祈禱を捧げ、亭午に及び臣僕其前に黙坐する間、教制に關する書籍を讀み聞かす、已にして此野蠻王は牙槽に赴き、此に惱める囚徒を見莞爾として心大に喜べるもの、如くにして歸るを常とす、彼の統治中は實に恐ろしき殘刑酷罰を以て充たされたるが不思議にも民望之に集まれり嘗て一度其職を辭せんとして楫に乗りアレキサンドロフに退隱せらるゝや、人民は大に失望の觀ありて再び出で、暴戾なる手腕を揮はるゝ迄は皆心安んせざりき、彼の呪咀帳には三千五百人の名を記せられたりと稱するが、是れ當時貴族大に勢力を得、紛争已むなく、或は波蘭人と好を通ずるもあり、宮中は陰謀の府となりし結果、反動此に及びたりしなり、晩年にはカザンを平げ、アストラカンを略し、西比利亞の地をも收容したるが、ザールの品性の不可思議にして猛烈に殘忍にして民望を率うるに足る能く其典型をアイヴァン四世に見るといふべし、

(B) 大僧正

若し露國教會に於て「ザール」を第一位とせば大僧正は夫れ第二位か吾人は前段に於てキエフが古代露國教役者の本山なる事を述べしが今やモスコはユフに代りて露國教界の中心とは爲れり、モスコの中心はクレムリンにしてクレムリンの中心は聖母マリアの外天祭を行ふアツサムプシオン教會にして輪奐極めて大なり、アイヴァン四世以來ザールの即位或は必ず此の教壇には行はる、禮拜堂其他坊には尊嚴なる教書を掲げられ、教堂外には當教會に所屬せし僧侶の骨を瘞む、千四百四十八年に教正となりしヨナーは蓋し君士坦丁堡の教廳より獨立して始めて撰擧されたる最初の大僧正なり、ビザンチン帝國没落以後君士坦丁堡の大僧正イイレミアは千五百八十七年モスコの教正ジョーブが其大僧正たる事を承認し斯くして露國の大僧正は羅馬に代りて教界を支配するに至りたり、露國に於ける大僧正の個人的尊崇は非常なるものにて西歐教會に於けるもの、比にあらざるなり、而して露國の大僧正は常に君主の擁護者にして、ヒリップ(一五六八)のみ獨り殉難者たるの名を負へり、而してヒリップの名譽とする所はアイヴァン四世の暴虐に抗し、正義の爲に死地に就きしといふに在り、其他に於て大僧正の職に居るものが、

毫も王室に對して不穩の舉に出づるものありしを聞かざるあり、

(C) 僧侶の位階

中世に於て起りたる他の制度は僧侶の位階なり、然れども露國に於ける僧侶の位階は唯一種にして其觀念は主として隱遁的の義より來れり、即ちブラック、グラージ「黒牧師の義なる稱號は凡て一様に適用せられ、唯一個の聖ペーシルの規程教職に在るものを管理す而して此「ブラック、グラージ」は隱士と沙門とに分たれ、隱士は現世紀に至る迄其清淨潔白なるの故を以て社會上には極めて尊敬する所となり、隱士といへば十七世紀巡禮者の記録に據れば彼等は嚴冬と雖も腰部に纏へる一片の被布の外全體殆ど裸體にして、双肩には毛髮蓬々として垂れ、頭股の邊りに鐵圈若しくは鐵索を繞らせり、彼等は宛然一個の神人にして、彼等の立寄らるゝ所となれば商賈は己が貨物の隱士に使用せらるゝ、は特に神の恩寵に沐浴するものなりしとて、隨喜の涙を流すが常なり、此等の隱士は主に普通人民に依りて敬せられたる其理由は罪跡の責むべきあれば、彼等は貴族と雖も毫も之を假借する處なきが故なり、彼等の中一個の狂僧として著名なるは「ペーシル」にして惡魔の如きア

イヴァン四世に對し其暴戾非道を諫諍せし剛愎の人なるが其遺物は今尚ほモスコーの莊麗なる禮拜堂中に藏の存せり此時代一五七〇に於ける他の大膽なる隱士はプレスコーのニコラスなり彼は王者及人民の間に重せられ彼の魔力ある行為は一般に惡魔の感應あるが故なりとさへ信せられたり彼れ亦たアイヴァに抵抗せし者の一人にて極めの嚴格にアヴァンが先にノヴゴロッドに於て爲せしが如き残念なる逆殺を遂ぐるを見て之を責めたり一日魔王アイヴァン、プレスコー市に臨御あるや、諸教會の鐘は連りに警を報じ、ニコラスは其門戸をさへ閉ぢしかばアイヴァンはニコラスに對するに頗る禮を厚うし附與するに贈物を以てせり、規の破格なるに驚きしが、聽てニコラスよりの申狀に據れば陛下は齋戒日に獸肉を啖ふを以て法を破ぶるものとや思召されん去り乍ら陛下が已往に爲したる如き幾多人間の肉を啖はせられしに比すれば果して幾千の破戒なりや、同時にニコラスはアイヴァンを脅迫するに、今アイヴァンの頭上には默雷黒雲相掩へるを以て陛下若しプレストーの一小兒の頭髮なりと觸れ玉は、陛下は忽ち破滅せら

るべしとアイヴァン之を見慄然として恐れ寧ろ喪心しプレストーの全市は爲に全く救はるゝを得たり、

此等隱士僧侶の事蹟を案するに際して古代埃及に於ても亦此の如きもの、ありしを見たり然れども露國には自ら特別なる露國の國民的性格を存せり彼等の僧院の周圍には宛然城郭に似たる牆壁を繞らしシナイ又希臘の尼刹の如く其裡には現世的生活を欲せざるもの、群集を以て充たされたり而して此僧侶は更に二種類に分つべし(一)修道士とて時に僧正として見らるべき僧院長の管理する僧院の中に合宿す(二)遁世士とて他の僧侶と別居し或は俗人と共に住居するものなり僧正は僧侶の中より擧げられ僧侶の多數は一般に結婚を爲したれど一旦其妻を失へば再婚するを禁せられ是に於てか僧院に送致せらるゝの教規なり、

(D) 蒙古の襲來

今や教會歴史より政治歴史に一轉するに方りて劈頭の重大なる事件は蒙古兵の襲來にて露國は實に前後殆ど二百五十年の間其鐵蹄の下に壓迫されたり(千二百五年より千四百七十二年迄西歐諸國の十字軍には露國は少しも與る所なかりし

も彼等が北方の韃靼族との戦争は始と間断なかりきされれば彼等は祖國の爲に自ら十字軍を起しつゝありしものなり而して其最後の勝利を收めたるや、ゼルサレムの十字軍に比して更に赫々たるものありしなり蓋し他方に於て宗教的統一を遂げたる所以のものは一に此の外敵に對し國民的の合同と爲すの必要に迫られたるもの、其大なる刺戟なるべし、久しく韃靼の版圖に歸せるの間露國々民の眞誠なる救護者の位地に居りしは僧侶なり而して此救護者は抑も何の處に其陣地を布きしや、吾人は寧ろ其然らん事を望める、キエフ若しくはモスコイにはあらずして千三百三十八年に建立されたるトロイツウアの寺院より來りしなり、トロイツウア何れに在りや、モスコイ府を距る六十哩にして草長く森深き荒野の中心に於て參差たる尖塔雜然として天を刺す大小の寺院あり茲にはモスコイのクレムリンの如く僧院あり大學あり宮殿あり伽藍あり教會あり其高臺堅樓即ち是れ寺院にして又一個の城廓なり今日に至る迄露國人は東より西より南より北より此地に巡禮するもの絶えずアイヴァン四世は少なくとも其屋宇の大半を建築しピートル大帝も再度迄此の神城の裡に籠れりき、カサリン女帝も時々モスコイより其宮

人を率ゐる徒歩此地を見舞ひたり、何れの帝王もモスコイに來るものは必ずや威をトロイツアに發する者なきは非なるなり拵て嘗て此地に僧院長たりしサージヤスに就て語らんに彼の生涯は千三百十五年より千三百九十二年に互り彼の名が露國人民の心に銘せられ居る事恰もウイリアム、テルの瑞士に於ける、ジョアン、デアークの佛國に於けるが如きなり、デメトリアス太公の雄心も、韃靼人の前には戰々競々たるを免れざりしの際、サージヤスが一片の祈禱は如何に將軍をして祖國の爲に武からしめ、奮てドン何の戰場に勇進せしめたりしよ、千三百八十年斯くして猛烈なる回々教徒も其境外に驅逐せしなり、トロイツアの僧侶たるペレスヴェット及びオスリアアの二名はデメトリアスに伴うて戰場に赴きしが事急なるや法衣の上を鎧を帯びて戦ひたり、其格闘は一法師ペレスヴェットと韃靼の選手たる一大巨人との間に試みられたりといふを以て如何に彼等の大膽なりしを見ずや、され、韃靼人に最後の打撃を加へたる其動機は實に此トロイツアの寺院中より出でたるものにて、サージヤスがデメトリアスを勵ましたるが如く時の露人がアイヴァン三世を戰場に進ましたるが故なり、一老僧アイヴァンに謂て曰く、陛下死を恐れ

玉は、其兵器を愚僧に與へよ、愚僧即ち之を提げて敵陣に向はんと此に於てアイ
ザン踵を回して戰場に突進したりしかば鞭鞭の遊族戦はずして遁れ露國は永
く獨立の基を開きしなり。

(E) 波蘭人の侵入

露國史上最初の危機は蒙古族の襲來にして之に次げるは波蘭人の侵入なり今や
波蘭は露獨塊等の間に分割され了へしかど嘗ては露國も一度は波蘭人の爲に蹂
躪せられしなり茲に露國が波蘭と事を構ふるに當りては先に異種族韃靼人の
争闘とは種々の點に於て其關係を異にせり何となれば波蘭人は露國人と同じく
スラヴニツク人種に屬したればなり但し宗教上に於て反目する事犬猿番ならざ
るものありといふは他なし波蘭人は羅馬加特力教を奉じ露國人に對しては羅馬
法王の大權を代表する次第にして露波の争闘は露國の爲には實に由々しき死活
問題なり、露國人が露國侵入の跡を釋ぬるに韃靼人よりも更に非道殘忍なるが如
きものあり彼等は嘗に課税を以て露國の基督教徒を苦しめたるのみならず又多
くの場合に於て露國民をば教會を建て僧侶を仰ぐを好まざりしのみならず宗教

上の勤めを果さんか爲に外出せる露人の婦女を辱しめて憚らざる暴虐なる猶太
人の手に委したり是れ十六世紀の末期千五百九十八年に於ける露國の慘狀なり、
ルーリツクの王朝はアイザン四世の幼嗣デメトリアスの横死と共に繼絶し此
より以後王位の潜稱者續々として輩出し賈デメトリアス相繼いで王位に登り波
蘭王は常に黒幕に在りて之を操縦し居れり延いて露國教會も波蘭人の壓迫に堪
へざる程なりしが已にして教會中幾多の偉人あり出て露國の教會を挽回するの
機運に迎へり大僧正ハーモゼチスは幽閉せられし餘餓死の不幸に遇ひたるが之
に次で、ロストフの僧正フィレット又毅然として起り捕虜の身となる迄は百万露
人の希望を繋げり孰か窮すれば即ち通ず國民は再びトロイツファの僧院に復れ
り千六百十三年露國義民の一團は此城廓に據りて包圍合撃の裡に専ら其防衛に
勇なりしがデメトリアスガサーヅァースの信仰と勇氣とに動かされしが如く時
の露人等はサーヅァースの繼者にして同じく豪膽なるダイオニシアスの爲に鼓
吹せられたり一時寺院は愛國猛士喧嘈の府たりしが是れ實に露國を運回轉の機
にして遂にポヤルスキーを將として波蘭人を驅逐し、モスコを回復し、全露西亞

を一統するを得たり、モスコのケレムリン街道の聖門にはダイオニシアスの命に依りポヤルスキーの陣頭に翻したる救世主の畫像を掲げたるが此門を過ぐるものは外人は勿論、露國皇帝と雖も其頭頂を覆ふに非んば許されずと爲せり、此聖門は實に波蘭人驅逐の日より始まり、扱てルーリックの王統は前述の如く已に斷絶したるが人民は前年來貴族の軋轢を厭ひ名望ある高僧を頂かんと議あり、フイラレットは嘗て一末寺の僧侶にして後ちロストフの大僧正、後ち更にモスコ一の法教師長に轉せし人にて戦争中は其妻マルタとは久しく別居し其妻はコストロマーニ利に在りしが、彼等は實に未來のザールたるミカエル、ロセノフの父母にして、ピーター、アレキサンドル、ニコラスの祖たるロマノフ王朝の建設者たるの榮譽を負ふものなり。

二三 過渡の時代

（自一千六百五十年至一千七百年）

露國に於ける王統潛稱者の戦争は夫れ猶ほ英國の藩後戦争、佛國の同盟戦争の如

き、十六世紀の終りに及んでロマノフ家が露國王位に上るや國民は韃靼波蘭より、教會は回々教徒及典拉人より自由なるを得たり、此時に當りて最も記憶すべきは父子フイラレットは法教師長に子なるミカエルはザールとして、共に露國を統治するに至りし事なり、是に由りて吾人は東歐に於ける宗教改革は西歐と稍々同様の現象ありしを發見するなり、此の過渡の時代に在りて改革運動に關する張本人はサイクル、ルーカールにして、彼は千五百七十二年を以てクレテに生れ、少にして歐洲諸邦に漫遊し歸りてオストログに於て監督牧師の職を奉せり、先に彼の瑞士の在るや、宗教改革主義を學びて大に感ずる所あり、露國に於て大膽にも此主義を發表し、遂行せんと思へり、千五百九十三年アレキサンドリアにて彼は僧職に補せられ、千五百九十五年には希臘及拉典教會同盟の議に反對せん爲め波蘭に派遣せられたり、是よりして彼は拉典聖餐式を忌む事猶ほ蛇蝎の如し、彼は千六百二年には更にアレキサンドリアの法教師長に任せられ、千六百二十一年には其勢力に於てコンスタンチノーブルと相匹敵するに至りたり、然るにジエスイット宗徒の陰謀あるに際して千六百二十三年、一旦ローデス島に貶謫せられしが、已にして又其舊

職に再任する事となれり、同年に彼は有名なる懺悔記を著はせるが是れ彼が信仰に關する私見を叙述せるものなり、其梗概を語らんに全編十八章より成り、其第八章は正統信仰に就て説き、餘の十章には斷然彼の改革意見を述べたり、サイクルは直に其急激論の謂を以て咎を受け有力なる反對論者續々として起りたり、ジエスイツト宗徒は主として彼の改革主義を阻碍し遂に彼に罪を歸するに土耳其政府に叛抗して一揆を起すものなりといふを以てし千六百三十八年ソルタンの爲に殺さるゝの悲運に遭遇し、其死骸はボスポラス海中に投せられたり、サイクルは不幸にして彼の遺志を續ぐべき門弟子なかりき彼の懺悔記亦惡名の下に没却さるゝに至りたり、唯之を記憶せよ千六百二十八年英國王チャールズ第一世に聖書の「アレキサンドリン、マヌスクリプト寫本を贈りしものは彼れサイクル、ルーカ、其人なる事を次に來れる露國教會の大人傑はニコンなり、東歐の教會史中四世紀のクリンストム及ハ世紀のフォシアスの他は彼と比肩し雁行するもの蓋し此れなかるべし、ニコンは實に露國のクリンストムと呼ばれし人なり、寧ろ露國のルーテル又はウルゼとせば適評なるべし、資性英邁手姿魁偉手腕の敏辣にして信仰の熱烈

なる實に露國當代教會史中獨歩の偉人といふべし、ニコンは千六百五年、ノブゴロツドの一寒村に生まれ、教坊に於て教育を受く、後僧職に就き、間もなく結婚したれど殆ど十年間は其妻と別居し、時に或は一個の隠士として白海の上りに住せし事あり、彼はザール、アレキシスに依り、ノヴァズスコイの僧院長に採用せられ、千六百四十七年にはノブゴロツドの大僧正に、千六百五十二年にはモスコイの法教師長に陞任せられたり、ニコンは露國の最初の改革者といふべく、彼は特に實際的手腕の人にて、ルーソーと同じく東邦の信仰界には既に新機運動きたれば之に對して新方針を教示するの必要ありと感したるの人なり、彼は時に囚房に臨み、各人に就き其信仰を聞き、彼等が不正に幽閉されたる次第に想到し、或は慈善の爲に老孤寡婦の爲に病院及貧民救助院を建てたり、教會に關する舊例古格上の改革をいへば、是れ神聖なるものとして崇められたる教畫も取除けられ、西歐教會の洗禮式もニコライスの力によりて露國教會に允可せられ、爲に新舊二派の教徒間、同情相寄るの結果を馴致したり、尙ほ此剛毅なる改革者の下に、出版印刷業及び普通教育も次第に緒に就き、學校にては先づ希臘及拉丁學を教へたるが同時に、勿論讚美歌

及祈禱書も亦改訂せられたり千六百五十四年に於てニコンはスラヴオニツク語を以て聖書の新翻譯を企てたり即ち學識あるものを撰んで代理者となし各僧院に遣はし斯業に關する要なる寫本等を蒐集したり此翻譯の成るや保守派の人々には満足を與ふる事能はざりしもせよ確かに彼が事業の一として數ふべし、さばれ彼の改革事業中説教術の改良再興に優るものは非るべし即ち黙々たる露國幾百年の歴史は彼の力によりて始めて雄辯なる説教を聴く事を得たりと謂べし、彼の性格に就ては記録の傳ふる所に據るに彼は當時の牧師中最も慄悍なりしと稱せらる、例へば彼が管下の執事等は街上若し僧侶にして酩酊せるものあるを發見する時は彼等は直に之を捕へて囚房に投じ衣を剥ぎ且つ之を笞つ其囚徒は勿論牧師なるが多く其胫股には鐵索木材等を繋ぎ日夜裸床の上に跪坐せしめらる、西比利亞の荒原には放肆淫逸の牧師の其妻妾を併せて流鏑せらる、あり其最も酷なるは之を蠻風といふに非るも嘗て三人の副牧師あり時疫の爲に其妻の死亡したる後ち再婚したりしかばニコンは之を聞知するや直にトロイツアの僧院に押送して食物を與ふる事なく粗末なる密室に監禁し以て死に至らしめんとせり、

偶々アンテイオークの法教師長此に來り彼等の泣訴するに遇うて痛く感動せられ由て大に周旋する所ありて爲に彼等をして自由を得しむる事を得たりと此の如きは前に述べたる魔王アイヴァン若しくは後に説かんとするピーター大帝の如き人々に於てこそ然るべき分別とはいふべけれ改革者ニコンの行爲としては稍々殘忍に失するもの、如し、其蠻的行爲は道に露國人として模倣的人傑なるを以て更に二三の逸事を述べんか嘗て一外商あり街上聖畫に對して尊敬の意を表せざるを見るや彼は直にモスコ市外に放逐せり凡て外人の此地に在るものは露國教會の洗禮を受くべしとせられ一アルメニア人の數千金を納めてなりとも其長髯を蓄へ置かんと申出でしにニコンの答に曰く洗禮を受け以て我等の如くになれと該商人は之を拒みしかば總てのアルメニア人は追放されたり將た國人に對しては古來因襲の久しき聖畫若しくは露人の最も尊崇して措かざる頭巾等に對する改革は大に時の牧師社會の反抗を買ひ得たり而して此反抗より來れる紛争は如何ばかり激甚なりしか少しく之を左に紹介すべし、

ニコンの急激なる改革が時の牧師と貴族との憤怒を惹起したるは固より其所也、
 彼は今や皇帝よりは更に畏るべき者として見らるゝに至れり、彼は畏れらるゝが
 如く又嫌悪せらるゝに至りたり、サール、アレキシスは獨り眞にニコンを愛したり
 と稱せらる此ザールは即ちミカエルの子にして後のピートル大帝の父なり、アレ
 キシスは前年ニコンを見たる事ありしが、一旦ニコンがモスコーに入るに及び先
 づ僕々然たる大丈夫たるを其妻まじき雄辯とに驚服し、此時より無二の知己と
 なりしなり、ニコンがザールの期望に依り、法教師長の職に就くや、二人の間は離る
 べからざる因縁となれり、二人者は政治上の所作に於ては殆ど一體にして、日々、教
 會に内閣に而して又食卓に對し、形影相屬するの目あり、二人の關係を更に精神的
 に密接ならしめん爲め、ニコンは茲に諸皇子女の教父となり、其間は長へに斷つ事
 なけんと誓へたり、然るに貴族等はザールより彼を離間し、以て其勢力を殺かんと
 試みたり、偶々ニコンが教會に於てザールに對して不遜の言ありしが、是れ二人者
 の間を中傷するに於て極めて有効なるものなり、此の如き例は決して二三に止
 まらずして毎々二人者を疎遠ならしめ、遂には交情全く絶ゆるに至りたり、從て失

言あれば從て貴族等の機會にして、彼等は其失言を捉ふるに最も熱心なりし事思
 ふべし、一貴族は其飼犬を呼ぶにニコンの名を以てし、之を辱しむるものあり、他
 貴族は公の行列中痛くニコンの從僕を打ちたるが如き許すべからざる侮蔑を加
 ふるものあり、是に於てかニコンたるもの聊か堪ふる能はず、ザールに仰訴したり
 しかど、貴族等は之を遮りて、欲聞に達せしめず、去ればニコレはザールより何分の
 沙汰なきは己れの信任地に墜ちたるものなりと速了し、千六百五十八年を以て斷
 然其職を辭したり、而かも心中アレキシスには必ずや此辭表を聽許あらせられま
 じと願ひしなり、然れども貴族等は又も中に介して之を沮み爲にアレキシスはニコ
 ンの職を釋かれたり、
 是に於てニコンは山水明媚なる新ゼルサレムの僧院に退院せり、此僧院はニコン
 が千六百五十四年ゼルサレムのセント、セバルカーの教會に擬して建立したるも
 のに係る、されど彼は尙ほ露國の法教師長たらん事を願ひたるが故に唐突なる辭
 職を申出でたるに事の案外に聽許されたるは彼の寤寐忘るゝ能はざる所なり、是
 を以て爾後八年間は言語により、行爲により、後任者の就職を妨げたり、時に貴族中

絶えず意をニコンに寄するものあり彼が再び舊職に就かん事を切望し居りしが、其招きに應しニコンのモスコイに乗り入らんとするに及んで形勢漸く急なり、ニコンは露國教會最初の大僧正たるピーター祭の夕、夜間モスコイ府に歸れり、拂曉公然聖殿に表はれ泰然として法教師長の椅子に凭り、ザールに告ぐるに彼の着京を以てし、且つ彼の祝辭を受けんが爲め教會に列せられん事を奏聞せり、ザール此報に接するや茫然として事の不意なるに驚きたり、ザールは即ち貴族等を會して協議を開きしがザールは彼に退去を命じたりしかばニコンは已むなく其命に従ひ、悄然として其壇を降り、遂に自ら以爲らく空しく相確執して久しきに渉るの用なしとて、新法教師長の選舉に同意せり是に至りてニコンの勢力亦衰へたりと謂ふべし、是に於て千六百六十七年東部諸法教師長をモスコイに會し、而かもニコンの教殿を以て其會場と爲せり、アレキシスは會場に臨まれたるが法教師長の坐に居る能はざるニコンを見痛く心を動かされ、潜然として涙に咽ばれたり、帝坐を去るや、先づ多年の親朋たる、皇子子女の名親たる皇室の保護家たるニコンの席に進まれ、如何して今日此事あるやと嘆せられたり然れどもニコンの之に對する事の

如何に傲岸なる毫も此寂慮に感するなきもの、如し争でか彼れ其終りを好くするを得ん直に一般僧侶の列に貶せられ、僻地の僧院に於て其餘生を送るの已むなきに迫れり、此命下るの時刹那アレキシスは實に其坐に在るに堪へざりしといへり、時恰も嚴格の交なりしかば、アレキシスは此左遷僧に贈るに長き行旅の用に供せよとて毛布と金錢とを以てせり、然るをニコンは固辭して曰く、斯様のものは愚僧の望む所に非ずと、貴族に向ては、汝等が衰落時にして來らんと謙し彼の爲に祝福せられん事を願ひて群集せし人民に對しては、最も單簡に而かも基督教の眞精神を道破して曰く、祈れと楯は別を惜しむ人山を避けて忽然として俗寰の外に在り、如何に人生轉變の急激なる事よ彼が榮辱の彼恐ろしと觀せしクレムリンの驕れる尖塔も早や已に視線の外に逸し、遠く都を去りて人目も草も枯れにし、配所へとは急げるなり、アレキシスは千六百七十年死床にてニコンの許るしを請ひつ、逝けり然れども今や事已に晚し、然れどもアレキシスの死爲にニコンに對する反動を高めたるものありて、此時モスコイの中央會議はニコンをば更に遠隔なる再舉を企つべから

ざる地方に移さる、事となり更に嚴なる監禁の爲に惱まされたり、然るに形勢は茲に一變し新ザール、セオドル二世の太傅シメオンは露國教會に四人(從來は三人)の法教師長を置くの制を提出しザールは之を容れしかば人物に於て、其一人の空席を充たすには順序としてニコン其人の外に適任なければとてニコン召還の命下りたり、由て半死の老僧ニコンは千六百八十一年を以て再びモスコイに向て出發せり、ニコンはゾオルガ川を下らん事を欲し首府とザールとは決して見る事なかりし、人民は兩岸に立ち之を迎へ哀求し絶叫して彼の祝福を願ひしが、端艇徐徐としてゾオルガを下るに際し、ニコンは俄かに人や呼ばふと思ひけん頭髪鬚髯と衣装迄を自ら整ひ恰も最後の長き旅程に上るの用意なりしが侍者をして續經祈禱を爲さしめ、而して老ニコンは先づ總身を伸べて榻上に安臥し兩腕を胸上に十字形に組み大息一番溘焉として冥目したり、彼の死體は新ゼルサレムの墳墓に葬れり、斯くして曠世の大偉人、露國教會史上其匹なきニコンは去れり、ニコンは性格に於て使徒的の理想に超越したるものといふべく殊に活識ありて敏腕なりし事能く

當時の教勢上の必要に應ずるを得たり、願ふに彼の一生は舊露國教會より新露國教會の過度の時代に獨歩するものにて改革の功の彼に待つ事多き固より言を俟たざるなり、

(四) 宗教改革の時代

(自一千七百年至一千八百六十年)

吾人は今より近世時代の露國教會に入らんとす、前代にはニコンが其大立物たりしが如く、茲にはピーター大帝の出づるありて露國の天下を一掃したり、ピーターは千六百七十二年六月十一日を以てモスコイ府に生る、生母ナタリアはザール、アレキシスの後妻にして長兄フエオドルが千六百八十二年を以て逝くや、ピーターは其後を繼げり、ピーターには六歳の兄なるアイヴァンあり、姉なるソフィアはピーター、アイヴァンの聯合攝政を願ひしが、一千六百九十六年アイヴァン死するに及び、ピーターは單獨の帝王となりたり、而してピーターは千七百四年其死に至る迄、ソフィアをば禁獄の裡に呻吟せしめたり、此時よりしてピーターは露國に於

ける驚くべき大改革に着手し、千六百九十六年に彼はアゾーフを圍んで之を取り
 茲に露國圖南の地を成し翌年に彼は第一次大陸遊歴を試み和蘭の船渠に躬親ら
 勞役を執りて造船術を研究し其遊歴中彼は歐洲各國朝廷に客たりしを以て從來
 疏遠なりし西歐の諸帝王と相昵近し其英國に達するや皆東歐のザールを見んと
 て恟々たりき牛津堡大學は彼に名譽學位を贈りたるが當時ピーターの風采を記
 するものは曰く長き黒髪は前額より後頭に垂れ眼光炯々として人を射り唇角固く
 緊りて言ふべからざる威嚴を存す人々は彼が巨大なる身長と率直にして機敏な
 る舉動を伺ひ其携ふる所の凄まじき鐵杖とデーレン産の狼の如き愛犬とを見たり
 東歐のザールが當時如何に西歐人の感を牽きたるかは察するに餘りあり
 千七百年にピーターは結典に對する波蘭及丁抹の同盟を詰べし之より九年の後
 彼はボルリラの戰に克ち爲ニ瑞典王チャーレスは軍敗れて土耳其に逃れたり千
 七百三年には陋習打破の大事業に着手し先づ國民をして西歐新文明の曙光に沐
 せしめん爲め新都をバルチック灣頭に奠めピーターの名に依りて聖彼得堡とは
 呼べり此新都こそ彼が膏膾臥薪の形見なれ此地方は數年前迄は最も慄悍の族波

蘭人の占領せる所にして深林大澤一望限りなく眞に不毛の荒野たりしなりげに
 やモスコより聖彼得堡への遷都は大帝が全帝國を改革したる其成功の表號に
 して善かれ悪しかれピーターは露國の爲に陸海軍法律服裝字母より遊戯の末に
 至る迄實に其國民的生活を一變せしものなり露國の教會と國家とに輸入したる
 西歐の文明が果して如何なるものたるにせよ此等は總てピーター大帝の手によ
 りて成りたるものとせば改革の如何に激甚なりしかは想ふべきなり千六百八十
 九年ピーターはイユードキシア、ロブキンと結婚したるが千六百九十六年に及ん
 で離婚し越えて千七百十一年マルタ、スカヴロンスカと婚す是れ彼が洗禮の後カ
 ゼリンの名を襲はしめたるものなり千七百十六年ピーターはカセリンと共に第
 二次歐洲遊歴の途に上りたり其在外中先にロブキンの生めるアレキシスはピ
 ターの改革に安からざる徒黨の擁する所となり茲に一揆を構ふるに至りたりピ
 ーターは千七百十八年に歸國し第一着にアレキシスをして皇位繼承に關する要
 求を放棄せしめ而して後ち大叛逆を以て問はれ死刑の宣告を發せしめたり千七
 百二十一年には瑞典は少からざる領土を露國に讓與しさらでだに近來其版圖を

四方に擴張しつゝ、ありし露國をして一層の勢力を加へしめたり然るに大帝の偉業は不幸にして茲に中挫するの已むなきを見たり、千七百二十四年ピーターはラドガ湖上に於ける其工事の監督中彼の熱烈なる精神は船員の沈没せんとするを傍觀するに忍びず之を救はん爲め進んで水中に突入せしかば時嚴寒の交なりしを以て之よりして病を得次第に其健康を破り、千七百二十五年一月二十八日死の手は終に大ザールを奪ひたり、臨終の苦悶は長かりしが尙ほ平和の裡に其絶命の辭は其唇端より洩れたり曰くこれより後と嗚呼露國は實にこれより後に其勢力を世界に伸べんとするなり、ピーターの全生涯が露國教會に係はる事は極めて大なり、十二歳の時彼は其母ナタリアと共に難を避けてトロイツアの僧院に匿れたり、此軍營的僧院に於て彼は兵學の初步を學びたり、晩年には尙ほ蠻風の脱せざりしに關せず頗る宗教心の磅礴たるを見たり、往年歐洲諸邦を遊歴するの際各地の宗教制度に於て大に研究する所あり、羅馬法王は彼が羅馬教徒に歸らん事を切望し又ルーテル宗徒は彼がドレスデンのルーテル教會に於て聖餐禮を受けたるを以て此緣故に由りてこよなき後援と待み、佛の教會も亦サーボンチの學士の記

臆を通じて又彼に求むる所あり、然れども此等の要求は無効なり、謂れもなき事なり、何となればピーターは最後迄正統派露國教會の信者なればなり、彼が戰場に臨む時の信條は信仰の爲に、信仰深かれと彼の日記を閲するに信仰上の教訓に關し、平生利益を得たるもの若しくは不幸に遭遇して啓發したるもの等雜然として記入せり、新都造營の際には之を監視せん爲め、近傍の一小屋に假寓せられ、其三間の中一間は禮拜室に供せられしが、此一小屋は今尙ほ一小禮拜堂として日々禮拜者の群集するを見るといへり、和蘭のザールダムに在るの際、一小舎の一隅に禮拜堂を設けし事猶ほ前の如しされば、後ち二十年を経て再び和蘭を巡遊したる時は躍て此室に入り、前年の如く、殆ど三十分の間に留まれり、疑もなく默禱を捧げしなるべし、嘗て元老會議員に語て曰く、祈り且つ働けど彼の一生は茲に盡きたるなり、内地に於ける改革の一二を擧ぐれば、千七百年西歐諸邦に曆を採用せし事更に大膽なるは帝京を聖彼得堡に遷したる事、此遷都はピーターの改革意見は一に西歐文明に法るべしといふの意を示せり、次には千七百二十年に法教師長の職を廢し、而して神聖會議なるものを起し、此會議には數多の高僧を會し、帝王若しくは其閣

臣に於て之を主宰するの制なり、法教師長の職を廢するは當時ピーターの巨腕を以て尙ほ至難の事情なきに非りき、然るにピーターは決然、朕は爾の法教師長なりと宣言し之によりして民情風氣、由て以て其初志を遂行するを得たり而してピーターは露國中に強大なる黨派の成立せるを見たり、并は先きにニコンの改革に對して反抗せしものが今やピーターの改革に遇ひて更に其地盤を固め來りしものなり、是れコスコルニクス即非國教徒として知らる、ものにて己れ等のみ真正なる正統信仰を有し、他は惡魔の子孫なりとする保守派なり、彼等はピーターが西歐の繪畫を露國教會に輸入したるを以て大罪惡なりと責めたり、ピーターは域内に煙草を輸入せんとせしが、ラスコルニクスは極めて大膽に之に反對せり、ピーターはブランドー酒が露國々民を害する事幾干なるかを思ひ、問うて曰く、飲酒は吹煙よりは更に有害ならずや、と近時に至る迄ラスコルニクスは甘薯殊に林檎は樂園にて祖先の咀はれたる果實なればとて之を食ふをば異端と看做したり、ピーターは西俗を移さん爲め國人の蓄鬚を禁せんとせり、而かも鬚鬚は古代東歐の信仰の一要素たり、是に於てモスコの會議は鬚鬚を以て罪なりと決議せり、是に於てピ

ターの改革に反抗するは獨りラスコルニクス輩のみに非ずして全露國人の反抗なるを見るべし、之よりして其軋轢紛亂は次第に激甚となり、ピーターは勿論優に之を制するを得て、貴族及上流社會は竟に之に従ひしかど、牧師と農民とは最後迄ピーターに反抗せり、されば此等の牧師は實に彼等の名譽として其鬚鬚を蓄へ、農民は蓄鬚を特權となし、課税の上にて引合はんといふに至りたり、是等の事情よりして露國のラスコルニクス等のみは何れの地に到るも鬚鬚を蓄へざるものなし、記して茲に至り吾人はかゝる區々たる事件の爲に堂々たる露國の大ザールと其保守的人民とが相争ふを見て坐ろに一笑を催すを禁する能はざるなり、同時に反而に於ては露國に於ける舊例古式が如何許勢力を有するかに驚くなり、國家の生存は猶ほ個人の生存の如し一艱難を経る毎に一層其志を固うす、露國々性が如何に頑固にして猛烈なるは慘憺たる壓抑の歴史、其修練を證明して餘りあらずや、思ふにピーターの成功は其辣腕雄心一世を蓋ふが爲にはあらずして國民多數が次第に皇室の位地を自覺し其改革を解了するに至りしが故なり、然るにラスコルニクスは遂に公然一揆として反旗を翻しアン女王の時に至る迄鎮撫に歸せざり

し者は大帝の手段急激なりしに出でずや、
 ビーター大帝に次で露國宗教界の人物はモスコの大僧正アムプロース其人なり、彼は博學を以て聞え希伯來語より舊約書中詩篇を露語に翻譯したるは彼が文學上に於ける主なる事業なり、彼が不幸なる最後を遂げたるは最も能く露國々民の品性を反證するに足るものあり、千七百七十年モスコにて時疫大に流行せしが、人民の聖書を拜せば或は治癒せんとして幾多の患者の來集するあらば或は大に病毒を蔓延するの虞あらんとて彼は其聖書を聖門より他に移さんとせしに、大に群がる迷信者の激怒を買ひアムプローは忽ちにして其身寸断されたり、
 現世の初頭に於て吾人は有名なるモスコの大僧正プラトリーありしを記憶すべし、彼は其名全歐洲を通じて喧傳せしもの、一人なり、ジョセフ二世聖彼得堡より維也納に歸るや人露國の名物は如何と問はれしに、モスコの大僧正プラトリーなりと、彼の名聲を想見すべし、彼はベターニーと呼べる伊太利風の別院をトロイツアに造營し、此處にて無數の訪問者を接待したり、彼は其教徒たる皇帝ポールが神聖なる教務に對し行政上の干渉を爲さんとしたるを以て之に反抗したり、又那破崙

一世が千八百十二年を以て侵入せる時動もすれば喪心せんとするアレキサンダー一世を鼓舞せしものは實にプラトリーにてありしなり、本世紀に於ては露國教會には前代の大名に匹敵するものなきも亦自ら其人なくんばあらず、有名なるモスコの大僧正フイテレントはプラトリーと對してトロイツア構内に、ゲスセマ子なる別院を建て平靜なる時日を茲に送り、熱誠なる傳道者の一例としては、カムサツカの大僧正インノセントあり、彼は馴鹿楡に乗り、亞細亞及北米の北陸なる諸島を巡錫したり、インノセントと比肩して海外傳道に努力せしは僧正ニコライにて、日本内地に露國教會の勢力を扶植せしは此僧正なり、最後にトロイツアの僧院中の退隱者にして哲學的精神に富める者はセオドル、ゴロペンスキなり、

(四)露國教會の版圖信仰及禮拜

露國教會の歴史略々上來述ぶる所の如し、吾人は茲に露國教會の組織一斑を添加するの要あるべきか、抑も希臘教會は基督教の三大宗派の一にして他の二派とは羅馬教會及英國教會是なり、希臘教會の信徒は殆ど一億萬人にして、教域は歐洲亞

細亞亞弗利加及亞米利加に跨る其中最も多きは露國なる事勿論なり、其各宗派を
 擧ぐれば、君士坦丁堡の教權に屬する土耳其の正統教會、聖彼得堡の神聖會議及ザ
 ールの下に屬する露西亞の正統教會、亞典の神聖會議の下に屬する希臘の國民教
 會及びセルビア、モンテネグロ、ルーマニア諸國に於ける希臘教會等にして前には
 君士坦丁堡の法教師長に屬せしが今は各自大僧正の管下に屬する事と爲れり、露國
 教會に於ける非國教徒は吾人が前節に於て述べたる如くロスコルニズ又は舊
 信徒にしてニコン及ビーター大帝等の手に成りし總ての改革に反抗せんとする
 ものなり、
 希臘神學は神及基督の教義は豊富なれども人間及救世の教義に就ては缺如せる
 もの多し、之を西歐諸國の教會と大に其趣を異にする點なりとす、東方の教義は稍
 もすれば形而上の範圍に入り、西方の教義は人間及救世を主旨とする所以の者は
 他なし、東歐人を支配する形而上美辭的思想が大に宗教上の信仰迄も哲學化し、
 西歐に於ては其實際及論理的傾向が主として實際上の社會人物に觸着するに
 至らしめたるの結果なりと知らずや、

信仰の點に就ては如何と見るにザールは露國教會の保護者たるの地位に立つ事
 往々なり、而して是れ一に羅馬法と對立せんが爲めならんと稱せらる然れども教
 義上には露國皇帝は毫も權威を有せず、且つ教會の組織上には何の變化をも及ぼ
 す事能はず、希臘派牧師は拉典派よりも一層密に民衆に近づき、一回は必ず結婚を
 強いらる、されど第二回目は決して之を許されず、獨身は唯僧正と僧侶とに限られ
 たり、聖餐式は西歐教會と一般亦教會諸禮典中の中心となれり、説教は羅馬教會よ
 りも輕んせらる、も禮拜式に於ては極めて華麗莊嚴を愛する一種の蠻風と融合
 し、重んぜられたるもの、如し彫像並に風琴其他の樂器は一切臘國教會には排斥
 せられたり、羅馬禮拜式と著るしく異なる希臘風の特點は洗禮式に於て二重に浸
 水するに在り、禮拜に用うる國語に就ては希臘及土耳其に於ては希臘語露國にて
 はスラヴオニク語を例とせり、
 希臘教徒が道德上の品位の比較的卑きは其悲しむべきもの、一なり、彼等は節
 操に於ては隣國の回々教徒に優るべし、然れども正直といふの一點に及んでは彼
 等の下に落ちざるを得ず、其不信用なる事は國民一般の惡徳なり、道德と宗教と一

致せざるは毎々の事にて町々は教會寺院を以て飾られ、家々には各聖壇を設け、聖書を掲げ、水曜金曜の供養式を忘れず、能く其罪を懺悔し、古哲の墳墓に巡禮すれど、而かも僧侶すら尚ほ法律にして規律なく、上下を通じて公廳には一般に賄賂公行すと信せらる、唯西班牙及伊太利の法教裁判所に於けるが如き大汚辱なく、聖バインロミューの逆殺の如き大慘劇は之れなきのみ、さはれ蓋し露國人の如く熱心に聖書を誦讀するものはあらざるべく、此の如き露國教徒の將來は即ち露西亞帝國の將來の運命にて二者の關係須臾も離るべからざるものあり、露國の教會は古來の儀禮の爲に凝結する事もなく、又ピーターの強腕に依りて破壊さる、事もなし、ピーターが臨終の一語、これより後、ちとは果して如何の意義を含めるや知るべからざるにせよ、彼は實に將來を翹望して逝けり、即ち此將來といふ事は露國教會並に露西亞帝國の由て以て成果を見るの時なるか、東歐基督教國のみならず、西歐基督教國の將來も亦實に疑問の裡に葬られ居るなり、

第二十章

米國教會の由來及其發達

今重要なる事件に就き、前章と同じく其年代記を録する事左の如し、
紀元一四九二、コロンブス米利加を發見す、

同 一四九七—九八、カボツの第一航海

同 一五七九、始めて合衆國に於て教會の事を修む

同 一五八七、ノブア、スコシアにて始めて教會の事を修め、

禮拜及洗禮の式を行ふ

同 一六〇二—三、新英倫に於て同斷

同 一六〇七、プアージンにて同斷

同 一六六三、新約克にて同斷

同 一七二二、イエール大學にてカトラー及ジョンソンの改宗

- 紀元一七二九、 デーン、パークレー、ロード、アイランドの
- ニユー、ポートに着す
- 同 一七三五、 エスレー兄弟來る
- 同 日曜學校始めて起る、
- 同 一七三六、 ホキッテフィールド來る
- 同 一七五八、 パトリック、ヘンリー出づ、
- 同 一七八四、 メリー、ランドのアンナボリスにて
- 同 牧師の準備會あり
- 同 一七八五、 監督シーペリーの奉與式あり
- 同 始めて監督を授く
- 同 始めてヒラデルヒヤに一般國民會議を開く
- 同 祈禱書公布せらる、
- 同 一七八七、 監督ホワイト及ブローリストの奉與式あり
- 同 一七八九、 憲法宗規及祈禱書採用せらる、

- 同 一七九〇、 監督マチソンの奉與式あり
- 同 一七九二、 監督グラツゲット同斷
- 同 一七九八、 唱歌者始めて白法衣を纏ふ、
- 同 一八二一、 普通神學校の建立
- 同 一八二三、 ヴァージニア神學校の建立
- 同 一八三五、 内國及外國傳道會の創立
- 同 監督ケムパアの奉與式あり、
- 同 傳道師始めて支那に赴く
- 同 監督始めて亞弗利加に赴く
- 同 内國監督始めて選舉せらる
- 同 一八四二、 ナシヨタ神學校建立
- 同 一八四五、 婦人結社始めて起る、
- 同 一八五〇、 監督サウスゲート土耳其に行く
- 同 パークレー神學校建立

- 紀元一八五九 傳道師始めて日本に之く、
- 同 一八六一―六五 内亂及其鎮定、
- 同 一八六二、ヒラデルヒヤ神學校建つ、
- 同 一八六七、始めてラムベス會議を開く
ケムブリツチ神學校建つ
- 同 一八七三、印度人の爲に監督始めて奉與せらる、
- 同 一八七四、監督カムニンスの免黜
教會々議始めて開かる、
- 同 一八七四、ヘイケンの爲に監督始めて奉與せらる、
- 同 一八七四、日本の爲に監督始めて奉與せらる、
(即ち監督キリアムス)
- 同 一八七七、第二次ラムベス會議を開く
- 同 一八七九、墨其士哥の爲に監督始めて奉與せらる、
- 同 一八八〇―九二、祈禱書の校訂

- 同 一八八五、「チャーチ、テムペランス、ソサイエティー組織せらる、
基督教徒の和合に關する諸監督の宣告あり
西方神學校建つ
- 同 一八八六、聖「アンドロユー」の同盟團起る
- 同 一八八八、第三次ラムベス會議を開く、
- 同 一八九三、日本行の爲に監督マツキムの奉與式を擧ぐ
支那行の爲に監督グレーヴス同斷
- 同 一八八七、第四次ラムベス會議を開く
- 同 一八九八、監督シャーレシエースキー支那譯新約全書を出版す、
北米合衆國に於ける宗教團體中新教監督教會は本章に於て米國の國教として
論せんと欲するものなり但し此教會の員數の上よりすれば此判別は適切ならざ
るに似たり何となれば同共和国中最大のものに非ればなり又此教會は慈善其他
社會公共上の事業に於ても獨占者たるの地位に居る能はず別に大に此方面に於
て盡瘁する諸教會あればなり唯此教會は米國々民として獨立せし以後初めて此

土に基督教義を移植したるものなるを以て國教たるの名を負ふの權利あるなり、他の教會組織に比し、此教會は更に同國の政治的組織を成すに於ても與りて其功大なるものあり、其保守的而して加特力的の特質か同國の憲法及其輩出せる人傑に影響感化を及ぼしたる事幾何ぞ、而して此教會は他の宗教的團體よりも比較的、人口の増加と共に會員の増加する事多し是を以て米國々教たるの名實自ら存すと爲すなり、此教會の由來と其發達を述べん爲め試みに之を(一)殖民地の教會(二)過渡の教會及(三)國民の教會と細別して逐次左に論述すべし。

(其一)殖民地時代の教會

(自一千五百七十九年至一千七百七十五年)

開龍が千四百九十二年を以て新大陸を發見するや基督教宣傳の機亦實に此に開けしなり、西班牙僧侶は西班牙兵士と共に各地を彷彿し、尙ほフージナンド及イサペラの探險者等も人跡遠き不毛の荒野迄も蹈入りたり、十五、十六兩世紀の交には佛國人及西班牙人は茲土の二大占有者にして、此廣大無邊なる新世界の住民は總

じて亞米利加印度人と呼ばれたり、彼等は果して何れの時、何れの地より來りしものか、今や漠として釋ぬるに由なし、或はイスレールの遺族といひ、古代西部亞細亞の流民といひ、固より確たる憑據なし、彼は一樣に白人種によりて開發せらるゝを好まず、何れの所に於ても、歐洲文明の進潮に反抗して已ます、されば時に基督教に歸依するものなきに非るも、多數の場合にては、全然の失敗なり、彼等も時に或は傳道師の説教に傾聴し、或は之と議論し、洗禮を受けしめんとて、其子女を托する事あるも、彼等は忽ち怒りて劍を提げ來り、白人と改宗者とを併せて逆殺するを例とせり、

千六百年代の初には、メーンよりジョージアに至る大西洋岸には一人の白人も住居せざりき、之より十年の後、歐洲にては二大事件發生し、其影響に依りて茲に蠻族を一掃し、新大陸を開拓すべき好機會こそ來りたれ、二大事件とは何ぞ、(一)千六百四年八月十六日を以て西英の平和條約締結せらる、(二)英國教會は其非國教者に對して大に壓窄を勵行したる事是なり、殆ど一世紀間英國は陸海戰爭に係はり居れり、此時期に於て英國には武門武士なる一階級を生じ、彼等は事に戰役に従ふといふ

よりも實際上先天的の武士水兵なりき、一旦平和恢復に及び彼等は其職業を失ひたり英國は固よりかゝる粗豪懶惰の民を容るゝには餘りに貧なりしを以て彼等は眼を新大陸に轉じ殖民地平定の爲にとて茲土に來れり、他方には恐かなる新教徒壓窄令の火の手を高むるありて一層移住者を奨励せり、當時英國に於ける宗教界の狼籍は已に前々章に於て之を述べたるが高潔なる信徒は其迫害に堪へずして海外に新國民新教會を建立せんとて陸續父母の國を去りて新大陸へとは渡來せり、

先是閣龍が新大陸の存在を發見するや、時の羅馬法王アレキサンダー六世は其諭達を以て西半球はフーシナンド及イサベラの王國に隸屬すべきものとせられたり、されど此の如き空文は直に俠勇なる英國々民が鐵脚の下に棄却せられたり、マルチン、フロビシエルは千五百七十八年を以て新世界に遠征を試みしが此時ウルフールといへる一牧師を陪乘せしめたり、ウルフールは米國に於て英國の祈禱書を施行せる最初の人ならんと傳へらる、其翌年サー、フランシス、ドレークは今のカリフォルニア地方の海岸を發見したるが彼と同乘せる附屬牧師フランシス、フ

レッチャーは茲に英國祈禱書に依りて禮拜式を行ひたるもの蓋し今日の米國合衆國と稱する圈内に於ての嚆矢なり、時に印度人の一團は此奇異なる禮式を見んとて群集せしが深く感動したるもの、如くなりしといへり、千八百九十二年七月二十六日にカリフォルニアの現監督は簡單なる禮拜式を行ひたる後、右フレツチャーが嘗て始めて禮拜式を行ひたるらんと意思せらるゝ、ドレーク灣のレエース、ヘッ下の東岬に十字標を建てたり、英國殖民地の爲に始めてサー、ハムフレ、ギルバードは證狀授與されたるは千五百八十三年なり、其の最も明かなる目的の一は此茫然たる大陸に神の旨を傳播せんとするに在り、而して之に附帶せる一條件として殖民地の法律は英本國教會に於ける真正なる基督教徒の信仰と矛盾する事なかるべしといふに在り、吾人は今左に各國々民が新大陸の殖民に勉たる當初の狀況に就て述ぶる所あるべし、

(A) 英國

英國が始めて殖民地開拓に従事したるは千五百八十五年なり、此時サー、ラルター、ラレーは主として罷職兵士なる百五十名を以て一團を組織し、自己の費用を以て

米國の東岸ロイクに新故郷を發見せん爲め之を派遣したり時の處女女王エリサ
 ベスの名譽に於て之をヴァージニアとは命名せり今日ヴァージニアと呼ばる、
 地方は蓋し英國の教會及國家の移植されたる最初の殖民地にしてラレーの遠征
 は特別なる効果を見るに至らざりしが千六百七十年に至り更に堂々たるヴァージ
 ニア會社を編成し其保護者及會員には大僧正貴族高等官吏且つ商人あり遠征の
 軍事提督には其頃君士坦堡にて土耳其人と奮闘したるを以て其驍名高き大膽な
 る甲比丹ジョン・スミス之に當り牧師には善智識ロバート・ハント乗り込み國民の
 祈禱を負うて遠征艦隊は出帆したり彼等はロアノクに上陸しラレーが未遂の事
 業を繼續せんと欲せしも偶々航路を失し同年四月チニサビーク灣に到着せり此
 殖民地の時の英王ジェームス一世の名に依りてジェームスタウンと呼びたり上
 陸するや第一着として彼等は跪坐して祈禱を捧げ水上の無事を上帝に感謝する
 に在りき彼等は住家と同時に教會をば形ばかりに建設し同年六月二十一日に始
 めて聖餐式を行ひり英本國より渡來せる移住民に配偶を供するは當時會社が移
 民奨励の一策にして又相繼いで渡來せる多數の牧師等は印度人の精神的教化と

いふの點に於て大に力め印度人の子女は文明化せしめ基督教化せしめんが爲に
 白人の家に同居せるが多く彼の有名なる酋長ポーハタンの愛娘ポカホントスは
 此方法に依りて保護されしなり此時當殖民地に在りし獨夫ジョン・ロルフは深く
 ポカホントスが容姿の清艶朗發なるに動かされ彼の女をして改宗せしめ以て之
 と結婚せんとするに至りたり印度人に對する事業は其初め有望なりしに其有望
 なる最中に於て突然にも往年の印度人改宗談は反覆されたり即ち奸惡なる蠻族
 は千六百二十二年五月二十二日猛然として襲ひ來り大逆殺を行へり是に於て白
 人及改宗者の斬られたるもの算なく宣敎事業は再び茲に一頓挫を來せり然れど
 もヴァージニアの殖民者は直に其勢力を挽回しポーハタンによりて其虎口を免
 れたる申比丹ジョン・スミスは其女ポカホントスを通じて印度人を退陣せしめ僅
 に白人を救ふを得たり已にして數千人の移住民は此地に渡來し之より新殖民地
 は開かれ新教會は建立されたり千六百十九年には亞米利加に於ける最初の代表
 自由會議を開く此時和蘭船亞弗利加の黒奴を乗せてジェームスタウンに着せり
 この報あり

扱て殖民地の牧師は少なくも一年一回は各自其定住所にて説教し病の危篤なるものあらば何人にも訪問し少なくも一年三回は聖餐式を舉行し而して酒は飲むも亂に至らず若しくは雙陸も之に錢を賭す事なかるべしとせり總て俸給境遇一般生活上の程度は極めて質朴に無爲にして治まるの風ありしが移住者次第に増加するに及んで右の風は漸く破れたり純然たる神國の民其まゝの子女の美風も今は冒險者投機者之に代はり聖牧師の道徳亦弛緩し傳道の熱誠も徐に殖民地外に逸したり而かも殖民地は平和安全に且つ繁昌に赴き教會と英王とに對する忠順の念は未だ變ずるなくクロームエルの下に共和政府起るもヴァージニアの移住民は英國の非國教徒を拒絶しチャールズ二世の時に回復せる時も宗教上の制裁に就ては決して攪亂せざらん事を期せり十八世紀の初に當りヴァージニア教會は法律を以て認められ之を要するに殖民地の本山として存続したり、

(B) 清教徒

清教徒が英國の教會に如何に特殊なる精神を發拜したるかは吾人の既に述べたる所なり先に國王は同時に教會の元首たるべしといふに歸したるが是れ清教徒

が到底肯んずる能はざる所にして嘗に非基督教徒と爲すのみか此の如きは惡魔の教義なりとするものなり而して此の如き教義を持して極めて其壓迫を逞うす海外に新故郷を求めんとするは自然の勢なり清教徒が初めて亞米利加に殖民地を開きたるは千六百二十九年マツサチューセツツ灣に上陸せるものにて新英倫は蓋し其根據たり同教徒の先發隊メーフラワー號に依りて所謂ピルグリム、フーザーズの一團千六百二十年中に此地のプリマウス灣に上陸し苦慘なる生涯を送りし事は歴史に明かなる所なり扱て彼等を率ゐたる牧師は英國教會の一僧ジョン、ロビンソンにて彼等は嘗て信教の自由を得んとて一度は故國を去て和蘭に逃れしが此地は英國と毫も撰ぶ所なきを見再轉して新大陸へ航行の志を起せし者なり此一殖民地にては神の國と君主の國とは差別ありとし人は各自其然るべき一方に忠順なるべしと教ゆるなり新英倫の特殊なる生涯と性格とは實に此種の理想より發展せしと謂ふを得べし彼等の總員は實に二百五十名而して彼等は全く精神上の天國を求めんが爲に此土に渡來せしなるに如何して後年本國に對して不平の劍を把るには至りしか他なし彼等が國家と教會との原理を遂行せんが爲

なり、彼等の初めて渡米するや、以爲らく彼等も亦其會員の一部たる本國教會の教義は新故郷の教義と相容れざるを如何と彼等は相率ゐて其本國と教會とに反きたり、是に於て彼等は斷然理想的天地に突進し英國に於ては教會は國家の一部なるに、今や清教徒は教會を建立し、國家は單に其教會に關係すとの主義に依れり、斯く彼等は主義の上に格闘したるのみならず、氣候の嚴烈なる土地の不毛なる地、彼等の心身を苦しめたり、然れども此等の障害に關せず、殖民地は次第に發達し、同世紀の中葉には、五十餘の町村あり、牧師官吏の峭直熱誠なる人民の敬虔眞摯なる、總て清教徒の梯を宿したり、此殖民地に於ては當初より、教會の淳朴なる會員の外は市民たるの權利なき者と決議し、此等の市民のみ、住居し、且つ土地を所有すと爲せり、されば羅馬教徒及クエーカー宗教は皆追放せられ、若し再歸するあれば處刑せられたり、安息日には疾驅し若しくは步行するを禁じ、室内庖厨を掃除し又は剃髮する事も禁じたり、加之當日は慈母をして其愛子に接吻する事も勿れかしと勸めたり、若し耶蘇降誕祭に於て之を犯さば罰金科料に處せられ、公の禮拜式に缺席しなば罰金答刑等に處せらるべき宗規なり、骨牌雙六類は殖民地に輸入するを

禁じ殊に嚴格に賭博を禁じたり、街上に於て婦女子に接吻するは假令清淨なる挨拶なるものとても容赦するなく、舞踏戲と共に答刑に處せられる、又女子は男子の如く剪髮を禁せられ、所屬牧師に就て非議するあれば甚しきは其舌端を緊縛するの刑をさへ設けたり、かゝる專制的風紀の下に、彼等は其嚴肅なる生涯を營みしなり、千六百八十年には清教徒等は同殖民地内に於ける宗教上の反對派を一掃する事となり、バプチスト派はロード、アイランドに逐はれ、クエーカー派は答刑に處せられて、且つ荒原地方に逐はれ、總ての信徒は清教徒の教義に従ふか否すんば放逐の二者一を撰ぶべきを以て迫られたり、然るに此等清教徒の繼續者等は其祖先の子メシスとなれり、一時王室に對抗してクロームエルに黨せしが、クロームエルの共和政倒る、に及んで清教徒の神國は數年間苦闘の後終に破壊せられ、法律に依り英國々教の下に服したり、千六百八十八年オレンジ公ウイリアム王位に登るや、清教徒は勝利の時機再來せりと信じ、即ち英國の大守を幽し、教會の扉戸を破り、將に世は狂亂の巻に歸らんと

りせ、然るに彼等は忽ちにしてカルビン主義のオレンジ公は既に過激なる新教者に與みせざるを見たり、寧ろ過激なる舊教者に加擔せんとするを見たり、是に於て清教徒は再び暗淡たる狂屈の生涯に歸れり、教勢の消長此の如しと雖も、爾來新英倫の教會は着々として發達し、彼等の祖先の經營は綿々其眞精神を傳へて今日に至れり、

(C) 羅馬加特力教徒

英國教會の壓奪を遁れんとて清教徒の新英倫に渡來せしに當り、其極端の反對派なる羅馬加特力教徒も亦社會上政治上に於ける其無能を掩はんとてか、又新世界の殖民地開拓を企てたり、先にジエームス一世の時、バルチモア卿となりしジョージ、カルヴァードは主として今のメリーランド地方の事を管せしが、其の死後は其の子たるレオナード、カルヴァード之を繼きたり、偶々英國より渡來せんとする移住者を迎へん爲め、無慮百人は此殖民地に會せしが、右の移住者は颶風の爲め、ボトマツク川に漂着し、千六百三十四年マリア蒙喜祭(三月二十五)の祭日を以て上陸し、此遠征隊に従ひしジエスイットの長老二人、供養式を擧げたりと稱せらる、此殖

民地の建設は清教徒の精神とは大に其趣を異にせり、彼等は特加力教徒といはんよりは寧ろ羅馬教徒にして、加特力教徒羅馬教徒の前には更に英國人たるを失はざりき、カルヴァードは固より一個の貴族なる事とて異教排撃といふの一點に於ては其意思をも勢力を有せざりしなり、此等の羅馬加特力教徒は寛待を以て徳義と見たりといはんよりは避くべからざる事實の前に叩頭するを賢なりと爲せしの徒なり、彼等は此の如く如才なきを以て若し新教徒に打撃を加へなば清教徒クエーカー宗徒及バプチスト宗徒等の聯合打撃を受けん事を知れり、かくせば舊教徒等は海外に打拂はれん事をも知れり、而して其準備は完全に土地は豊沃に氣候は融和なるに拘はらず、羅馬派の殖民地が其員數に於て増加の遲々たりしは何ぞ其理由の、一は本國より引致すべき羅馬教徒少數なりしに在るべし、されば時代の経過するに従ひ、加増したる移住民の多數は新教徒にして、十七世紀の末造には舊教徒は新教徒の十分一に過ぎざるに至れり、此の如く舊教徒の領域は狭かりしも、其殖民事務は整然羅馬教徒の手に依りて調理されたり、然るに十七世紀に終りに至り、カルヴァートの所轄地は羅馬教より新教主義に豹變したりしかば、此豹變は彼等

が没法律没信仰の性格を濟度するには至らざりき、

(C) 和蘭人

吾人が上來述ぶる所の米國移住者は主に宗教上の感激に出でたるものなり、即ち内國に於ける宗教上の壓迫を避くるか否すんば新大陸に福音を宣傳せんとする在り、吾人の今茲に述べんとする和蘭人の運動亦偶然に宗教改革に關係せるもの、一例なり、由來チザールランド地方は歐洲中歴史的の戰場にして、此時和蘭人は正に其自由の爲に西班牙軍と戦ひつゝありしなり、其戦ふや獨り國境に於てのみならず、遠隔の殖民地に於て嫉視し争奪して已まざりき、偶々英國の一般長ヘンリー、ハドソンなるものあり、剛勇なる和蘭の水夫を率ゐ、印度に於ける西班牙の領土を劫掠せんが爲に出發せり、千六百九年九月新約克のサンデー、フークの灣内に投錨し、此處をばシンガポールの對岸なりと思考せり、されば彼等がマラツカの地峽なりと見しは後年發見者の名に依りて襲へるハドソン川なりしなり、是に於てか、彼等が當初の戦争の使命は忽ち商業とは一變したり、茲土や森に、獸類多く、獸に毛皮の貴重なるが多し、殊に印度人の交易は容易にして利益ありしかば、遠征隊は豊富なる

新大陸の産物を載せて和蘭に歸航せり、同様の商業遠征は重ねて和蘭より來れり、千六百十九年には和蘭人の西印度會社組織せられ、千六百二十五年には三十の家族到着し、之より五年の後最初の牧師渡來し、聖餐式に加はるべき者五十人を生じたり、其殖民地はハドソンの上流に擴張し、東方は清教徒と近接する迄に達したり、已にして和蘭人の占領せる殖民地は英領に屬せるものなる事發見せられたり、此殖民地返付に就ては和蘭人は政治上に於ては之に反抗し、千六百六十四年九月チヤールレス二世の連枝たるヨーク公の指揮の下に英國艦隊がマンハッタン港に表はれし當時にも其状態は依然として繼續せり、英人は蘭人に對して亂暴狼籍を極めたるも強硬なる蘭人は尙ほ其土地を支持したり、然るに其結果として彼等は英人と相並びて三十年の間、羅馬馬加特力教徒、ヒューゲノット宗徒、バプテスト宗徒及クエーカー宗徒を尊拜したり、蓋し此の如き異教徒寛待は諸殖民地に於て未だ聞かざる所なり、然るに和蘭人は其本國に於ける狀況如何と見るに、彼等は異教徒寛待の爲め殊に痛楚なる經驗を爲せり、彼等の米國に來るや敢て後辯の爲にはあらざりき、彼等はプレスビテア宗教としてニューアムステルダムを建設したれども、近時英

國教會に反對したる所謂プレスビテリア宗とは甚だ其趣を異にせり、げにや此等の和蘭人は英人に反對なりとは思ひせざりしにて、オレンジ公キリアムは和蘭人並に英人の國君にして、彼等は唯英語を用語とせざりしのみにてはなく、而かも英國の信條を採用せしなり、同王が容易に監督教會員たりしに、何故に彼等は爾かせざりしか、和蘭人が殖民地に於て英國教會と聯合するは決して至難の業にはあらざりしなり、

(E) 瑞典人

歴史上に大名を刻みたるもの、一人なる瑞典王がスタヴァス、アドルフアスが其大業未だ成らずして逝くや、其大法官たるオクセンスタインは其後を受けたり、彼は先づ眸を海外に放ち、瑞典新教徒をして羅馬教徒の蠻行を免れしめ、歐洲の他の先進たると共に其歩武を調へんが爲に新大陸の大原が屈強なる樂園なるを見たり、茲に於て移住民の一隊は千六百三十七年を以て出發し、デラキアのキルシントンに上陸せり、彼等は宗教上の系統よりすればルーテル派のエピスコーパールなりければ、彼等はヒラデルヒア及キルミントンに於ては英國教會と一致したり

然れども彼等はバドソン河上の和蘭人とは當初より相敵視し、和蘭人は新アムステルダムより屢次遠征隊を派遣し、以て瑞典人を逐はんと試みたり、此時英人は瑞典人の間に介し、一戰闘なくして二者を和解し、其結果已に成立したる僅少の瑞典教域は自然英國教會に吸収せらる、事となり、之よりして瑞典の殖民地は勢ひ其存在を失ふに至りたり、

(F) クエーカー宗徒

デラエア川に添へる運動に就ては吾人尙ほ更に記憶すべきものあり、ライセスター、シャイアの一機職師の子なるジョージ、フォックスは千六百四十年田園に牧羊者たる間に靈夢を夢み、且つ幻影を見る事ありしが、是れ彼が正に峻刻なる爭論辯難の生涯に入らんとするの時なり、外には宗教改革の爲に世論の翬々たるあり、人は刑式に議論に信條に仇なる路に踏み迷へる時、フォックスは大悟徹底能く内なる精靈を見たり、故に彼は叫んで曰く、人能く内を透視し、精靈に感ずる事を得は何ぞ博士、説教師、僧侶、聖餐式若しくは寧ろ教會をも顧みるを要せんやと、フォックスの觀念は大に當代民衆の情感を動かし、殆ど全英國を一掃したるの概あり、彼等は

曰く「光明内に輝く時我等は實に畏懼し且つ戦慄すと、之より人は彼の徒を稱して「クエーカー」といへるなり、已にして其教義漸く伸張するに及び頗る危険なる分子を傳播するに至りしかば當時の社會上及國家の勢力は務めて之を壓迫せんとせしより、彼等は殆ど之が爲に狂奔したり、彼等は蘇格蘭愛蘭西印度及北米殖民地を見舞ひ、到る處に狂叫し且つ狂叫せり、或は婦人の裸體のまゝ、姻媒及び繪具を以て塗抹して街上に逍遙し英國教會又は新英倫會集所等に入込みたり、或はクロームエルの前に於て彼に反するの證なりとして帽子を寸斷せるものもあり、已にして一時は五千人程の入獄せられたるものあり、彼等は笞たれ、衝かれ、水に投せられ、終りには絞殺せられたり、社會の迫害此の如く峻烈なるより、彼等は寧ろ内に深く鑑みる所あり、是に於てか一變して靜肅忠實なる市民となり、歐洲の他の不平種族と一般、西方の宣教に着目せり、千六百七十三年にはフォックス等自ら米國に渡來し、メーソンよりサウス、カロリナ迄を旅行し以て此宗派の本山開設又従事せり而して彼は到る處眞に神より送られたる救世者なりと仰視せらるゝ、を見たり、由て彼は英國に歸航し茲に「フレンヅ」と稱する移民團體を形成り千六百七十五年ニユージ

ヤーセーのサレムに上陸し此地に其根據を据えたり、殖民地は信教の自由の爲には唯一の避難所なり、クエーカー宗徒は各地よりサレムの殖民地に集まりしが彼等の運動は同宗の信徒等ウィリアムベンの率ゐたる一團體の之に加はるに及んで一層の氣焰を揚げたり、ベンは年甫めて十六正に牛津堡に在りし時、大にクエーカーの説教師に動かされ、直に所謂「内的光明」なるものを見たり、是より彼は一生を新派の教義に殉せんと決心したり、彼の師友は力めて此決心を翻さしめんとせしも無益なりき、彼の父頑固なる英國の老提督は彼を叱責し脅迫し甚しきは之を打ち懲したるも少ウィリアムは毅然として此決心を守れり、彼の父は已むなく彼を佛廷に送り、其華美の風俗を見せしめば或は思ひきクエーカー主義より愛兒を斷つを得んかと思へり、ベンは實に一個夢想的クエーカー少年として大陸に行けり、然るに彼は完全なるクエーカー紳士として歸國せり、彼は佛國に在るや其樂しき社會の風情を學び、瑞士大學に遊ぶやカルビン主義を修得せしなり、ラインに在るや更に日耳曼の教風に感じて尙ほ其所信を固うし英國に歸れる時は彼は一個佛國風の紳士なる外に又哲學者たり、神學者たり、語學者として、は三國語の外に二死語に

通じ舞踏の如きも亦極めて妙にして且つ恐らく歐洲第一の劍客たりしかど而かも依然として「クエーカー」なり多額なる父の遺産を繼承せし後彼は之をば己れの歸依せる宗派の爲に投せんと決心せり即ち千六百八十一年ペンは其移民團を整備してデラウェアに航しサレムの殖民地に過ぎり而して今日のヒラデルヒア市附近に殖民地を開きたる、ヒラデルヒアは彼の命名に係はる彼れが印度人に對する名譽ある條約は極めて宗教的に兩者の利益を保證したりと稱せらるゝものにて此地方は北部西米利加に於て蠻人の逆殺に遇はざる唯一の殖民地なりクエーカーの殖民地は峻々として發達し英國よりエールスより更に日耳曼よりペンの殖民地に來り其膨脹に盡力するもの多し、ペンば以爲らくクエーカー國を建設せんかど然れども爾後外國より新應援者を得るに失敗し從て其殖民地も一頓挫を來し生長よりは却て凋落の運に向へたり願ふにクエーカー宗は一時の世運に反抗して預りたる一個の幻想なり焉を能く其生命を長うするを得ん宜なるかな今は全く歴史上の一事蹟に止まる事や、

(G) カロリナス、

カロリナスとは北米の二洲(南と北と)の負へる名にて佛國のヒューゲノット宗徒が佛王シャール九世の名譽に於て呼びたる稱號なり然れども一般に英のチャールス一世が千六百二十九年此地方一帯をサー、ロバート、ミースの管轄に付したる當時王自ら此名を附與したるものなりとせらる而して此殖民地の起源は千六百六十五年にアルベアール及クラレンドンの不朽の殖民地始まりし以後の事にて此のアルベアール及クラレンドンの准許狀は千六百六十三年に於て初めて貴族所有者等に下りしものにて此准許狀にては信教は社會の平和を攪亂せざる限りに於て其自由を許されたるものなり千六百六十九年カロリナ洲の根本憲法なるもの、制定されたるが此憲法は有名なる哲學者レヨン、ロツクの主として執筆する所に係る然れども此憲法中の規定は實際政府の舉行すべからざる計畫に屬するもの多かりしが又此洲に於ける英國教會の建立の準備の如きも含有されたりクラレンドンの殖民の間もなく消滅しアルベアール殖民地のみ獨り存続したるが是れ北カロリナとして知らるゝ者にて其南方に當れるアシレー川殖民地は南カロリナとして呼ばるゝに至れり千六百七十二年にはチャールス二世の名譽と

して、チャールレストンはアシレー川殖民地中に不朽に建立せらるゝ事となれり此際宗教制度に於ては混淆を極め和蘭人は新約克より來り、黒奴は千六百七十一年に輸入せられ、英國蘇國及愛國の移住者は一千六百八十三年に於て渡來し佛國のヒューゲノット宗徒の多數はナンテスの勅諭の廢止の結果として千六百八十五年クーパー川に移住するもの多し此のヒューゲノット宗教の移住は同洲の教勢に大影響を及ぼし當初は單に新要素を加へたるに過ぎざりしも二十餘年の後には同洲牧師の性格に一特徴を發展するに至りたる之が爲なり、千六百八十年には聖ヒリツプ及アトキンウィリアムソンと稱する教會建立せらるゝサムエル、トーマスは千七百二年に「ウエチレーブル、ソサイエチー」より派遣されたる最初の牧師にして人となり端嚴清廉時の没信仰なる人民中に道德的刷新を爲したるの功甚だ大なりしが不幸彼の此に居りしは僅かに三年に過ぎざりき、レジエアンは彼に繼げり吾人は彼の時代に於て同洲の教會が印度に對して施設する所ありしを見たり、千七百十三年には土人ヤモニーなるもの基督教を研究せんが爲に英國に遊學し、二年の後、一個の基督教徒として本土に歸れり、かゝる好況も印度人毎度の襲來にて

一蹶地に塗れ、千七百十五年には移住民の多數は之が爲に逆殺せられたり、千七百二十九年に至り、此に殖民地は王領に歸して南北カロリナの二洲に區劃せられ、二名の太守の下に分治せらるゝ事となれり、此時に方り兩殖民地には三十八名の牧師教職に執掌し、千七百七十六年革命戦争起るに際しては南カロリナ丈にて九十名の増加を見たり、されば教會は本洲に於ける勢力及感化の中心たりし事論なきなり、

(H) ジョージアの教會

吾人は今や英國十三殖民地中英國教會の最後の根據とも云ふべきジョージアの教會の由來に就て述べんとす、前段の諸州教會は其成立に至る迄に幾多各種の勢力の混成に出づるもの多し、然れどもジョージア州殖民地は純潔なる慈善の爲に建立されたるものにて其創立者は英國議會の一員たりしジェームス、エドワード、オグレンツークにして當代寧ろ何れの時代に於ても優に慈善家中の最大慈善家として許すに足るの人なり、彼は嘗て監獄改良會長たりし事あり、一日英國の獄舎を巡覽せしが獄中負債の爲に禁錮されたるもの多數を占むるを見て感動する所あり

り彼の義侠心に富めるか、る不幸の人々を移して殖民地を建設せば彼等は再び
 不有用の市民たるを得べしと爲し、ジョージ二世に哀訴し、サヴェンナ及アルタマ
 は二川間一帯の地方に於て殖民地を開拓する事を許されたり、此美舉を聞いてオ
 クレンソーフに協力するもの亦少なからず、是に於て彼等は先づ債主と交渉して囚
 徒を放釋し、以て之を新大陸に輸送する事に幹旋し、信教の自由に就ては羅馬教徒
 の外は總て之を許し、精酒類は一切之を嚴禁したり、オグレンソーフは第一回移民者
 百三十人と共に渡來し、千七百三十二年十一月南カロリナのチャールストンに上
 陸し、陸路サヴェンナ川に添ひ、今のサヴェンナ市の地方迄進みたり、法教師としては
 シリーヘルベート、博士同行せしが、數箇月の後不幸にして斃れ、ウエチレーブル、ソサ
 イエチイはレヴ、サムエルクインシーを以て之に補したり、
 此頃サヴェンナ開拓者中に二人の兄弟渡來せり、其名は忽ちにして新舊二大陸に鳴
 りたる、ジョン、及チャールレス、エスレー即ち是なり、エスレーは蓋し深くオグレンソー
 プの新經營に感じて起ちたるもの、千七百三十五年二月を以て此地に着し、チャー
 レスエスレーは居をフレデリックの一小都に卜し、茲に嚴肅なる都會規律を立て

以て之を教化せんとすの決心なりしが庶民は多く彼に就て知る所あらず、是に於て
 フレデリカの市民は濟度すべからず、精神的盲目なりと看破してか間もなく英國
 に歸帆せり、ジョン、エスレーは千七百三十五年三月七日よりサヴェンナに於て教務
 を開始したれども他に一人の聖職を負ふ補助者あるなく、チャールレス同様の所感
 なきにあらざりしが奉公の念他なく、只管牧羊者を以て住し居れり、住民は絶えず、
 祈禱と説教とに會集し、彼は之に高潔なる靈の生涯を導けり、然るに彼が忽にして
 住民との間に衝突を來せしは、少しく怪訝に堪へざるが如きものあり、彼が殖民地
 に於ける功勞は實に没すべからざるものあるに、彼は其中心は羅馬教徒なりとさ
 へ罪を歸せられんとするあり、而してウエスレート住民との不和は更に彼が教會所
 屬の一女子を愛戀し、其女子がエスレーの豫望に反し、他に嫁するに及びて、其衝突
 を早められたり、失望せる監督教師は此破綻を以て他に縁固の存すべきものあり
 と自ら許るし、遂に右の女子をば己れの管轄より破門したり、是に於て其夫なる某
 は自己の妻の名譽を毀傷するものなりとて、資をエスレーに歸し、彼をば判廷に告
 發せんとするに至りたり、然るに事務局の決定せらるゝに、先ちエスレーは千七百三

十七年十二月二十二日是を忘思の地に洗うて英國に歸航し二十一ヶ月郷土に滯留せり、エスレー英國に歸航するに際し、エスレーと共に有名なるジョージ、ホキツテフイールドはジョージアの殖民地に向へたり彼は牛津堡に在りし時能くエスレー兄弟と友とし善く今やエスレーの招きに應じ、殖民地傳道の爲に渡航せるなり、ホキツテフイールド英國教會に於ける立身の途は既に大に開け居りしに彼が有爲の資碌々此に在るを屑しとせず爲に之を辭して千七百三十七年十二月英國を發し翌年五月サヴァンナに着したり、ホキツテフイールドは其熱誠に於て智力に於て信行に於てエスレーに劣る所なかりしのみか彼は幸にして常識に富みたり、されど彼は到る處人望を博し大に衆民の信任と敬愛とを受けたり、病めるもの、貧しきものは之を慈み孤子の擘然たるものあれば之を保護し教育せん爲に孤兒院を建て彼は之をベセスダ、カレージと命名し、其寄附金としての集金額十六萬圓の中三萬二千圓は彼の囊中より義捐せるものに係り、彼の初め米國に来るや僅に一個の副牧師なりしが、英國に歸るやダグウセスターの僧正より長老に撰ばれ、ジョージアに再歸するやジョン、エスレーの執掌せるサヴァンナ、クライスト、チャ

ーチの督監牧師と爲れり、此時彼は人名の協力者を伴ひ孤兒院は爲に寄附金十萬圓を齎らせり、此計畫が殖民地に於て極めて重大なる事業たりしは言ふ迄もなき事なるが彼は此規模を擴張して大學とせずんば已まざりき然れども彼の事業の恰も成就せる曉に於て彼は歿し千七百七十年而して西亞米利加大革命は直に云々繼いで起り此大戦亂の爲に彼の全事業は殆ど滅盡に歸する事となりしは惜しむべきなり、戦亂中ジョージアの教會は又實際の上には隠没し、ウエチシール、ソサイエチーは其境域中に十三名の傳道師を派し其中にエスレー兄弟もありしかど其効果を收むる事少かりき概して本洲に於ける英國教會は州民の上にて何等顯著なる成績を見ざるもの、如し、

吾人は前段に於て米國各殖民地に於ける英國教會の建立に就き成敗の概況を縷述したり、扱て米國大革命破裂し殖民地が其教會より獨立するに當り如何の變動を米國の社會に及ぼしたるが以下逐次之を説くべし、

(1) 神聖組合

米國に於ける教勢に於て遺憾とする所は監督教會の衰微是れなり、上段述ぶる所

の諸教會の歴史に依る教會の勢力は國家の強力と相關連し其教會生涯も程度低く且つ教會の進歩も遅々たりし事を記憶せん米國教會の一種の情實といふは英國の牧師の負債を免れん爲め新大陸に逃れたるものが教會を其避難所となし本國に在る朋友等は彼等が斯くして殖民地の教職に就けるを見て喜びたり是れ其調子の高からざるもの多き所以か他の不幸は殖民地の教會は久しく其主宰を缺き居りし事にて一人の僧正もなく又は一時假りに英國より渡來し居りしに過ぎざれば道徳上の修養宗教上の秩序に於て少しも統率せらるゝ事なくして經過せしなり、ハーバート、エール及ブリンストン等の諸大學はコングレゲーション宗徒及プレスビテリア宗徒の善智識大學匠を教育せんが爲に夙に建設せられたるものなるも特別に教會學校として建立されたるものは革命戦争の三十年中に起りたりキングス大學及キリアム及メリーの大學を以て權輿とするなり、米國の監督教會が各殖民地に監牧師を派するの力なきを見るや英國の教會法中其正に熱心なる傳道師なきには非りき千六百六十九年博士トーマス、ブレイは基督教徒の智識を増進すべき組合を編成したるが其目的は主として米國の殖民地

に斯道の人才を供給せんとするに在り千七百一年に同人は更に倫敦に外國地方に福音を宣傳すべき組合を編成したるが此國體が率先して新大陸の教界に貢獻したる事の大きなるは歴史上明かなる事實なり此組合の第一回は大監督テニソンの住るラムベス宮に於て開會し數名の知名の僧正牧師學者等列席せり米國の教會は決して此忠實に且つ間斷なく新大陸教勢の保護に盡力せし此國體の恩を忘るべからず第一發の傳道師はジョージ、キエスにして元來はクエーカー宗なりしが聖餐禮に關する見解を殊にしたるが爲め後ち之を去れり殆ど四十年間に大約百の教會を建立し一萬部の聖書及祈禱書を出版し其教域は黒奴及印度人に迄波及せり四十年の後米國大革命の結果米國教會が本國教會より獨立の形體を存するに至る迄此神聖組合が正式に傳道師として米國に教役に服せしもの三百十八教務の中央本部とも見るべきもの二百二箇所之に消費せし金額は一千萬圓に上れりといへり、

(2) 個人的感化

米國殖民地の諸教會を通じ個人的感化の大なるもの恐らくデイン、ジョージ、バ

ークレー其人に如くものあらざるべし。彼は詩人にして哲學者且つ高僧たるの名譽を負ふものなり。彼は愛蘭ダブリン大學の出身にして早くより哲學に通達せるを以て名あり。歐洲大陸にて教年間社會問題を研究せし後バークレーは一鐵案に歸着したり。并は人類最上の希望は漸を追うて舊世界より新世界に轉進するに在り。此哲學觀を實行せん爲め彼は西半球に基督教大學を建立せんと欲し千七百二十九年を以てロード、アイランドのニューポートに來り此計畫を成就せんが爲に一生を賭せんと決心せり。此等は英國に於て非常の人氣を博し之を幫助せるの人甚だ少からず。餘りに熱心なりしバークレーは獨り此事業を遂ぐるに堪へず更に國家の保護を仰がんと求めたり。時に英國總理大臣たるサーロバートワルポールは政府より二十萬圓の保護金を下付せんと約束したるが此金額はバークレーが其大學の基礎成立したる後に於て支拂はるべしとの事なり。然るをバークレーはフルポールより前金を受領せんとて猶豫し居しがバークレーの猶豫する程ワルポールは前儀を取て之を避けたり。是に於てワルポールは遂に勸告するに其慈善事業を中止し英國に歸航せん事を以てせり。此は千七百三十一年の事なるが此時

政府は彼に愛蘭クロインの監督職を與へ一千七百三十四年聊か慰藉する所ありしも彼は憤懣やるなく快々として樂まざりしも尙ほ千七百五十三年其死に至る迄此職に居れり。斯くバークレーは慈善的大學の計畫に於て失敗したるも彼の感化に依り米國殖民地に於て基督教の教育を奨励したる事は甚だ大なり。彼は英國に歸航して後も絶えず其教界を奨励警發し今のペンシルバニア大學、コロムビア大學等皆彼に負ふ所あるを忘るべからず。他の個人的勢力の殖民地教會の進歩に寄與したるは新英倫の清教徒カットラー、ブラウン及ジョンソン等の改宗なり。博士チモンシー、カットラーは千七百二十年にはエール大學の名譽校長にして清教徒牧師社會の外輩者なり。一友人の彼に與へし祈禱書を見て清教徒の章程の果して適法のものなりや否やを疑ひ。再後教義の由來を歴史的に研究し其結果英國教會に加盟せんと決心せり。即ち千七百三十二年に於て彼は私に受信托者を其書齋に會し彼の外改宗せる六名の友人と共に調印せる改宗旨意書を読み。彼は將來監督教會に附屬するものなる事を發表せり。此改宗の發表あるや新英倫の社會は恰も電氣に打たるが如くに感じ悲歎の聲は到る處に聞かれたりといへり。之よりして

カットラーは大學の地位をも失ふ事となり其同志者たるブラウン及ジョンソン等は誓て同一の歩調を取り英國に向て僧官の授與を求めたり清教徒の失ふ所は即ち監督教會の勢力擴張なり此等の人々を先驅として米國の監督教會は多數の非監督教徒を吸収するを得るなり

(3) 大警醒

十八世紀の中葉に當り米國殖民地は東北は清教徒の新英倫より西南ジョージア地方に至る迄宗教的大波動に冒されたり之を吾人は今大警醒と呼ぶものなるが是れ實に當時米國の社會に於ける宗教界の凋衰的傾向に對する反動なり此の信仰復活は新英倫の有名なる神學者にして説教師たるジョナサン、エドワーツの逆動より始まれり彼の熱烈なる前代清教徒の新教主義も一世紀を経ずして其氣焰自ら消盡し之に對する反動の教勢其他を成したり而して僅かに殘存せる半死の清教徒の精力も更に要なき神學上の爭論の爲に衰へ社會上には信仰の上には冷淡生活の上には緩漫の風を馴致せり此傾向を挽回せんが爲にエドワーツは一朝は喟然として歎じ憤然として起ちしなり凡そ善事を考へ且つ行ふに當り人は自ら

内に之を爲すの力を有せざるものなりと信じ彼は從來殖民地に於て聽かれざる實體論を以て天國の美地獄の闇黒及苦悶等を説きたり然るに此説教は聽衆及彼れ自身の爲に眞なる事實とはなりしなり初めは日曜日一回より三回に次に毎日に而して遂には公務を棄て、も此説教を聞かんとし天地は暗淡として救はれんが爲に我は何を爲すべきかとの聲人より人地より地方に傳はれりエドワーツは是に對して何等の答案を附したるが從來の説教師はいへり救世は正しく生涯するに由りて成ると然るに今やノーサムプトンの説教者は答へていへり救世は正しき感情より來ると而して罪あるものは永劫神の冥罰を受け正しき感情により眞の神を拜するものは罪を許され平和を得祝福なる天國を見るべしとの救世主義はマツチエーセットのノーサムプトンよりして直に四方に傳はれり彼等は更に曰く人々の地上に仆れ煩悶して横臥し一時言語の力を失ひ其四肢は音律的に震動し其間に天國と地獄とは今や事絶えなんとする人の眼に明に映じ來るに到る處奇行怪爲神の靈徴に觸れんが爲に狂奔せり此運動ジョージアに達するやジョージ、ホキツフィールドを動かせり此の如き運

動は蓋し最も好く彼の天資に適せるなり然れども彼は英國教會の牧師たりしを以て清教徒の爲めには多少の障礙なり且つ多少の差別ありしが爲に殖民地の英國教會の教徒は復活運動に加入せざるもの多しホキツテフィールド猛然として其四圍を顧みる事なく復活運動者の勇士となれり其運動の激烈なる本山なる清教徒と雖も之を補助するを拒むに至りたるにても一斑を知るべし是に於てホキツテフィールドは寧ろ嫌忌の情を發し本國に歸航し更に溫和に機敏に驚くべき才能を試みんと決心したるがエドワードと雖も彼が果して能く衆生の心を繋ぐを得べしとは信せざりしなり案の如く彼れ何の爲す所なくして歸米し更に新版圖を發見し新使命に觸着せんとか歩を轉じて印度人の蠻境に入れり以上大覚醒の結果は米國の宗教的生活に著しき影響を及ぼせり之よりして基督教界に二個の恩潮を生じエドワーズ一派の説に従へば基督教は主として實際に重きを置き而して知覺を先とし萬事感動及感情より成るとせり清教徒の此主義は凡て感激の上に生活すと爲し聖餐式の如きは殆ど之を無用視し記憶を新にする爲とせり清教主義は著るしく宗教と道德とを分つ彼等は信仰は己の信する所

を表はさざる語にして即ち所信の條規ありとす之に反し教會の論旨は信仰は基督教徒たる小兒としての生活を營むべき出發點なりとし且つ教會は總ての人が權利と分配とを得べき室家なりとし聖餐式の如きは既に得たる宗教的生涯の標號には非ずして而かも此に之を得べき方法なりとして觀察す彼等は自覺に出でたる宗教的生涯を以て最も健全なるものと爲す道德と宗教とは同一體より出づるものなれば之を區劃するを拒めり

(其二) 過渡時代に於ける米國の教勢

米國教會の過渡時代とは其建立の時代と英本國の羈絆を脱して獨立國となりし其間の時代にして此時代は幾多の點に於て最も趣味ある歴史上の一區劃なり抑も革命の後僧俗間の關係は痛く相束縛せしが其戰亂中は牧師等は僧官の授與は君主たるの故を以て一般に英本國の側に立ちたり然れども新英倫に於ては後年僧正となりしバス及パーカーの兩人は獨立軍に屬し又ニュージャージーの當初の僧正たるクロスの如きも大陸軍の中に在りしも單に個人としての關係を以て

茲に居りしなり米國教會に屬する俗徒に就ては數に於て地位に於て戰爭中其重大なる部分を占めたり、其中の首領たる人はジョージワシントンにして彼はペンシルバニアの祈禱讀手にして且つヒラデルヒアのクライスト教會の會員たり、其他ベンジャミン、フランクリン、アレキサンダーハミルトン、ロバート、モリス、ジョン、マーシャル、ジョン、ジュン、ラドドルフ、パトリック、ヘンリー等が何れも教會信徒にして米國殖民地を英國より獨立せしむるに尤も力めたるの人なり、獨立の宣告を起草せし、トーマス、ジェツフ、アーンソンの如きも亦牧師たりし人なり、且つや米國教會の憲法と亞米利加合衆國の憲法とを比較するものは二者の著るしく類似せるに驚かん然れども此類似は當時米國憲法制定に與りし委員の三分の二は牧師なりしといへば其結果の此に表はれたる寧ろ怪しむに足らざらん、而して名譽ある地位に居りたる高官顯職が其國の内外に在るを問はず教會に所縁あるの人たるを思は、如何に教會が米國の制度及主義なるものを構成するによりて力ありし事を知るに足らん、然れども米國の獨立に盡瘁せしは牧師以外の一般教徒にして牧師中には革命軍

を以て英國政府に對する一揆とさへ觀じ母國は殖民地を統治するの主權あるものと信するを以て寧ろ此信念を守らんには衆民の迫害をも之を忍ぶべしと決心せり、が、る迫害は屢々驕暴を極めたり、石塊を抛ち塵芥を投じ或は家族を追ひ甚しきは獄に投せらる、ものもあり、教會厩舎に充てらる、とあり、教壇の器物は或は盜取され破壊さる、もあり、此時代を通じ教會は總て王權黨の教會として迫害の下に苦しめられ或るものは私かに英國に通じて再び英國の天下なるべき機會を待てり、

然れども教會の重立ちたる人々は教會も亦英國より獨立して茲に國民的組織を爲すの必要を感じたり、げにや千七百四年の當初に於て此運動は新約克の二三の牧師に依りて發表せられ千七百十九年にはヴァージニアの牧師等同様の目的を以て之を合併し、千七百八十三年八月には此目的に關する重大なる運動、メリランドのアンナポリスに於て起りたり、即ち同州の牧師が、メリランドの新教派監督教會の根本的權利及自由の宣告を發表したる事是れなり、此會議の首唱者ニユーヤークのレヴェー、ピーチは翌千七百八十四年の始め書をヒラデルヒアのドクト